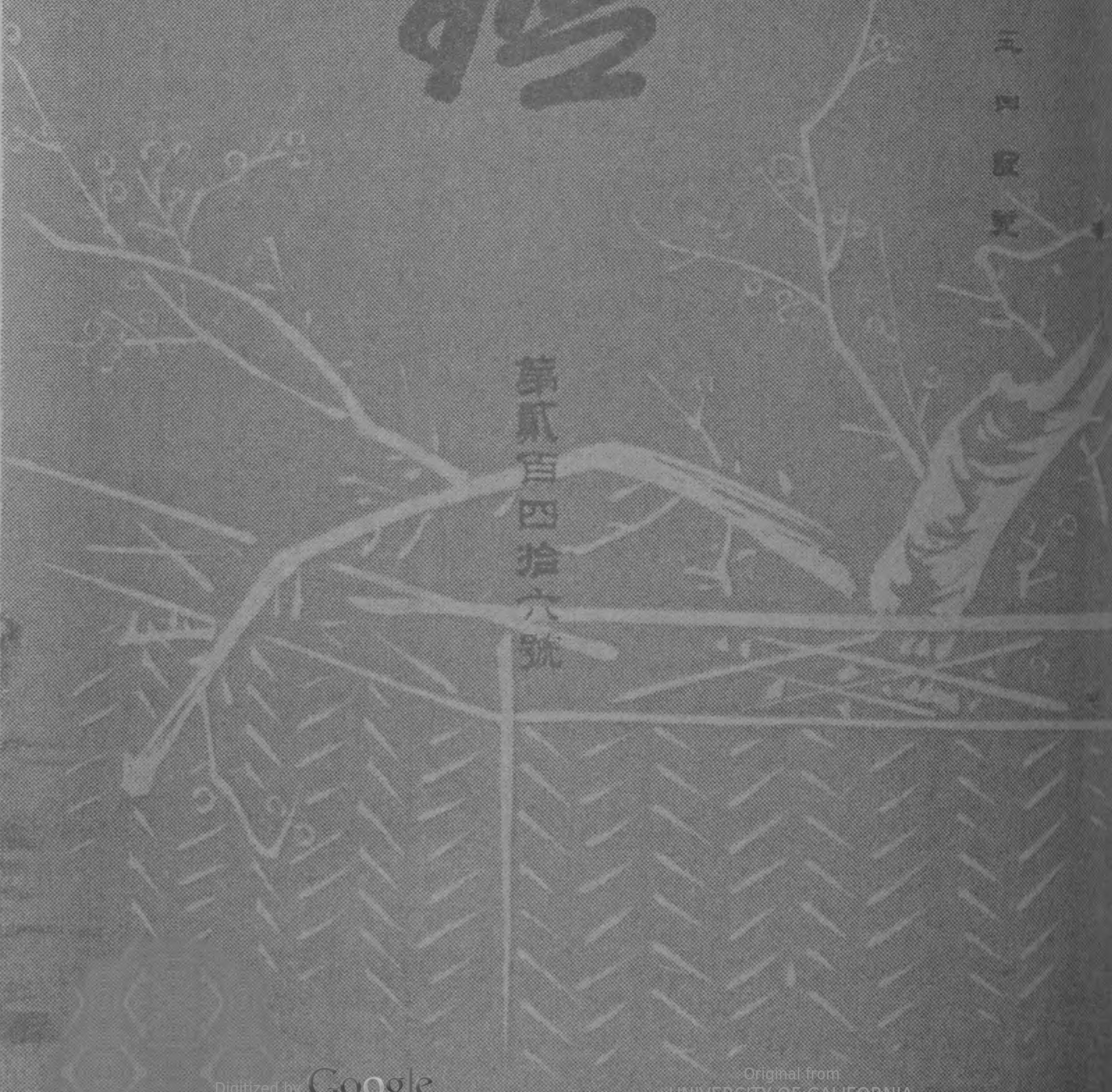
女鑑

毎月二回（五日、廿日）發行
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

明治三十五年二月五日發行

第貳百四拾六號



季節むき新柄流行品を階上階下總體に陳列いたし尚ほ御休息室をも取設おき候間おなぐさみかた〴〵御子様方おつれ遊ばされ、ゆる〳〵御遊覧なし下され度願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越し被下候はゞ即日小包郵便にて發送可仕候尚ほ註文御案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候

東京日本橋駿河町

電話
本局 特五二五
一二一七
一八六〇
二三三〇

三井呉服店

大阪高麗橋三丁目

電話東 特四七三
一六五〇

女鑑第貳百四拾六號

目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社出版部へ御直送之事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納稅の來書は一切受取申さる事。

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無郵送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年二月四日印刷
明治三十五年二月五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 川崎直衞
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 蛭木眞雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社出版部 (電話新橋二六九三番) (電話新橋特八八番)

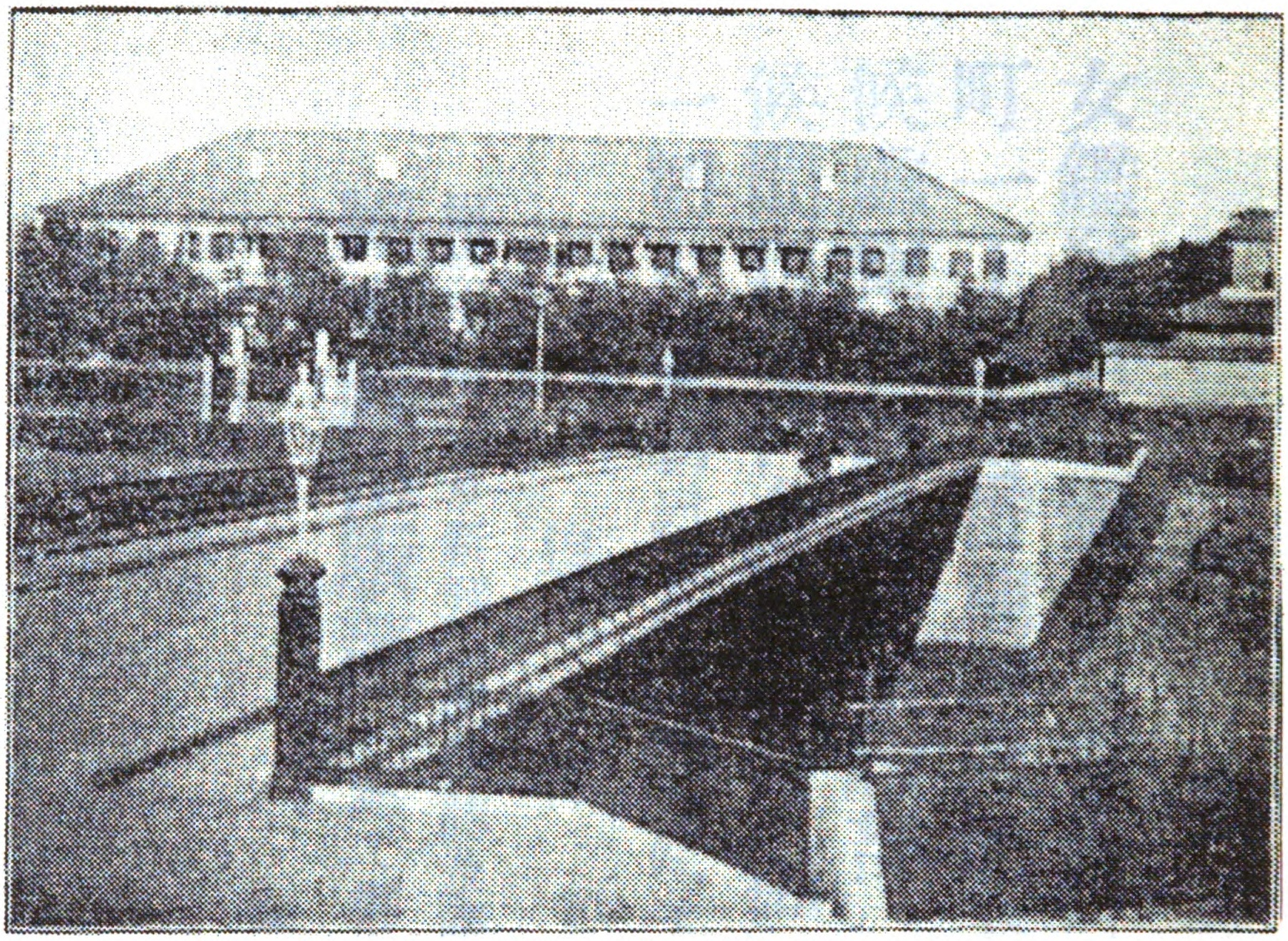




故柳澤保惠伯母堂明子刀自肖像



山根醫學士家族改良服を着する圖



東京女子高等師範學校



函館五稜廓外氷塊切出の圖

稟告

女鑑發賣に關する事務は是迄東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館書店をして取扱はしめ來り候處爾後國光社出版部に於て發賣する事に相改め候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

追伸

爾來各所より新刊新聞雜誌及圖書等御寄贈は甚だ御手數ながら必ず**國光社出版部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

明治卅五年二月

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社出版部
（電話特新橋八八番
電話新橋二六九三番）

肝付海軍少將題辭　木村海軍大尉校閲
小笠原海軍大佐序文及作歌　西　圭一
伊東海軍大將手翰　野本衛佐美　合著

訂正第三版

新案
海軍遊戲法

菊版美本
詳圖入
全一冊

定價金貳拾錢
郵税金四錢

(一) 日本は海國なり故に兒童の時より海軍思想を養成せさる可らす
(二) 兒童は身体發達の旺盛なる時期なり故に最体育に重きを措かさる可らす
(三) 兒童は興味を感する事甚しきものなり故に機に應てし其快樂を正情に導かさる可らす

本書は右三者の目的を達する一助として著者が多年或は兵書に徴し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて裘葛を費し漸編成したるものあり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神忽ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に駕し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かさる刮目企足して俟つべきなり、世の教育家父兄諸士の猛省を促す、

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社國光社出版部
發賣元

女子の習ふべき藝に就いて

藤原　靜

今日の女子が普通に習ふところの技藝と云ふものは、概ね、無用の藝たるに過ぎず。一般に女子をして習はしむるものゝ中に、家庭の上に於いて、未來永久に實用に供するものは、裁縫の一科あるに過ぎざるなり。其の他、茶の湯、挿花、琴、毛糸細工、和歌、いづれも心思を慰むるの要こそあれ、一家の上にとりては、毫も實益なきものなり。

遊藝も、或點に於いては、必要の場合あるべし。余は、遊藝を悉く無用なりと言ふにはあらざれども、斯樣の遊藝は、多く只習ふたりと言ふに過ぎずして、一家の妻となりしのちには、悉く不用に屬するものなり。一家の妻として子弟の養育に任じ、一家の經濟を擔任して、內外の事に就いて多事なる身が、琴を掻き鳴らして、唄をうたふ暇のあるべきや。いづれの家の主婦も、中等以上の家に生れし

ものには、琴の三四曲習はざるはなし。其の主婦たるもの、いかなる場合にも琴を弾ずる者は、極々稀なるにあらずや。茶の湯の如きも、亦一年二年學びたりとて、飲み樣こそ覺ゆれ、主人の役をつとめて、一人にて茶を立つる程の事は、決して覺束なし。茶は、娘の時にこそ似合しき仕事なれ、子供を持ちたる婦人にして、眞似目に服紗サバキ、餘り妙なるものならず、此を以つて、世上一般の婦人、飲やうを知りたる迄を紀念として、大方、學びし事は忘れ果つるものなり。挿花の事、また之に同じ。來客の場合、床の飾りに、之を用ゐる多少の益なきにあらず。然れども、一家の妻たるもの、來客の場合、花を挿して居らるべきや。いづれの家にても、花賣る男に任せて、自ら主るは稀なり。この藝も、一二年の間、一ケ月二三回習ひしとて、一人立ちにては、花を扱ふ事出來兼ぬるものなれば也。毛糸細工、もとより慰みに過ぎず。靴下、手袋の如き、僅に實用に供すと雖も、家に於いて造るよりは、商店より買ひたる方、品物もよく價も安きを如何せん。和歌もまた然り。例へ一二年稽古したりとせんか、千貳千よみたりとせんか。此等の修業にては、言葉づかいも未た學び得る事能はず、歌は、少くも一萬首よまざれ

ば、一人立ちの歌よみにはなられぬものなり。古き歌集を取り出し燒直したりとて、それが歌にはあらず。今の一家の主婦にて、事に臨み、立どころに歌のよめる者なきを見ても知るべきなり。

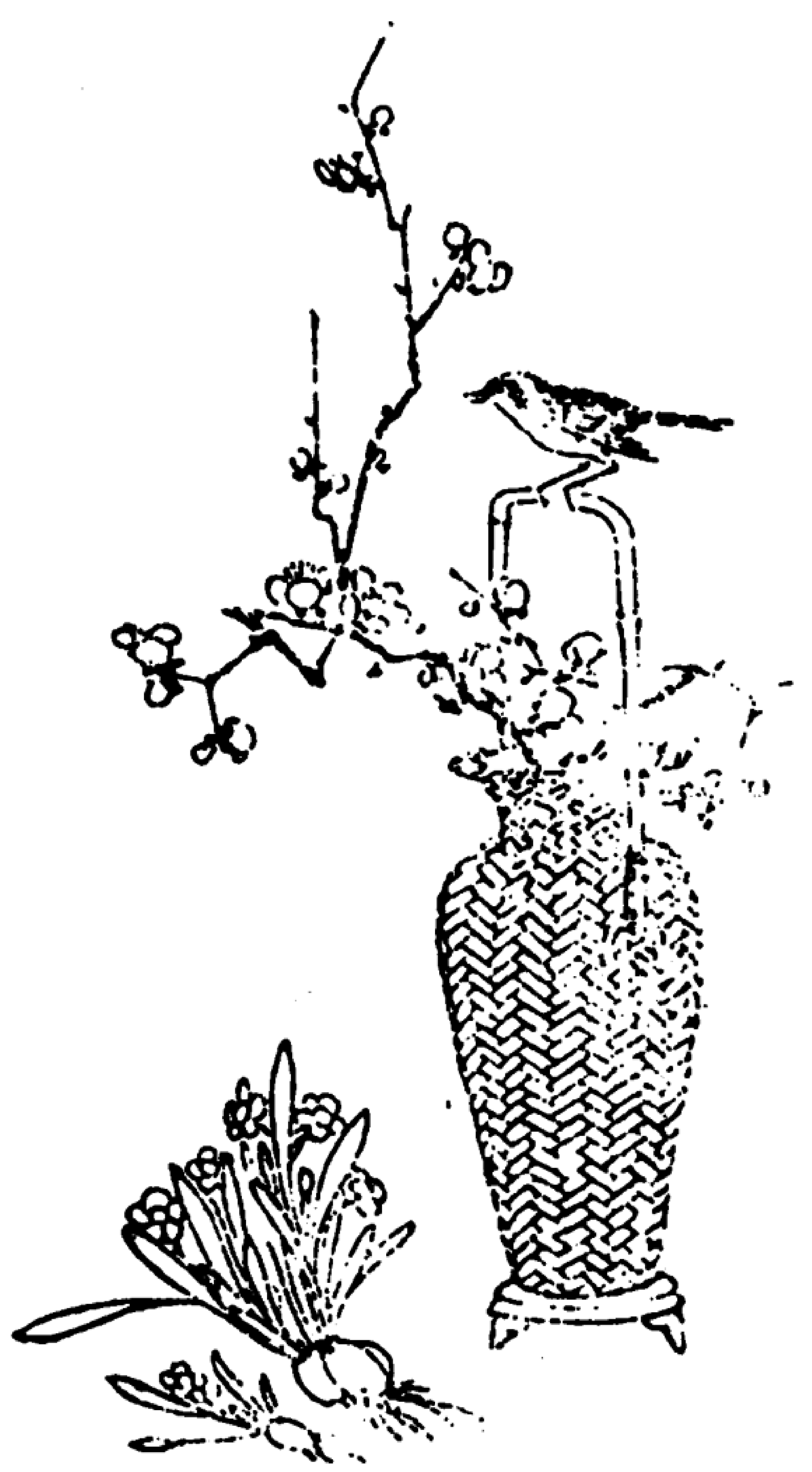
日本の婦人の多數は、負惜みつよく、人の習ふことを習はざれば、恥辱の如く思へり。無用の藝と知りながら、外觀のために貴重の時間を費し、多くの資金を費して之を學ぶ。貲財餘りあつて、消光に苦しむ婦人はともあれ、普通の家にありては、是等のこと、寔に無用の事なりと言ふべし。

余は、婦人の學ぶべき仕事の、尤も實益ある、尤も必要なるものを考ふるに、第一に裁縫なり。裁縫も、等級極めて多し。繻絆や單衣を縫ひたりとて、それにて裁縫の出來たりとは言ふ可らず。綿入の裾の「ツマ」を能くクケたりとて、それにてよしとす可らず。裁縫に於いては、袴も仕立て、股引も縫ひ、足袋も上手に作り、被布もよく仕立るにあらざれば、出來たりとは言ふ可らず。第一必要の藝なり。次には、算術即ち珠算を、何事にも不自由なき迄習ふべし。一家の經濟上に於いて、算用を外にしてよきものなし。寄せ算位出來たりとて、それにて滿足す

べきにあらず。次に筆跡を學ぶべし。女文字とて、細く柔かに書きて、男子とは一種異なる文字をかくは、甚あしきなり。夫に代つて、手紙も書き、照會書もかき、願書もかき、屆書も書かざれば、一人前にはあらず。文章や文字に、男女の別ある可らず。男女の別を立つるは、文學上の事と知るべし。次に女は、自分にて髪を結ふべし。女髪結にたのみて、一家中髪をゆふは、不經濟千萬なり。女髪結と云ふもの、文化年中初めて出來たり。其の前は、女は必ず自分にて結ひたるなり。一ケ月五十錢づゝの髪結錢として、一ケ年六圓、十年にて利子共に百圓にもなるべし。馬鹿〳〵しきに非ずや。次に料理の事を學ぶべし。學校にては、机の上にて、高尚なる献立、調理を學ぶ何の益にもならず。臺所に於いて惣菜、來客の料理、みな巧拙あり。巧みなるは味ひよくして、無用の費を省くもの、拙なるは入費多くして味ひあしきものなり。これ宜しく學ぶべきものなり。次には、西洋洗濯を習ふべし。湯布、單衣を洗ふは、常の事なれども、シャツ「ズボンシタ」、洋服下の飾り「シャツ」の如きは、日本流の洗濯にては、實際間に合ぬものなれど、之をも洗濯屋へ依賴するとせば、其の費用甚少なからぬものなり。一家の仕事と

して、之をも自分の手にて爲さざる可らず。之れ、中等生活の人のために言ふなり。右より下級の人ならんには、宜しく、收入のあるべき藝を習はざる可らず。僅に、一ヶ月三十圓四十圓收入の家にありて、主婦なる者、男一人の働きに依賴するは、甚無理なる事あらん。男の一身より生ずる收入をのみ、命の綱とたのむは、一家の上に於いては、危險この上なし。これ等また、適當の職業を習ひて、わが子供の修學資位は、自分の手より作り出すの覺悟あるべき事あり。

余は、無數の藝の、方今盛に行はるゝを歎きて、この一文を草するものなり。世上の婦人がた、いかに同情を表するや否や。



論説



女子の樂み（承前）

文學博士　西村茂樹

元來演劇とは如何なる物ぞ。其の名は、勸善懲惡ありといへども、其の實は、決して然るものにあらず。其の本意は、專ら世俗の人氣に協ひ、多數の利を得んと欲するにあり。先第一に、俳優に容貌の美なる男子多く、然らざるも、これを裝ひて美ならしむ。之れ、若き婦人の愛好を惹かんとする第一の目的なり。其の衣服調度の美麗なるは、人を奢侈に導くの階梯なり。其の脚色は、主として人情に投合するを務むるを以つて、最も淫奔のこと多し。（近時は少しく改正したれども。）現時、婦人が演劇を觀るの有樣を聞くに、伎倆及び、脚色の工拙を見るものは少なくして、先、俳優の容貌擧動を見て、已が心を蕩搖する者、十中の八九なり。故に、脚色の改正などは、何の役にもたゝず、又、最も甚しきは、俳優中に贔負と云ふ者ありて、其の者と馴々しく相親しみ、自ら、我は誰々ひいきありと公言して、耻る色なく、其の俳優の紋所の付きたる簪、又は、手拭等を頭にいたゞきて、自ら誇るに至りては、實に沙汰の限りにて、此のごとき婦人は、其の面貌衣服のいかに美麗なるも、其の心の賤しきことは、乞食同樣なり。其の故は、俳優は、徃昔は、河原者と稱して、平民の籍に入ること能はざりしものなり。今日平民の籍に入ることを得たるも、其の品行は、昔に

替らざるもの多し。此の如き乞食同樣のものを尊びて、其の者より貰ひたる物あれば、是を尊重すること、伊勢の御守り同樣に心得るは、實に本氣の沙汰とは思はれざるなり。又、此の如く甚しき醜態を見ざる婦人にても、演劇を見るには、兎角、奢侈又は浪費のこと多し。凡そ、淫奔、奢侈、浪費は、其の一つあるも、已に婦人には十分の不德あり。まして、其の三つを兼ぬるをや。しかして、此の三つの不德は、みな演劇より起る。恐るべきの至りならずや。然るに、今日演劇を好むの風、上下に滋蔓し、若き女子にて、演劇を見されば、人前にて話しも出來ざる有樣となれり。歎息の至りと云ふべし。然らば、此如き弊風は誰人に依賴すべき、華族の如き、官員の如きは、我邦の上等社會に立つ人なれば、夫らの夫人令孃は、この如き卑賤の樂みを、好まざる樣にありたしと思ひ居れども、華族とても、其の家庭には、妾とか、婢女とか、賤しき種族のものあり。現今は、官吏の婦人には、或は妓女、又は、其の他卑賤の業を爲したるものもあれば、今時の上等社會の中には、其の家庭は、實に云ふに忍びざるものありと聞けり。然れば、是等は決して賴みにならず。寧ろ、第一に、是等の人の家庭を矯正せざるべからざるなり。

余は、もとより日本婦人が、盡く下等の樂みを棄てて、上等の樂み、即ち、讀書、山水、詩歌等を樂まれんことを希望すれども、急に、これを改めしむることあたはず。先、劇塲に代用するものを以つて、姑らく、其の樂みを滿足せられんことを望むなり。劇塲の代用とは何ぞや、能樂是なり。凡そ音樂舞曲は、高雅なる程淡泊なり。鄙俗なるほど濃味あり。能樂は、演劇に比すれば、甚淡泊な

る代りに、甚高雅なり。且、其の文章は、中古の名文にして、美術の思想を養ふこと甚多し。佛説に據るところの多きは、少々不充分なれども、亦、忠孝節義を勸め、人を感ぜしむる所も甚多し。總て物の面白しと云ふは、其の物にあるよりは、我が心に感ずる方にあるものなり。能樂も、十分なるものにあらざれども、少しく學問ある人より見るときは、芝居に比すれば道理に協ひ、却つて面白く觀らるゝなり。余が如きは、見る物の中にては、能樂を以つて、尤も面白しとみらるゝなり。獨余のみならず、少數の人は、猶、能樂を以つて、芝居より面白しとするものあり。余、因つて、諸子に勸む、演劇を見んと欲せば、代りに能樂を見るべし。然るときは、演劇の如き、淫奔、奢侈、浪費に陥るの患なく、女德を失ふの心配もなく、其の樂みを得ること、演劇に異ることなかるべし。

昔は、宮中の女官は、もとより演劇を見ることなければ、其の何物たることをしらず、唯、折々禁中にて、能樂の御催しあるを以つて、これを見るを以つて、無上の樂みとせし由を聞けり。樂みといふものは、我が心に樂しと思はるれば、夫れにてよろし。必ずしも、奢侈、浪費を爲さゞるべからずと云ふ事なし。又余が知人に、夫婦とも耶蘇信者のものあり。夫れ等の仲間にては、妻子も決して芝居を見ることなし。見ぬことゝなり居れば、見たくもなし。只、日曜日に、會堂に行くほど面白き事はなしと言へり。耶蘇教は、其の教義に於いて、本國の國體に協はざる處ありて、宜しからざるものあれども、其の信徒が、身を愼しむに至りては、實に及ぶべからざるものあり。此の外に、俗曲を樂しむものゝ害をも言はんと欲したれど、演劇の事と、大抵同樣の事なれば、今

日は是を言はず、他日云ふ處あるべし。(完)

衣服改良と婦人の天職

警察醫長
醫學士 山根正次

婦人第一の天職は、子孫の繁榮幸福を圖るにあり。

子孫の繁榮幸福を圖るは、獨、婦人のみにあらずして、男子も固より、其の責を分つべき所なれども、人間の子孫繼承の一事は、婦人の直接に關係する重要事たるが故に、之を以つて、婦人第一の天職と云ふと雖も、何人も異議なかるべし。人間の男女兩性あるは、自然の道理にして、各行ふべき務あり。殊に婦人は、其の躬に依りて、子孫を生むの務あるは、普通免るべからざる所なり。故に、其の子孫を哺養敎育して、身體の健康と、精神の智能を、滿足に保たしむることは、其の子孫を生みたる婦人、即ち母親の、最も心懸くべき所なるべし。

然れども、如何にして、子孫の繁榮を圖るべきかは、是れ婦人の先づ考ふべき事柄なり凡そ人間は、身體ありて然る後に、種々なる關係を生ずるものにして、始めより身體なければ、何事も關係なきは勿論なり。故に、身體にして、充分なる發育を遂ぐること能はざるか、或は、薄弱にして、多病なるが如き事あるときは、決して、精神の智能を圓滿に使用する能はざるべく、隨つて、一切の幸福を保つこと難かるべし。而して、身體の充分に健全なるを望まんとすれば、先、之を生むべき母親よりして、健全の身體あるを要するなり。如何にして、身體の健康を保ち得べきか。是れ、人間一生涯の大事なり。凡そ、身體を健康ならしむるには、先、身體の生理機能を盛んならしむる

にあり。而して、之を盛んならしむる方法は、即ち、身體の運動を、活潑ならしむるにありとす。而して、身體の運動を充分あらしめんとするには、身體に着用する所の衣服を、最も輕便にせざるべからず。若、衣服にして輕便あらざるときは、遂に、充分ある運動を致す能はざるあり。我日本人の衣服は、甚、輕便あらざるものにして、之を着用して、充分ある運動を爲し難し。而して、其の衣服の袖の甚長く、裾裳の頗る長く、且重く、帶の最も廣く、幾多の紐を以つて、身體を束縛し、自ら飲食呼吸を妨げ、手足の、自由に運動し難きが如きは、其の弊害の甚しきものにして、健康を保つ能はざるべき構造あり。故に、日本人は、何れの國民よりも、身體短小にして、且孱弱あり。是れ實に憂ふべき所にして、其の弊害は、一日も早く改良せざるべからず。余は、年來此の弊害を除かむが爲めに、先づ、日本普通の衣服を改良せんことを心懸け、種々研究の結果、遂に、此の弊を防ぐべき、一種の衣服を案出して、之を家庭の子女に着用せしめ、且、友人知音の子女にも、其の着用を勸誘し、其の効力を實驗せしに、成績頗る佳良にして、健康上の功、益、少からざるを認めたり。

蓋衣服は、古來の習慣ありて、人心の好尚由つて來ること久しきが故に、之を一朝に改革するは、誠に難き所とするは　人情の免かれざる所なり。然れども、身體の健康を害すべき不良の衣服と承知しつゝ、尚、之を改むること能はざるは、目前の感情に引かれて、自己の身體を愛せざる愚昧の所行にして、子孫の災難を省みざる、無慈悲の了簡と云はざるべからず。余は、この事を思ひて、自ら衣服の改良を實行し、之を全國に、普及せし

めんことに盡力するものあり。而して、余の考案せる改良衣服あるものは、卷首の圖にあるが如きものにして、其の形容、從來の服裝と同じからず。稍、奇異の感ありと雖も、其の着用上、便利輕快なることは、未だ、此の右に出づるものあらざることを信ず。而して、此の衣服は、其の裁縫容易にして、何人にも製し得らるべきのみならず、何種の織物にても使用すべく、多分の巾尺を要せずして、造ることを得べし。余は、此の衣服に依りて、從來の弊習を一掃し、日本人の體格を改良進化せんとするの効果を、獲得せんことを希望するものあり。世の士女、幸に余の意見に贊同して、衣服改良の實行に着手せられなば、獨、余の本懷のみにあらざるあり。

因に記す、余の改良衣服裁縫の方法は、卑著『改良服圖說』と題する書に詳說せり。有志の士女、幸に一讀せられむことを望む。

女子教育家の態度

三輪田眞佐子

公私の別なく、官民の隔なく、苟も、女子教育のため學校を設け、或は、その任に當るものは、女子教育家として取るべき態度を、明かにせざるべからず。そもそも女學校あるものは、門戶を開きて、知識を賣り、才藝を販ぐべき所にあらず。唯、國民の母として、恥しからざる女子を作り、一家の婦として、價ある女子を養はんための、公共的事業を施すべき所ぞかし。決して、私利私欲を逞しうする所とは思ひそ。

さすれば、女子教育家の眼中には、我が學校とか、人の學校とか、亦、甲の生徒とか、乙の生徒とか、

或は、他人の書きし著書とか、自分の綴りし雜誌とか言ひて、故意に避くべからず。つねに虚心にして、眞に、天下一般の利益となるべきことを勤め、亦、天下一般の訓育となるべきことを、行はざるべからず。恰も、眞の宗教家が、寢食の間にも、人類の安心立身を謀るを以つて目的とするが如し。若し宗教家にして、唯、わが寺院會堂等の利益のみを主眼として、是を非とし、邪を正とするのみならず、他を惡み、己を揚げ、嫉妬と猜忌とを以つて、總ての方針を決する如きものあらば、宗教家と呼ぶに足らず。これと同じく、身自ら見識あるにあらず、唯、一個の位置を失ふを恐れて、教育家の外面を作り、若しくは、一個の利得を博するを願ひて、教育家の面目を裝ふものは、最、甚しき教育界の罪惡なり。

元來、社會の發達未だ幼稚なる時代にありては、總ての教育事業は、官府の職能に屬するも、漸く民度の進歩するにつれて、官府の手を離るべきものならん。然るに、現今の教育界を見るに、概ね、官設學校の弊は、その職員所謂官吏にして、勢ひ、熱心と忠實を缺く恐あり。これに反して、私設學校の弊は、概ね、射利に傾き、稍もすれば、營業的のものとなるのみならず。不完全不整理となるを免れず。されば、斯る公私の兩弊を矯むるは、今日、女子教育界の急務にこそあれ。

蓋、女子教育界の通弊を除く道他なし、女子教育家の態度を改め、先、後進の女生を教育せんとならば、所謂献身的の覺悟を極め、わが起居動作は更なり、母として、妻として、亦娘として、俯仰天地に愧ぢざる心と、行ひを以つて、世の青年女子の模範を示すべし。而して、教育を施すべき所をば、單に學校の教室内に限らず、家庭に於いて

も、往來に於いても、將た談笑の間に於いても、人を教育するといふことを忘るべからず。何ぞ、わが學校と、人の學校とを問ふべけむや。全く、日々夜々、春夏秋冬、終始絶えず、彼の太陽の萬物を照すが如く、水分の諸物を潤すが如く、接する人、交る者をして、知らず識らず、我が主義と信向とに、感化せしめざるべからず。顔淵曰く、夫子は、循々然として、善く人を誘き、我を博するに文を以つてし、我を約するに禮を以つてす、云々と。實に女子教育家たるものは、孔夫子の如き態度を採らざるべからず。一言以つてこれを掩へば、女子教育家たるものは、眞面目の態度を有せざるべからず。

おのれ不敏ながら、女子教育に對する態度は、わが國は更なり、世界の女風を改良し、女訓を普及せしむるを期す。故に、誠實と熱心の堪ふる限は、自ら信向する主義を以つて、種々の所に於いて説き、種々の所に於いて書き、倒れて後止む決心あり。今や年と共に老に近づくも、尚、攝生と運命とを恃まば、女子教育のため、盡力する歳月短しとせず。思ふに、おのれ夫に死なれて、殆ど三十年に近し。其の間、全く獨立獨行して、餘命をつなぎつゝ、朝な夕な、夫が、國家の爲め奔走せし往時を追想して、無量の感ありき。いでやおのれも、亦、女子教育のため生涯を費し、聊、國家の大恩に對する萬か一分の報にもがな。さて讀者よ、とがめ給ふ勿れ。たま〳〵、新年に對する感情に聯想して、おのれが身分を説きぬ。これ本意にあらず。論題外なり。要は、女子教育家たるものは、徒に門戸を張りて、相爭はず、互に相親しみて、斯道のため研究し、相提携して、共に同一の事業に從ひ、以つて、國民を補益するこそ望ましけれ。



ゆき女の貞節

指原乙子

陸奥國江刺郡野手崎村に、孫作と呼ぶ農夫ありき。そが妻ゆきといへるは、天性柔順にして、よく夫につかへ、更にその命にそむきしことなく、一家の內いと睦じく、のどけき月日を送りしが、享保六年、孫作不圖病を發て、遂に歸らぬ旅に赴きぬ。しかるに、其の召仕の女に、二人の男子ありて、兄は文四郎とて、九歲、弟は長之助とて、やうやう二歲ばかりなりけるを、ゆきは、我もとへむかへとりて、己の子となし、いと〳〵愛しみ深く、もの讀みふみかく事をはじめ、さては耕作の業、世わたるすべなど、懇にをしへ導きしかば、子供等も、親しみなづきて、生の母にまさりて、ゆきを慕ひけり。

親戚の者共、ゆきがまだうら若くして、夫に後れしをあはれみ、後の夫を迎へんことを勸めしに、若、心正しからぬ人を迎へなば、二人の子供の爲いかゞあらん。且は、亡き人にも恥かしければとて、聞きも入れず。ひたすら活計の事に心を盡し、夫の在世の時にもまして、家もいよ〳〵榮えゆき、又、召仕ふ者共にもなさけ深かゝりしかば、皆よろこびて、誠心をつくして仕へぬ。

子供等もやう〳〵ひとゝなりしが、母の敎よろしかりし故、皆すなほにして、孝心あつく、よくその母に仕へしかば、文四郎には、父の跡をつがしめ、長之助には相應の田畑をもとめあたへて、別

に一家をなさしめぬ。此のよしいつしか領主に聞えて、享保十九年十月より、文四郎が持高、三石あまりの年貢郡役を免じて、その貞節を賞せられしとぞ。

故英國女皇ヴィクトリヤの傳（承前）

宮館さだ子

レーゼン女史、皇女の保姆に聘せられてのち、其の郷友に宛てたる書信中に、左の一節あり。

前略、始めて、謁見せし折の皇女の待遇は、いと無邪氣にして、小供らしく候ひき。

皇女は、軀の丈高からず、口元緊りたりと云ふにあらねど、其の涼しき眼、眞珠を植ゑたるが如き齒、輕快にして愛嬌ある言語、全體の小造りにして、其の動作も優美かなる等、如何にも可愛らしき少女にて有之候。

其の折の皇女の服裝は、白色の棉紗に珊瑚の頸飾を着け、いと質素には候得共、一入、奥床しく相見へ申候。

其の家庭は、良く整頓致居り、一家の和樂、宛然、駘蕩春の如くに候得共、些少にても、失體非行ある場合には、假借する所なく、嚴に戒飭を加へ申候。

金錢上の關係に付きては、皇女は、特に注意深き教訓を與へられ、夙に、善良なる習慣に馴らされ居り候。店借又は、金錢上の貸借等は、嚴に禁せられ居候に付き、母君より支給せらるべき、定りたる小遣錢の外には、厘毛も超過すること能はざることに相成居候。云々。

皇女は亦た屢々母君に伴はれて、國中の重なる都

市、寺院、及び其の他の名蹟を遍歴しぬ。曾て、米國の一著述家が偶、「オワイト」島なる「ブラザング」寺園に於いて、皇女母子に會見したる折、母君には、當代の列女として、其の名聲の籍甚たりし、デーレーマンス、ドーター（牛乳屋の娘の義にして、其の名をメーレーと覺ゆ。）の墓側に在りて、其の傳を讀み、皇女は熱心に之を傾聽しながら、其の優しき眼には、涙を浮べつゝありしを目撃せりと云へり。

賢良なる母君ケント公爵夫人の、皇女の教養に對して、最も苦心したる一事は、當時、英國上下の狀態は、蕩々として、奢侈淫逸の風に流れ、稍もすれば、此の玲瓏無垢なる、少女の心事を汚濁するの懼れありしにより、努めて、交際場裡に出づるを避け、亦、宮廷の驕奢に接觸せざらしむるにありき。現に、伯父君クラレンス公の、ウイリヤム四世として、即位の式を行はせられたる折にも、皇女は、避けて、其の公式に列せざりき。此の事ありて後ウイリヤム四世は、皇女の對して、こゝろよからず思ひ、折に觸れて、不滿の意を洩らしたることありしも、只、女皇アデレードの資性、哀憐の情に富むあり。其の子、悉く夭折して、愁嘆やるせなき中に在りても、皇女を視ること、其の子と異なる所なかりき。是、皇女母子に取りて、せめてもの慰籍なりし也。

皇女の即位

レーゼン女史聘せられて、英國に渡來したる頃には、皇女の前途に横はりつゝある重任は、略、之を豫見するに難からざりき。ヂョージ四世、子なくして崩じ、現王ウイリヤム四世の子も、皆、悉く早世して、老境、子を擧ぐ

るの望なかりしかば、皇女ヴィクトリヤは、陰然未來の儲君を以つて擬せらるゝに至りぬ。されば、レーゼン女史は、此の時よりして、列代英國王の系譜を敎ふるを以つて、皇女日課の一に定めたりき。

是等の關係よりして、皇女は、略、將來の地位に對して、自覺する所あり。常に不安の念を懷きて、其の小さき心を惱まし居りしが、一日、女史に向つて言へるやう、「予の今日の地位を羨むものは、未だ之に伴へる重大なる責務を、豫想する能はざるもの也。」と、而して、更に女史の手を執り、凛然たる語調もて、「予は、善良の人たらざるべからず」と、此の誓言こそ、在位六十年の久しきに渉りて、最も、正確に履行せられたるものありき。

千八百三十七年六月二十日、前王ウィリヤム四世、崩御し玉ひぬ。時、恰も午前二時、夜色闇にして、草木亦死するの時、一輛の輕車は、カンタベリーの大僧正と、「ウェリントン」大侯とを乗せ、「ウイングル」宮門を出で、急行「ケンシントン」宮に向ひぬ。是、英國々憲の命ずる所に從ひ、皇女ヴィクトリヤに對して、ハノーバー王系繼承の旨を傳ふるの、使命を齎したるものなりき。

馬車「ケンシントン」宮に着したるの時、曉色未だ分たず、宮裡の人、皆、夢をむすびて、門扉堅く鎖され、訪へども、應ずるものなかりしかば、一行の門外に佇むこと多時にして、僅に導かれて、應接の間に入りぬ。姑くにして、皇女尙未だ來らず、之を侍者にせまるに、皇女の安眠を攪すに忍びざるを以つてせしかば、具さに、告ぐるに來意を以つてし、速に、皇女に見えんことを求めぬ。侍者入りて告ぐ。皇女は、肩衣を打ち掛けたる儘、

倉皇しく、應接の間に入り來りぬ。其の眼は涙ぐみ、其の唇は慄ひたりき。

一行は、ウイリヤム王の崩御と共に、皇女の王位繼承を奏し了んぬ。此の時皇女は、只管、伯父君なる前王の崩御を悲しむの念に滿され居りしが、亦、顧みて、重任の其の双肩に落ち懸りたるを思ひ、衷心の恐怖に耐へざるが如きものありし中にも、邁往の氣、毅然として、侵すべからざるものありき。

此の時に於ける皇女の動作は、贔負目がちなる、予が娘に對しても、此くまで、立派には望まれまじとは、後日、ウエリントン大侯の、常に人に向つて語る所なりき。

皇女ヴイクトリヤは、茲に英國女皇の位に登りぬ。踐阼の初め、先、前王后に書を裁して、其の健康と安逸との外には、何等顧慮する所なからんことを望み、且又、后の欲する限りは、何時迄にても、ウインゾル宮に滯在せらるべき旨を言ひ送りぬ。

而して、同書中には、皇太后たる新資格に付きて、一言の及ぶ所なく、人に語りて言へらく、「朕は、前王后の地位の、變更したることを知らざるに非ず、然れども、朕の口よりして、其の變更を氣付かしむるに忍びず。」と、優美なる德性の發揮にあらずや。（未完）





家庭

實驗家庭の教育（二）

東京感化院長　高瀬眞卿

前に申した家庭に於いては、情を養ふと言つた事に付いて、誤解をして、情欲を養ふことゝ心得て、不審を抱く者があるとやら、承知しましたが、言ふ迄もなく、愛情を養ふ、即ち、父母、兄弟、姉妹に對する情愛を養成すると言ふ事にて、普通の情欲にはあらず。

○愛情過度（つゞき）

愛情過度のために、子供を吾儘なる者に仕立た實例は、澤山あるが、前に二例を出しました。この過度と言ふものが、實際どれ程ありしやと言ふ事を、此に述べませう。感化院にて、取調べた處にては、

愛情の過度と認める者、百に對して四二、八、となるこの中に、父母の愛情過度と認むる者と、祖父母の愛情過度と認むるものを分れば、

父母の愛の過度　四六、四

祖父母の愛の過度　一六、四

斯う云ふ事にある。祖父母は、割合に少ない樣に見ゆるが、これは、祖父母の手にて生育せらるゝ者は、父母の手に育つものよりも、實際に於いて、少ないのである。愛の過度と云ものは、其の實祖父母の方が、多いと認めて宜敷ので、諺にも、孫は子より可愛いと言ふ通り、祖父、若くは、祖母の愛と云ふ者は非常のもので、例へば、父母が決心して、吾子を感化院へ入院せしむと云ふ場合に、

祖父母が異議を唱へて、入院せしむる事の出來ぬ例は、實に多いのである。其の異議を唱ふる理由を聞いて見れば、何等の譯もなく、只、厳重なる學校へ入れるは、不憫であると言ふに過ない。斯う云ふ譯の分らない老人が、一家の内に勢力を有して、然うして、孫を無性に可愛がる、家庭教育の行はれざるは、無論の事であらうと思ふ。試に、三四の少年の語る處を「感化資料」より摘録すべし

一少年云ふ、僕が退校を命ぜられたら、お父さんが大層怒つて僕をぶんなぐりました。さうすると、お祖母さんがまた怒つて、ナゼ其の樣に○○を打つ、頑是のない子供だもの、少しは悪い事もする、其と云ふも、教師の奴が不行届きで、悪い友達と遊ばせるから、自然と悪戯をする樣になるのだ。今から學校へいつて、教師の野郎に談判して來ると、大そう怒つて、學校へ怒鳴り込だのです。お父さんも心配して、跡から付いて行ました。町長さんが中へ這入つて、僕はまた、學校へゆく事になつたが、今度は、町長さんから、お祖父さんへ話して、又、退校されたのです。お祖父さんが、町長と議論して、大騒ぎでありました。

一少年云ふ、お婆さんが、大病だと言つて歸宅を願つて來たから、國へ歸つた處が、お婆さんは、病氣でもなんでもない。僕が歸つていつたら、家から飛出して來たから、僕は吃驚した。お前に久しく逢はないから、逢いたくなつて、○三郎に呼んで來れと言つたが、修業中の子供を呼んではわるい迚、聞ないから、お○に話して、已が大病の振りして、お前を呼んだのだと言ひました。

一少年云ふ、家の親父は厳重で、お小遣などは、一ヶ年三十錢より呉れない。お爺さんが内證でくれます。親父が怒つた時は、いつも隱居へ逃てゆくと、お爺さんが、また親父が怒つたか、仕樣のない奴だ、ヨシ〳〵本宅にゆくな、隱居に居るがいゝ、大切な孫を、よく叱りやがると、いつも僕に賛成してくれる。感化院へ來る時などは、お爺さんが、どうしても承知しないで、親父も困つて仕舞つた。警部さんに賴むで、お爺さんを承知させたのだ。

祖父母の愛は、右に言ふが如く、全く條理の立たない愛にて、孫をして、ます〳〵不良を增長せしむるに過ない。家庭敎育上にとつては、有害なりと言ばねばならぬ。

○冷淡なる家庭

愛情過度の次には、冷淡なる家庭より、不良少年を多く出すなり。冷淡なる家庭と云ふものは、實父、實母兩存したる家庭には、極めて少くして、多くは、實父死したる寡婦の子、實母沒したる繼母の手に、成育せられたる等に多し。今、繼母に就いて、大略を述ぶべし。

○繼母のこと

繼母と云ふ文字には、自然と冷淡な意味が含むで居る樣に、誰も思つて居る。昔よりある小說などにも、繼母が前妻の子を、殘酷にする話が澤山ある。馬琴の皿々鄉談や、八犬傳の犬村大角の妻の傳などは、皆、其の事を小說にしたのである。まづ、一寸話をしても、彼の細君は後妻だが、感心に、前の妻君の子を可愛がるなど〵云ふ樣な工合のもので、吾子を可愛がるのも、感心だと云はるる樣な理屈であるから、繼母と云ふ者は、甚、割のわるい役割になつて居る。其れと云ふも、繼母

その人の性質が惡いと云ふ譯のものでは、決してない。眞卿も感化事業に從事してより、十七年になる。前妻の子を、不良の少年と云ふ名で、感化院へ入院させた細君にも、數十人面會した。其の人となりを能く調べて見ましたが、ナルホド、此の婦人は、性質が宜しくない、これでは、繼子を冷淡にする筈であると、感じた人は少ない、千人の中に一人あるかなしである。ですから、繼母の性質が宜しくないと云ふは、極々少ないので、性質が惡いと云ふ事は、決して云はれない。然うすれば、如何な譯で繼母と云ものは、不良の子を多く出すかと云ふに、これは怪しむに足らぬのである。母と子の間に、天然の温かい情がない。可愛がると云ふも、眞の愛情ではなくして、義理合より生ずる愛情と云ものである。子供より繼母に對するも、また、實父へ對する義理よりして、起る敬愛であつて、天然の愛慕ではない。之を俗に申せば、愛情のない夫婦の樣なもので、事情があつて夫婦になつて居て、表面はさも睦しい樣に見えて居るが、眞情に於いては、妻を愛する情がうすい。妻も夫を愛する情が、少ないと云ふ樣な工合である。此等の夫婦を、合せ者は離れものと諺に云ふのであらう。繼母と繼子の間の關係は、こんなものである、其の證據には、繼母が、私に話した言葉を御聞なさい。

○されば、妾だとて、行末は、彼の子の世話になるので御座いますから、可愛い事は、自分で生だ娘と、少しも替りは御座いません。只、彼れが私の事を、宿へ彼是と讒謗いたしまして、宿が不在の時は、煙管で打擲したなど、申した事も御座います。宿では一切之を信じませんから、宜しいので御座いますが、妾は、また彼

が惡戯を致しても、成るたけ、宿へは隱して置きますので御座います。

眞卿、この話で、大抵繼母が、前妻の子に對する家庭の樣子を推測します。子供は、妻の事を夫へ彼是と讒言しますが、妻は、子供のわるい事は隱して言ひませんと言ふ。この心が、己に温かな情合のない證據と認めます。子供を育てるには、全く天眞の温情でもつて、少しも、隔意なく言ふべき事は、何の遠慮もなく之を言ひ、呵る事があらば、少しも會釋をせずに呵り、可愛いも憎いも、有の儘でなくてはいけない。斯う言ふてはいけないの、これは隱すがよいのと言ふは、既に小刀細工と云ふもので、心中に得失を分ける分別があるからである。人心の靈うつらざる事なしと、古人も言つてある。母にこの心があるから、子供にも、同じ樣に得失を考へて、彼是と工夫して居る。「水くさい」と云ふのは、則ちこの事である。また一人の繼母は、左の如く話しました。

○私は、自分で生だ子は一人もありません。ですから、彼の子は、自分の子と少しも替りません。六歳の時より育てまして、十五才まで人手に掛ませんから、生んだ子と相違はないのです。自分の子でないから可愛がらぬなぞと、他人に言はれては、夫へ濟ませんから、妾の力の及ぶだけは、可愛がりました。

繼母は斯く言ひました。ソコで、子供の曰く、親父はやかましいので、時々怒ります。お母さんは、大事にして呉れます。何を言つても、お母さんは承知してくれる。〓親父に内證で、小遣を呉れるが、あれは、親父が怖いから、私を大事にするのだ。

母は、繼母と言ふ義理よりして、夫へ對する義務

として、子供を出來るだけの力を盡して、可愛がる。然るに子供は、僕が可愛いのでない、親父が怖いから、それで可愛がるのだと云ふに至る。この間に、いかなる消息があるか知らぬが、母親が繼母であるからと言はるゝを恐れて、勉めて可愛がると云ふは、已に母たる本分を失つて居るのである。いかに子供でも、これは、故意に可愛がるのであると言ふ位の事は知つて居る。斯く母の心を見拔かるゝ樣では、母親としての權能は、最早欠けて居ると言つてよろしい。母親たるものは、實子と繼子とを問はず、子供に對しては、チャンと親たるの權能がある。これを、その儘に行つてゆけばよい。繼母であるから、可愛がり樣が足らぬと言はれては、大變であると思ふは、已に子供を第二にして、自分の名譽を、第一にした話と言はねばならぬ。之を私心と言ふ。どうしても、完全の家庭教育は覺束ない。

繼母に對する夫の心と云ふものに就いても、多少御話しをする材料がある。マヅ、妻君を失つて、後妻を娶ると云ふも、當然の事であるが、已に前妻の子供が、一人なり二人なりある場合には、後妻を娶る時、夫の心に、必ず、子供もあるから、成るべく、温厚な性質の婦人を娶りたい、と斯う思ふに相違ない。氣立のハキ〳〵とした、家事を切つて廻す婦人では、必ず、活潑で怜悧なものでなくてはいけない。が然う云ふ婦人は、比較的前妻の子を、冷淡に扱ふものであると云ふやうな考へを、一般に持つて居る。ソコで、右の如き注文が出る。であるから、夫が言ふのを聞けば、大概こんな鹽梅で、

○私の妻は、繼母ではありますが、至つて穩かな性質で、伜をよく可愛がります。實母と少も

替りはないのです。夫の見る所斯くの如く、それが誤つて居るのではない。全く、後妻は穏かなるが、比較的多いのである。婦人の性質上、温厚の者には、意地の極めて弱い者が多い。所謂薄志弱行の繼母は、夫に對しても氣兼をして、其の意に戻らざらん事をのみ惟れつとむる。また子供に對しても、一は實母でないから、サゾ心細からうと思ひ、一寸世上の評判を恐れて、つとめて可愛がると云ふ傾きになる。斯う云ふ事になれば、夫たる者は、其の穏厚なると、子を可愛がるとを見て、大いに滿足はするが、薄志弱行の婦人は、母として、甚、權能が乏しいと云ふ事には心付かぬ者である。此に於いてか子供は、いつか母を下墨、何でも己が言ふ事は聞いてくれる、何を請求しても、與れるからいと云ふ樣になり、惡い事をしても、大概大目に見てくれる、親父に隱して小遣をくれるから、安心であると云ふ事になる。是れ、自然不良の事をもなし、知らず識らず、不良少年と肩書せらるゝに至る。子供のみ惡いと云ふ事は、到底出來ない。

右は、繼母の內でよろしい部分であるが、若し子供が出來て、前妻の殘した子も男、自分の產んだ子も男と云ふ場合になると、甚、面倒な事情が起つて來る。箇樣な場合になると、子のない後妻とは、同日の談ではない。温厚な內氣であつた後妻も、自分の子の愛情のためには、繼子に對する擧動が一變する事になる。それは、澤山事實のある事であります。



育兒衞生談（三）

久利軍醫

●●●●●小兒營養法（續）

小兒を養育するに付きまして、母乳不足することあらば、又、ある場合には、母乳も用ゐることの出來ないことがあります。かゝる場合には、乳に代る所の、所謂、人工營養法を執らなければなりません。然らば、この人工營養をなすに、いかなる標準に則るべきやと申しますに、可成人乳に似寄りたるものを、撰定することが必要であります。而して、撰定すべき代用品については、種々の要件があります。即ち、その成分、消化の狀態、溫度、流動性なる事、授乳法、有毒有害物の存否等に關することであります。

夫れから、人工營養に供すべき動物乳の中で、尤も宜しきは、馬乳、驢馬乳、羊乳等でありますが、之れは、其の分泌する所の量が僅少にして、どうも需要に應ずることが出來ません。それ故、之に次ぐ牛乳を用ゐます。牛乳は、何れの場所にても、得ることが出來ますし、又、其の價格も廉くありますから、營養上、便利なのであります。今、人乳と牛乳の二について、其の養價を比するときは、左の如くである。

百分中含量	蛋白	脂肪	糖分	鹽類	水	全吸收量
人乳	二、二	三、四	五、二	〇、二	八八、二	九七、％
牛乳	四、〇	三、六	三、六	〇、六	八八、〇	九三、％

人乳と牛乳とは、以上の如く、自然の必要上からして、其の成分に差異が生じて居ります。故に、牛乳を小兒に用ゐるときは、成分の關係よりして、水を割りて、稀薄にせんければなりませぬ。しか

のみならず、砂糖を加へることも必要であります。而して、砂糖は、精製のものでなければ不可ませぬ。その配合の比例は、大約左の如くであります。

年齢＼品目	牛乳	水	砂糖
生後一日乃至二日	一	三	乳五勺に付一匁五分
三日乃至三十日	一	二	同　三匁
三十一日乃至六十日	二	二	同一匁五分
六十一日乃至百八十日	一	三分の二	同一匁一分
百八十一日乃至二百二十五日	一	二分の一	同　一匁
二百五十日以上	全乳		同三分餘

かく稀薄にする前に、牛乳は、一旦煮沸て、又、水も煮沸ちたるものを可とします。之は、其の中に含んである、凡ての悪しき有害物を滅殺するためである。

右の如く、配合其の他に注意したる牛乳を、與へます際には、少しく暖めて、人乳の温度と等しくするを可とします。又、之を飲ましむる器具は、用ゐる都度、煮沸ちたる水にてよく洗ひ、清潔に保存せんければ、かの鵞口瘡等を惹き起す憂がありますから、此の清潔といふことは、最も御注意を要します。

また授乳の時間は、矢張母乳と等しく、一回十五分間、乃至二十分間で充分でありまして、晝夜通じて、六七回與へます。玆に注意すべきは、兎角、牛乳は與へ過ぎ易く、その結果として、種々の腸胃病を起す傾きがありますから、育兒の任に當れる人は、之を加減することが肝要であるのです。

小兒に與へて不良なるものが澤山あります。試に、其の種類を擧げて見れば、

一、酸敗したる物、
二、水又は、米泔汁等にて稀薄にせる物、
三、乳牛の養方不良なる物、
四、乳牛の傳染病に罹れる物、
五、乳牛の治療中の物、
六、乳牛扱者の病氣にして、傳染性を帶びたる物、
七、不潔なる物、
八、乳の糸を引き、若くは、青色を帶ぶるか、血液を混ずる物、

等であります。此の中の七八は、悪乳と稱すべきものにして、之を細別すれば、不淨乳、鹹乳、砂乳、引縷乳、苦乳、酸乳、青乳、黄乳、赤乳杯といふものにあります。此等は、衞生警察上、嚴重に取締るべきものでありますが、今日は、また、牛乳の検査法がさう行届いて居らぬかと考へますから、育兒の任を負へる人は、よく注意することが肝要であります。

又、牛乳の置き所は、臭氣なき温所にして、可成濕氣を避けるを可とします。その容器は、緊密の蓋を有する無色硝子瓶が、一番宜い。清潔になし置くべきは勿論でありますが、夏期には、腐敗する恐れがあるから、特に注意を要します。

其の他、代用品として種々ありますけれども、牛乳より良きものはありません。又今日の場合、牛乳は、都鄙到る處得ることが出來ますから、其の他のものは、此に略して置きます。

右の如く、規則正しく小兒を養育しまして、一歳の終りになると、他の食物に移つるを可とします。而して、之を移すには、徐々に、他の食物に換へねばならぬ。たとへば、牛乳を飲用しつゝある間に、變換すべき食物を與へ、或は、牛乳と粥

どを與へるか、若くは、ソップ、粥、半熟の卵杯を與へ、終に、全く乳を廢するやうにするが宜しいのです。併し、六歳までは、頗る食物に注意せねばなりませぬ。六歳以上にあると、身體の搆造も自然備はつて來るから、大人の食物に接近しても宜しくあります。

●●●●●●●●●
小兒に禁ずべき食品　酒、茶、コーヒー、胡椒、生姜、煙草の類は、小兒に禁ずる必要があります。何となれば、此等の物は、直に、胃腸並に精神に、感動を與へるからである。

●●●●●●●●●●●●
小兒に飲食せしむるも妨げなき食品　カヽヲ、弱きコーヒー、輕きビール等は、少々は可い。一體小兒は、十五歳に至るまでは、精神、諸物に感動し易いからして、酒類は、成るべく、飲用せしめざる方が宜しくあります。

禮節談片（承前）

石井泰次郎

禮儀作法の教授法につきて、かず〳〵殘つて居る花結の事について、其の可否を話したならば、面白い事で有らうが、花結は、女子の技藝として、畫をかく事と共に行はれて居た、古代の上中の人人の、女子必用の家庭教育上の一學科で有つたので有るから、古へ學びの力が無いわらべには、とても、其の沿革だの可否だのと、話す事は出來ない。

包結の栞

然るに、幸にも、近頃、包結のしをりといふ書が世にあらはれた。其の緒言によると、仙臺の清水廣長の大人につきて學びたるを基として、其の他、目にふれ耳にきゝし折節、たゞみかさね結び

合せて、手筥に入れ置きたるが、やがて積れるなりけり。とかゝれ、又、いたづらに秘めおき、蠹魚の腹をこやすも益なく、とかゝれ、又、まして此の頃は、かゝる物教ふる人も、學ぶ輩も匱しくありゆき、果ては、折りし紙、結ひし絲も朽ち果てなば、後の世には知る人も無く、學ぶべき便も無きに至らん。と書き、又、そを思へば、拙き身をも顧みず、折り疊むすべ、結び組む業を、順序を取揃へ、みづから作り得らるゝ樣にし、幼き兒等の文まなぶ暇に、手すさみともなさば、知らず知らずの間に、其の術をさとり得て、斯の道を後の世に傳ふる便りともなり、且は、此の業をおしひろめて、裝飾の助ともなさば、世を稗益する一助ともなりなんか。と遂に梓に上せて、と書かれてある。

のみならず、此の書のよみ方については、小杉榲邨師の指導すくなからず、と記されてある。又、其の序には、小杉師のたゝへごとがあげてある。それはかうである。

(前略) 榲邨、かねてましはりを結ぶこと、諸輪むすびのもろともに、いとしたしうすれば、一わたりよみ見ばやと、かりもて來て、是をよみ試むるに、法式のくだりくだり、其の圖を示して實によくさとされたる、かゝるみやびの道ふみならさんとする少女の爲には、いといとたのもしうおぼゆれば、御もとのはいの如く、世につたへむこと、いで〳〵望外のしわざにして、入紐の同じことすゝむるに、さればそのこと、此のしをりのはしつかたにとこはるゝを、末廣包のすゑひろく、われも傳へんことこひねがふ。(下略)

それにそへて、關根正直氏の序文がある。

人に物をまゐらするには、紙につゝみ水引もて結ぶこと、古よりのならはしにて、その作法にたがふを、世に失禮なりとも、物しらずとも、譏りあざけるめり。これ、我が國固有の風俗のうるはしくて、禮儀のあつきが致す所なり。云云。とありて、次に、包結圖說の事をあげられて、

さて此の書は、彼の圖說よりも、しなじな增して、正倉院の御物のむすびの樣をさへのせられれたる、いとめづらかにたふとし。

と書かれ、又、かゝるめでたき書の出で來しはよろづ絶えたるわざのつがれ、すたれたる事のおこり行く、まさかりの大御代にあへればならし。

云々とかき、とゞめられてある。

なほ、佐方鎭子君校閲と記されてある。まことに、この校閲として、此の序文として、眞誠にたゞへるほど、眞實にしらべてある書であるならば、まことに、此の上もない包結のしをりである。

此のやうなふみがあらはれて來るは、實になんといつてよいか、まことに嬉しい事である。とかきそへて此の書の、千代に八千代に、世のなかにとゞまれかし。とねがひたいが、紐むすびにつき、包物につきて、すこしまなぶ所のある身には、なか〳〵さうは申されぬ。そのめでたい書、たふとい書とたゝへられたについて、ある人の禮法敎授するが、やかましい小言をいひだして居る。まして、其のことが、此の童にむかつて、いひだして居るのである。

それはどうかといへば、此の紐結は正しい傳へでない、此の包物は正しい傳へでない、淸水某が、其の師某より敎へられた正しい傳へでない。といふ事と、包物結物の全體が、正しい傳へでないと

いふ事とである。

結物の傳へは、包結圖説の傳へと、小笠原流の傳へと、其の他の新案である。此の書のは、何れの傳へをとつたのであるか、編輯者よりきゝたい事である。清水廣長の現今教授して居る包物を、もとゝされたのは誠である。さうして、其の傳へは清水氏の、師よりの傳へでない事もきゝつたへて居る。又一方からは、包物全體の寫本が、世間に傳はつて居る事も、いひそへておかねばならぬ。編者は、清水氏より習ひたるをもとゝして、といはれて居る。であるから、まさか、古寫本を其のまゝ、一部にかきのせもなさるまいが、いかにも、うたがはしい事である。扨、かやうに思ふところをいふのは、世の間の紐結包物の教授上に、此の文の序文を基礎として、信用して、此のたつとい、此の後の世につたふべきふみを、用ゐる事の可否に注意しおかねばならぬからである。(但、序文の文章は、一通りの文章として、論じないつもりである。)

清水氏の傳への統は、よく知つて居る。其の教授法の一端も、其の禮法教授の學力も、能く知つて居る。

まことに知つて居る以上は、この結かたや、包物の上において、世間に、其の教授法を流布せしむる事はゆるしがたいのである。そこですこし、此の包結のしをりについて、思ふところを御はなしいたさう。

だいどころ

鯉のすつぽん煮

鯉のうろこのつきたるまゝ、腸を去り、筒切になし、大きなるものは、三枚におろし、切身にして、

鐵鍋に胡麻油を少しいれ、火にかけ、煙りの上りたる時、味淋、又は酒をいれ、砂糖を加へ、切身をいれてふたをなし、(小さき鍋ふたを、肉の上へ直にのせるをよしとす。)鍋ぶたの上に汁の煮上りたる時、火をよはめ、醤油をいれ、甘からく加減し汁のなくなる迄能く煮込み、皿に盛り、粉山椒をかけて出す。

鴨のそぼろ煮

鴨又は、あゐ鴨を、そぼろにきり、味淋の煮切りと醤油を加へ、煮たちたる中に、前のそぼろ肉をいれ、煮上りたらば鳥をあげ、汁を煮つめ置き、八ツ頭の皮を去り、能き程にきり、湯で丶後、味淋の煮きりと煮出しにて、鳥の汁を加へ丶ながく煮て、煮上りたる所へ、前のそぼろをかけて用ゐるべし。

牛肉の時雨煮

牛肉を薄くきり、又、生姜の皮を去り、これも極めて薄くきり、能く洗ひ、醤油に味淋少しを加へ、牛肉と共に、文火にて、しづかに汁のつきる迄煮るなり。

焼鳥

うづらしぎの類を、毛を引き毛焼をなし、能く洗ひ、頭を切り、背より庖丁目をいれてひらき、わたを去り、腹部の骨のかたきところを、庖丁の背にて能くたゝき、醤油味淋にて鹽梅したる汁につけ、足はぬれ紙にてつゝみ、金あみの火にかけて、腹部より焼き、次に、皮の方を焼く。鳥の大小により、二三度汁をつけ、胡椒、又は粉山椒をふりて食す。





國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(二十八)

殿、いでさせ給ひて、ひごろうづもれつるやり水、つくろはせ給ひ、人々の御けしきども、ここちよげなり。

釋義

○殿、　道長公を申す。

○ひごろ、うづもれつる、やり水、　此の日頃、中宮の御産のまぎれに、手いれもせざりしゆゑ、遣水に、塵芥など積りて埋れたるなり。やり水のことは、上にいひたれど、なほ、作庭記に、

池はなくて、遣水ばかりならば、南庭に野筋の如きをあらせず。それを便りに石を立つべし。又、遣水の廣さは、地形の寬狹、水の多少によるべし。二三尺、四五尺、是、皆、用ふるところなり。家は廣大に、水も巨多ならば、六七尺とも流すべし。

など見えたり。

○つくろはせ給ひ、　遣水の中なる塵芥などを、取り除けさせ給ひての意なり。

評解

殿(道長公)庭上に出でさせ給ひて、此の日來、中宮の御産のまぎれに、手いれもせざりしゆゑ、塵あくたに埋れたる遣水を掃除せさせ給ひなどして、まことに、御やうすが御よろこばしげなり。また、他の人々の御やうすどもを見れば、みな、

いづれも、さきごろとは、かはりて、心配げなく、甚愉快なるありさまなり。



女子服飾の沿革（承前）

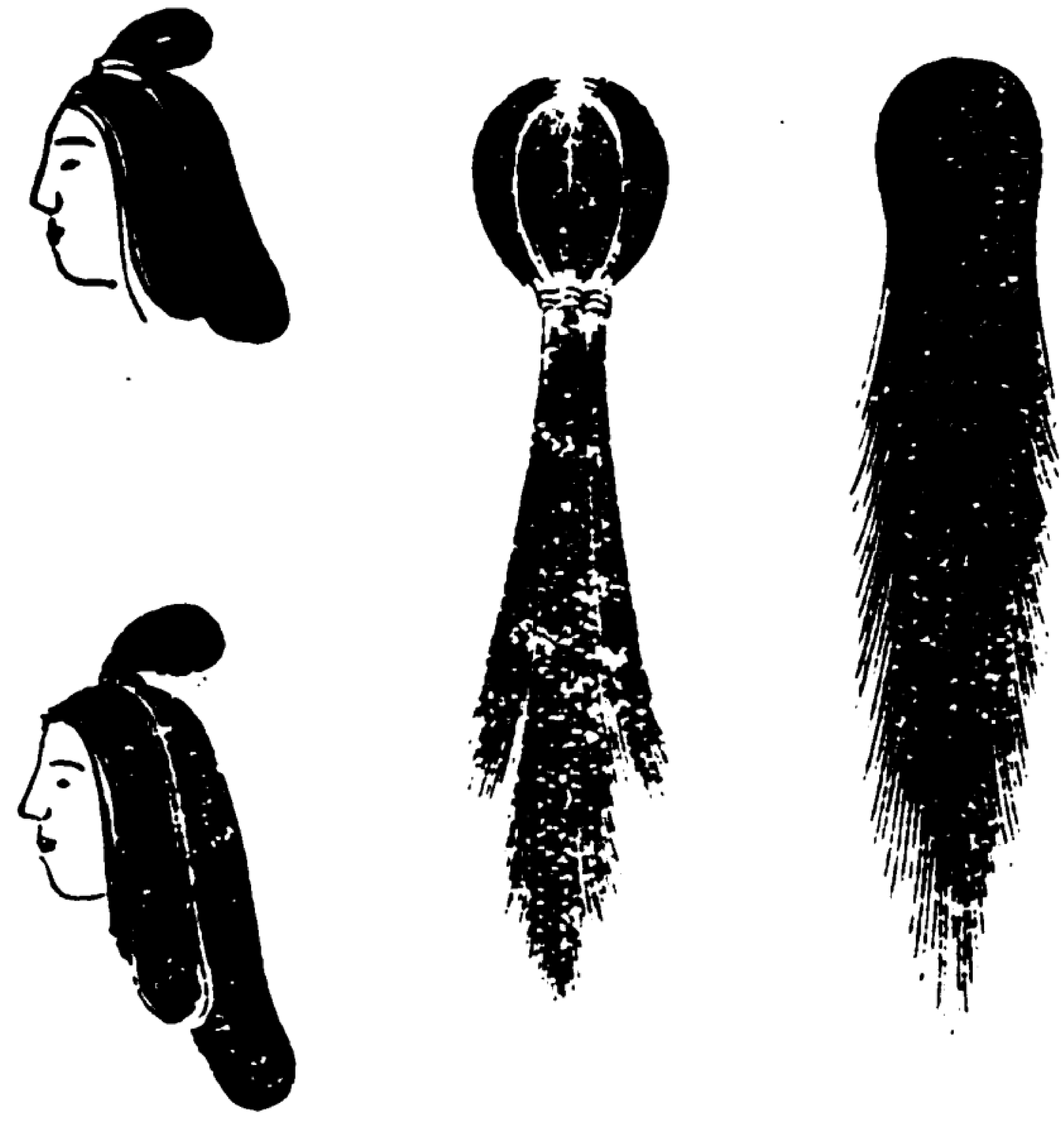
椎園信成

前回にて、服装のあらましは申したつもりですから、次ぎは、頭髪の事に就いて、其の大畧を記すこと丶いたしませう。

頭髪の種類は、今の様に澤山もないが、一二の種類は在つたらしい。併し、何にしろ太古の事ですから、よくは分りませぬが、今日に傳はつて居る古い書物や、土偶や、歌謡と云ふ様なものに依つて考へますれば、大抵十五六才迄は、ヒサゴバナといつて、額に束ね、十七才頃より上になると、角子に結んだものである。角子と申すのは、男子は、頭の中央から二つに別けて、両方の鬢の處に結び、女子の方では、長髪を別けないで、一本に結びつがねて、後へ垂らして居たのを申して居る。丁度、今日の女學生方が、頸の處で束ね、其のあまりを後に垂らして居るのと、よく似て居る。盛装の時は、日影蔓、眞拆蔓と云ふ様なものを、髻につけ飾つたもので、當今リボンをかけるのと同じことである。

此の他に、垂髪とか、結髪とか云ふのがある。垂髪と云ふは、今日云ふ散し髪と云ふのと同じく、結髪といふは、長髪を束ねて、頂に髻をつくりに其の余りを長くわがねて居たのである。これらは、只、口で申したゞけでは分りにくいが、下の圖に

就いて、御覧になれればよく分ります。



斯く二三の別ちはありますが、此の時代は、結髪よりも、垂髪の方が、婦人の嗜好に適つて居たものと見えて、多くは、垂髪にして、仕事などいたす時の他は、結ばなかつたものと見える。

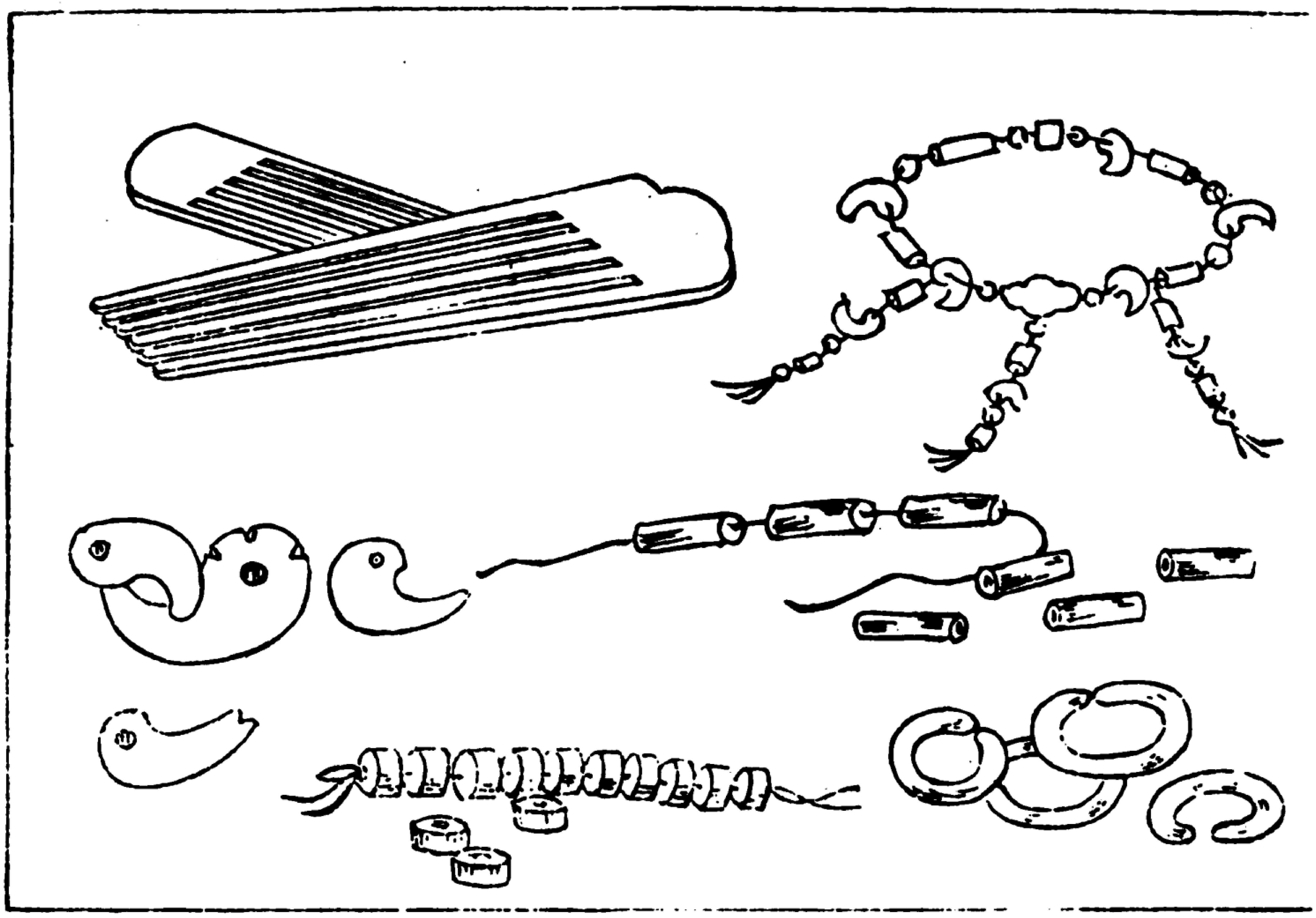
頭の装飾品としては、前申した鬘のみである。櫛は、此の時代既に在つたが、其の材料は竹にて造つたもので、装飾と云ふよりは、寧ろ、實用的のものであつたのであります。

又、装飾品としては、釧（クシロ）頸玉（クビタマ）足結（アユヒ）など云ふものがある。

釧と云ふものは、多くの鈴や、いろ／＼の玉を緒に貫いて手首に纏ふて居たので、一名、手纏（タマキ）とも云つたのである。

頸玉と云ふは、能く神さまの繪なんかに在る様に、いろ／＼な玉を幾つともなく長い糸に通して、頸にかけて居たものである。下の繪を御覧になれば明かです。

足結と云ふものは、袴の裾を結ぶ所の紐に、多く鈴や玉をつけて、歩む度毎に、カラ／＼チリ、ンと鳴る様にして居たのである。丁度、當今五六歳



の娘などの、下駄に鈴をつけると同じわけでせう。

玉は、曲玉、(マガタマ)管玉、(クダタマ)臼玉、(ウスタマ)平玉(ヒラタマ)など、其の種類が澤山ある。從つて色も、赤や黄や、青や黒など在つて、一樣でない。又、耳飾として、今の支那婦人の樣に、輪を耳に下げる事が行はれて、少々生意氣な女子は、外耳の周緣に穴をあけて、耳朶に、寶石や金環を下げて居た樣子である。

扨て此等の原料は、一體何であるかと云ふに、何れも、金屬や、寶石類で、青瑯玕、翡翠石、出雲石水晶、瑪瑙、琥珀、硝子、黄金など、主として、此の材料に用ゐられて居る。今も、往々土中より堀出す樣子である、現に、上野の博物館などには、澤山備へてあるから、就いて御覽になれば、くわしく、知ることが出來ます。

以上記したので、其の大體はお分りでせう。もとより貴いと卑しいとに、依つて、多少の差別はな



いではないが、先、上下共前申した樣で在つて、男の服も女の服も其の色目などが違つて居るばかりで、製法には、少しも異なつた所はなかつたのである。只女子は、袴を表すのを嫌つて、裳を長くして居たらしいのである。今或る書に依つて、其の對照圖を示しますれば右の如くである。太古の部は、以上申しました丈に止めておきまして、次號よりは、奈良朝時代にうつること、いたしませう。（續出）

▲附記　是迄揭載したるは、女子服裝の沿革の中の、上古の部なり。

あな覺束な

澤靜子

法師と女は、酒のまぬがよしと、昔の人の言はれたる。さる事にて、女の醉ひしれたるは、見ぐるしき限りあり。某の歌會とて、男女うち集ふ會あり。去年の歳の暮に、納會の催しありて、多くの人々うち集ひて、歌よみ、披講はてゝ、年忘れの

宴會催するあり。廿六七とも見ゆる束髪に鳶色の袴きたるが、いち賢う立働きて、こゝに坐りたまへ、こゝへも、疾く膳部まゐらせよ、などまめやかに振舞ふさま、男慣れたる身のこなし、誰が目にも、女教師とは知りぬべし。やがて盃とり上げて、各、うち傾ける程に、その女教師、みずから徳利うち持ちて、人毎に、酌をなしつゝ行きめぐりしが、いつ飲みたりけむ。顔赤うなるまゝに、高く興じつゝ、ガヤ〳〵と打笑まひ、果ては、その盃たまはり候はん、これ一ッ聞召せなど、恰も、妓女の振舞ふ如くに、口輕く、言葉かはすさま、驚く許りなり。今一個の女も、おなじく教師にやあらん、大丸髷に、紋付の着物裾長に着なしたる



が、年も廿の上一ッ二ッや越えぬらんと、思ふ程なるに、これも、男の中に打入りて、いたく飲みたるさまなりしが、銀の烟管もて、烟りふき立て〳〵、灰ふきの音高く、打語るさま、其の心の内は知らず、よき振舞とも見えず。かくても、多くの女生を導く事を得べきものにや。覺束なし。

同志會にて、四十餘りの女の、歌よく讀むさまに、何事も言ひしらひて、何雜誌に、誰人の云々とよみしは江戸調とやらの姿なり、千浪などの風調と言はまし。くれの新聞に、某伯の奥方の歌あるを見玉ひしや、あの歌は、下の句は、新古今にある、雜の歌にて候ふものをなど、遺なく

論ふさま、歌の道も、いたり深きが如くに見えてさこそよき歌よみ出づらん。あはれ、疾ぐよみたまへとまつ中に、やがて、當座の歌よみ出で、短册とりて、さら〜〜とかい付けたるを見れば、「あすもまた霜ふかゝらん此のころの夜さむの床に聞く時雨かな」よみ得たりと思へるさまにて、人にも見せ、自らもうち返し吟じたるが、この歌、いかにぞや。時雨は冬のものなり、夜寒といふは秋なり、夜を寒みといはゞ冬なり。かゝる事知らぬ人はあるまじきに、ことさら、夜の時雨をきゝて、あす霜ふかしと思ひやるも理り知らぬいひさまならずや。かくても、歌の教へ子もちたりと言ふ。いかなるさまに導くらん。覺束なし。



某の官人の家を訪ひたるに、けふは土曜なれば晝の下りには歸り侍らん、待たまへと、取次の男の言ふまゝに、對面の室に入りて待つ折しも、奥の方に夫人の聲にて、下婢よびて言けるは、お晝の惣菜は、何を調じたるやと問ふ。鮭の鹽引にて候といふ。妾は好ましからず、最早鮓も出來たる頃なり。鮓を廿錢はど買ふて來れと命ず。下婢かしこまりて、出でゆくさまあり。己れ思ひけらく、家の妻女たるもの、惣菜を下婢に打任せて、問はでは知らぬ程あるもいかに。其のもの好ましからずとて、鮓を故らに購ふて、己れひとりたべんとすなる。かくても、一家の經濟を維持する事のなるべきにや。いと覺束なし。

某の會社の重き役する人、近頃新に令室を迎へぬ。身にふさはしき教育もありて、夫に仕ふる道をわきまへたれば、夫婦の中も、睦じかるべく思ひやらるゝ。この夫、つねに交際の道しげしとて、夜も大かた更けたる後ならでは歸り來ず、歸る毎に、酒のまでは歸らず、旅にゆけば、手紙もて、折ふしの音づれはなきにあらねど、此の頃京都にゆきてよこせし手紙を見れば、昨日京につきぬ、明日は、大坂へ行くべきあらましぞかし。其の後の都合もて、四國へ渡らんも計りがたし京へ歸るは、七八日の後なるべしとかきて、途中より發せしさまなり。いづくの某の家に宿りしとも記さず、家の內の事、一筆も記さず、己が身の上に恙なき由をも、妻の身の安否をも問ひこさず。冷やかなる淡き心のうち見透されて、女の身には、いか許り悲しかるらん。かゝるさまにても、猶、この妹脊の道はながくつながるべきや。これもまた覺束なし。



本郷の某坂といへるに、下宿といへる宿あり。二階には、大學へ行きて學ぶ者、某の學校へ通へる者など、七八人の若き人住めり。北の廊下の階を下れば、二間の方丈許りなる室あるなり。此に住めるは、田舍より遊學す

とて、獨り出で來たりたる女あり。太りたるかたは、廿才許りにもやあるらん。一人は十七八ほどに見ゆ。太りたるが言ふ。昨夜は、二階の某氏と浪花ぶし聽きにゆきたるが、何丸とかいへるは、聲も容子もよき男あり。今宵はゆきて、聽きたまへと云ふ。若きが云ふ、妾は、某君と約束しはべり、今夜は、小川町の敎會へゆきて英國の某氏に對面すべきあらましあり、浪花ぶしにゆくよりは、某氏に逢ふこそ面白けれと云ふ。かゝる折から、いづくより來りけん。若き男一人、案內もあく入りて、笑み片まけ、今夜は君のために、いと〳〵



喜ぶべき消息をもて來りぬ。吾が好めるもの調へて、饗應したまへと、太りたる方の背ら輕く打てば、そは何事にてはべる、疾く言ひたまへとて、とりつきてせがみ爭ふなど、若き女のあるべきさまあらず。かくて、其の男一通の文とり出で渡せば、太りたる方俄に嬉しみて、手を合せて、男の方拜むさまなるが、やがて柳の衣函より、鮮やかなる衣とり出で、うち裝ひ、香水ことことしうふりかけ、鏡引よせ〳〵粧ふ。かゝる中に若き方は、其の男と、何事にや潛かに語ふ。其の聲は定かあらねど只、嬉しきさまに打笑みて、程なく、二

人打つれ出でゆく。太りたるは、二人の出でゆくを見送りもせず、心も身も置どころなきさまにて此もあわたゝしく出で行きぬ。いかなる事ども學ぶためにかいと覺束なし。

某伯の後室とて、麻布の片ほとりに住みたまふ方ありき。先年、殿は身まかりたまふて、十六になりたまふ、令孃と、十二の公達とを養育したまへり。家には、男女の召仕ひども四五人あり。この、後室心輕き性にておはせば、おん供をも具せず、近きわたりには獨り出行きたまふのみか、寄席といへる處へも、折ふしは一人にて渡りたまふなり。かゝる事は、世の善惡なき口の端に漏れぬ御ふるまひなりとて、老いたる女など諫め申せば、うち笑たまひて、夫ある身にてそ、然る慎みはあめれ、妾は仕ふる夫なく、守るべき諚もあらぬぞかし。四十の齡をやがて越す身なれば、前途も長しとは思はず、心まかせに何事もなさまく思ふぞかしと、口賢く言ひ張りたまふ。さて、この後室の尤も好みたまふは「ホヲカイ」ぶしとかいへる、下賤の唄ふ謡をこの上なく愛でたまへば、頭に平らかなる桶うちのせ、團扇太鼓うち叩きて、歩む男を好きたまふ。されば、日に幾たびとなく呼入れては聽きたまへり。かゝる事にて、二人のおん子を後見したまふことの成るべきにや。いと覺束なし。



さる秋の末、千住の停車場に、車のとゞまりし時ぞかし。窓より見渡せば、男の敎員二三人、女子の學生の、十七八より十四五とも見ゆるを、あま

た引つれて來りぬ。其が中に、吾が車の窓近くへ來りて、打語ふ男女あり。男は教員にもや。女は學生とこそ見ゆれ。男は、女の穿ちし靴を風呂敷につゝみて、手づから之を携へ、女には、麻うらの草履を、只今買い來りて穿かせたる様なり。かくて、二人何事にや親しげに語るを、此方に立て見つゝ、ひそかに笑ふ女生あり。其の祠を聞くに、某の君は、人の見るところにても、彼の様あり。少しは、他の譏りも顧みよかし。昨日も、教室に二人居殘りて、室の戸を鎖せしと云ふ噂もありぬ。怪しかる振舞や、などあざみ笑ふ。これを聞きて、また一人も、窃かに笑ふめり。いかなる秘事やあるらん、聞まほしと思ふ程に、車は動きいでたり。この二人の中らひ、いかなる交りにや。師弟の交りの至れるにや。覺束なし。



花のゑまひ

黑田撫泉

頬かむり

御殿山のあたりに物多くもたりて、ゆたかに暮す人ありけり。そがまな娘は、八重子となん申しける。人から愛きやうづきて、萬の事まめやかに振

舞ひ、をり〳〵は、さるがう事をしいでゝ、人を笑はせなどしけり。或時、客人ひとり訪ひ來りて、母にむかひ、四方山の物語ひして、頓には歸らんとする氣色なし。此の日、母は八重子を伴ひ、上野の動物園に獅子を觀んとて、衣など取り出たる折なれば、然いひて歸さんもいかゞとて、いと困じにけり。密と八重子を物の蔭にまねきて、手もて頬かむりの形をなし、また、箒もて壁を掃く似して、其の心を得せしめけるに、八重子は早う領き、笑を袖につゝみていにけるが、軈て手拭とう出し頬冠りをなし、また箒をもちて出來り、其の客人のおはする前をひたもの掃きけり。母が、これを見てあわてまどひて、客人のおはするに、何とてさるぶらいなる事をかする、彼方へいねとて追ひやりけり。とばかり過して、其の客人のまかん出ける後、八重子をよび、わが敎へしは、箒に手拭をかぶせて立てよとてなり。其方に冠れとにはあらぬものを。とて、腹かゝへて笑ひけるとなん。

針仕事

神田のなにがしの姉むすめ、さる方へ嫁ぎて、この春、新年のほぎごと申さんとて、里方へ訪ひ來にけり。ことしは八才ばかりなる妹、めづらかなることに思ひて、姉の身のほとりにまとはり付きて、悦ぶ事限なし。姉上のありつるやうもなく、お嫁とやらんになりて後は、よそ〳〵しう顔などつき給ふことのをかしさよ。妾もやがては、其のお嫁となりて、姉上のごとく、何方へなりとも行くべき身なり。と母上のゝ給ひき。若しさる事のあるときは、妾は、とつぎたる夫の名を何といひてよぶべきや。叔父さまとやいはん、お父さまとや申すべき。妾は、其のよび名に惑ひて侍り。姉上は、

こたび持ち給へる叔父さまを何とかの給へる。などあどなき事を問ひ出でゝ、息もつき敢へぬばかりなり。母なる人、わざと腹立ちて、さなまとはりつきそ。姉上のうるさく覺さるゝに。おとなしうせずば、其方をも、是よりお嫁に送りやらんずるぞ。といへば、妹はまことゝや思ひけむ。わと泣き出でゝ、母上しばらく待ちてんや。今お嫁となりてゆくときは、一定追はれて出ださるめり。妾は夫が悲しう侍り。とて聲わなゝかしいふ。いかなるにか、左は泣くぞとゝへば、いまだ針仕事を習はずとてなりけり。

見合

左る方の愛娘、年頃なりとて、なかだちする人あり。縁談おほかた進みゆきて、星の岡の茶寮に見合をなんなしける。得もいはずうちそうぞきて、母親に手を引かれて茶寮にゆきけり。いたれば、婿がねなる人、早う待ちつけてとく〳〵といふ。左らば此方よりは、一服の茶をたてゝ持ていで、そを見合とはせめとて、母は、薄茶ふくよかにたてものして、娘してさゝげもていでしむ。娘は、今日ばかり一期のうちの恥しき日とて、顔うち赤め、心もときめきして、わなゝき〳〵持て出づ。端なくも眼くるめくまゝに、柱に額うちつけて、茶碗を取落せば、美くしう泡のたちたる青きもの、さとこぼれて、疊の上に飛びちりけり。娘は思ひがけぬ事なりければ、はとばかり胸とゞろかして、ひれふしたる頭上ぐべうもなし。母もなかだちする人も、興さめてぞ見えける。婿がねは心ききたる人とて、事もなげに打ほゝゑみ、斯るわざ、誇らかにしおほせたらん程は、心にくゝこそ思はるれ。手許わなゝかしてようせざりしは、深き窓のうちに育ちたるなめり。とて事にまぎらかして

立ちぬ。此のひまに、娘を次の間につれゆき、衣替へさせ、疊を拭きなどしてすましけり。後になかだちする人、婿がねの心いかにと、へば、茶をこぼしたるいとよし。とて、此の緣めでたう結び得たりとかん。

衝口漫言（十三）

白松苑主人

◎女流の歌よみ

加茂眞淵の門に、女流の歌よみ少からざりき。そのうち殊にすぐれたりしは、よの子、茂子、倭文子の三女なりしとぞ。餘の子は、漢文漢詩にさへたけて、眞淵翁に代りて、消息文などかきしといへば、その才のほどおもひやらる。岐蘇路記といふ旅行日記もあり。茂子は、作歌の妙は、よの子も及ばぬばかりなりき。そのうたのうちに、

春の初のうた

かぎりなく來れどもおなじ春なれば
あかぬ心もかはらざりけり

眞淵翁之を許して、天暦の比の女房の口つきなり、と賞せられし由、淸水濱臣の泊々筆話に見えたり。なほ同書に、

みつになりけるをさな子のなくなれるをり

いはけなくいかなるさまにたどりてか
死出の山路をひとりこゆらむ

商人を

わたらひのこゝろばそさもしられけり
いとうる賤のたえずくるには

前者には、無限の愛と、無量の涙の迸しれるさまは、誦すること數回にして、いよ〳〵、その情のふ

かきを覺ゆ。後者は、糸といひ繰るといふをもて、心ぼそさの緣語とせるなど、巧みなりといふべし。又、倭文子も、いとすぐれたる才女なりしが、惜いかな、年二十にてみまかれり。まだうらわかきほどなりけれど、その心の花の、にほひやかに美はしかりしことは、家集文布を一見てしるべし。その辭世の歌に、

桐の葉のこよなと人はいふめれど
　しばしばかりやいそぐなるらむ

秋風吹いて、梧葉先づひるがへる。他の樹木よりは、こよなき早世に似たれども、人世五十の生涯、僅の天地にしあれば、おくるゝも先だつも、さほどの相違はあるまじ。われ今不幸にして、無常の風に散りぬれども、只世の人よりは、しばしばかりやいそぐなるらむ。と詠せしなり。いとあはれあらずや。眞淵翁の之を直されしには、

人の世に先だつことのなかりせば
　きりのひと葉もちらずやあらまし

いづれも、姿、詞高く、なつかしき歌どもなり。之を當時の、所謂女流文士のえせうたに較べ見よ、一は、おごそかなる家庭に育ちて、品高く、心うつくしき人の語を聞くが如く、一は、父子の禮だになき紊亂せる家庭に於いて、無敎育者の狂言綺語を耳にするが如し。ねくたれ髮、もつれがみ、一流の詞をもて天眞爛熳と心得、接吻を以つて愛の極とし、裸體を以つて美の極と唱ふるが如きは、皆、眞の人間の趣味を解せぬ者にして、いづれも、僞文學者、僞美術家たるを免れず。然り、おのれ一人責を負ひて、狂愚の標準とあるはよけれども、社會を毒する罪に至りては、甚輕からずといふべし。我等は、今更に、左の諸氏の歌を吟詠して、彼の明星風とやらに、吹きけがされし、邪氣妖氛を

いぶき拂ひてん

富士山　　水無瀬中納言

「わすれてはそらにも雪のつもるかと
見れば雲間にはるゝふじのね」

「積りしはきのふのもちに消えはてゝ
けさみなづきの不二のはつ雪」

同題　　契沖阿闍梨

「ふる雪にうづもれながら高き名の
よもにかくれぬ山はふじのね」

「久方のそらに月日をみすまるの
玉とうながせるふじの山姫」

同題　　橘枝直

「天のはら照る日のちかきふじのねに
今も神代の雪はのこれり」

◎小説と教育

小説は、家庭教育の助教にして、社會教育の最大勢力を有する者なれば、作家の用心と理想とによりて、社會の毒とも藥ともなるは論をまたず。さはれ、余輩は不幸にして、當今小説の多數を以つて、有毒の極と斷言するに躊躇せざるなり。曲亭馬琴が筆、この點に於いては、大に成功せりといふべし。こは、嘗て余輩が、馬琴の女性について述べたることの如し。彼の馬琴が大著述たる八犬傳に、濱路が信乃に別を惜む條をもて、人情あり得べからざる曲筆にして、こと更に作り構へたるは、小説の精神に悖れりなど、非難する人のあるは、例の裸體をもて、美の極といふ者と同一なるべし。情を矯め、情にひかされざるに於いてこそ、信乃が眞の大丈夫なれ。是に於いてか、讀む者の心をして、自ら高潔にして、心ゆかしき美風を印象せしむるにこそ。

「さらば、道中恙なく、折から烈しき日まけせ

ず。許我へ參りて、名をも揚げ、家を興して冬籠、北山おろし吹くころは、風の便りにしらせてたべ。筑波の山のこなたには、恙もなくて君ますと、思ふのみにて侍りてん。……

讀み去つて、物あはれにもやさしくて、毫も、近來小説のじやなくなと、厭ふべき臭味のあるなし。嗚呼、滔々たる小説家中、かゝる大文字をふるひて、社會の弊を矯正せんとするもの、一人だもあることなきは何ぞや、此の如くんば、秦皇を地下に起して、悉く、小説を焚かしめて可なり。

◎般若貌の意義

金借る時は惠比壽貌にて、返す時の般若貌とは、俗にいふ事なるが、般若とは、鬼女の代名詞と思ふから、かゝる誤解は出來しものなり。般若は、云ふまでもなき梵語にて、之を譯すれば、智慧の義なり。更に、さる恐しき意味あることとなし。故に、後世之を杜撰して、古の面細工をする者に、般若といふ名工ありて、特に、鬼女の假面に巧妙なりければ、終に鬼女をさして、般若といふに至れるなりといへり。されど、未だ、古來般若といふ名工のありしを聞かず。思ふに、謠曲の葵の上に、あらくおそろしの般若聲や、といふ句あり。こは、鬼女の大般若經を讀誦する聲の、おそろしげなるをいへるにて、此のおそろしとあるを誤解して、般若聲を鬼女の聲と心得違ひし、鬼女を般若といふことゝなりし者なりと。山本北山先生の語られしを、朝川氏傳へ聞きて、善庵隨筆に入れられたり。意義の轉訛する事、おほ方この類あるが多く、なほいくらもありぬべし。

◎同情心

むかし、堤　宰相榮長卿といふ人おはしけるが、或者の娘の姿、いと美はしきがありけるに、ひで

ろこひ渡りて、その親なる者に請ひ求めにけれど、おや、容易くゆるさゞりけるを、年月經て、やうやうにこしらへ、やどのかざしとすべくなりにけるほどに、かの女、疱瘡をやみて、かたちいたく醜くなり、眼さへ一つは盲て、初めの妖艶にひきかへて、さながら鬼の如くなりければ、今は、おやさへ疎ましくおもひけるに、榮長卿は、少しも悔める氣色なく、快く召し入れて、妾にして一生をおくらしめぬ。見にくしとても、丈夫の一言變ずべきにあらずといはれしとぞ。男女相愛の源は、皆、此の同情心の厚薄にあり。此の話、全く安珍淸姫の反對なれども、男子もかかるは稀なるべく、女子なりとも、此の境に處することは得易からざるべし。

◎ひなるべし

徂徠の著、なるべしの事については、既に前號に於て、文會雜記を引きて一言したりしが、兎園小說の中にも、これに關せる事をあげたり。即ち、富士谷成章その非を辯じて、ひなるべしと名づけたりとぞ。同書もとより非說多けれども、漢學者の餘力をもて、かくまでに我國書をもよみ渡して、發明せらるゝなど、專門家といへども、容易にいひ得べきに非ず。余、この「ひなるべし」を未だ見ずといへども、兎に角、よきは可なるべく、わろきはひなるべし。





小説 雪の梅（中）

饗庭篁村

雪の朝の空晴れて日影まばゆき障子のうち鶯の音のそれならで。お祖母様此のお床の間の梅を椽側へ出しますよ姉様がお歸り迄に皆な咲かせて置かなくつては昨日は寒いから堪忍してやつたの今日は蕾へ温いお湯を吹かけてやりませう、と可愛らしき聲して九歳ばかりの女の子の障子を明くれば日はさしてみて置炬燵の上に擴げし新聞紙の上にあたるに老女は讀さして顔を上げ鼈甲縁の大きな老人眼鏡を耳からはづし。オヽ日あたりへ出しておやり室で咲かせたのと違つてお庭の梅を折ッて瓶へさしたのであるから中々あとは咲きませんナンボお前がお湯を吹いてやッても姉様は今日お歸りだもの夫までに如何して昨日の寒さで皺びた蕾がふくらむぐらゐのものでせうよ夫ともお前の吹いてやるお湯には花咲爺の灰でも入つておりますか。アラお祖母様私にそんな奇妙なものはございませんけれどもよ姉様が昨夜難波様へお泊りになつてしまつて私に淋しい目をおさせだから今日お歸りまでに如何かして此の花を咲かせて是御覽なさいまし姉様が餘り他家へお泊りなさるから最う梅が此様に咲いて仕舞ましたと云つてあげたいのでございますよ、オホヽ夫ではいよ〳〵花咲爺をお頼みでなくば間に合ひませんホラ御門に音がする姉様が難波さんから送られてお歸りかツラ〳〵花子さんや御父様のお歸りでございますよ、と我子なれども家の主なれば老母は立上りて迎ひに出

でんとするところへ。お祖母樣只今、と我母なれど我子の呼ぶに馴れしたがひて立歸る細川頼忠。オヽお早かつたね。御父樣お歸りなさいまし、と母と娘の言葉に笑の花を咲かせ、ハイイヤ寒いどころではござりません能い雪見を致しました最う大分融け出しました早うお祖母樣も吾妻橋あたりまで行ッて御覧なれば能かつたに。イヽエ車で外の雪見より炬燵で庭の雪見が結構それに母樣さまが慈善會の事をかねて宇治橋さんへ御見舞にお出でのあとだから花子が淋しがつて今までお炬燵に迎ひ合て新聞を讀んで居ましたところオヤ〳〵皆な一度にお歸りだアレ花子が驅け出して……危ないぞよ……アレ〳〵姉樣に抱き付いて仕舞ッたコレよまだコートも取らぬのに……イヽエ私が其方の御座敷へ參りませう……左樣云へば此が一番暖かだ……ハイ〳〵只た一晩なのにお前花子が姉樣は長逗留だと待ち焦れてすでに花咲爺をお頼みになるほどの事だよ……ハイ〳〵宇治橋さんでもお變りがなく……オヤマア今朝晴いから銃獵……御運動が能いからいつも御壮健で、と喜び語る妻娘、母の機嫌に頼忠は只莞爾。御挨拶が濟んだら私がお祖母樣へ復命する事がある良藏も庭から椽側へ呼べ梅子はまだ知らぬが昨日お前を難波へ迎ひにやッた歸りに良藏がとんだ奇特な事をしましたお前がお泊りで殼車で歸ッて來たので途中急病の老婆と同じく盲目を助けて其の住居まで送り届けました……オヽサ良藏は能い心掛のものだよ夫でな今朝私も良藏の車で其の老女のところへ見舞に行ッた……イヤ貧しいどころか見るかげはない有樣だ盲目の方が琴を彈いて物貰ひ同樣に軒毎憐みを乞ふて歩く者ぢや……仕合せと病人も大した事はない夫も良藏が早く介抱し

て送り届けてやッたからでイヤまだ良藏より先に其の二人を救ふた慈善家があるそれも車夫だそうで……左樣それよ貧しい者の方が窮苦の事に同情が強い所謂我身抓つて人の痛さを知るだ併し人の難を救ふといふは急に其の場合に臨んで志しはありながら實行するは難い事だよ……良藏來たか御苦勞であッた緩くり其所へ掛けろ今茶も菓子も出る昨夜の御褒美としてお奥から出そうな事ぢやアハヽイヤ誠にお前能い事をして呉れたよ…其の車夫を尋ね當てぬが殘念ぢやよ併し尋ねて挨拶などしたら左樣いふ人は却つて迷惑に感じるであらうよ。良藏 誠に能い事をしてお呉れだネ。良藏や今お話を承ッて妾も嬉しく思ひますよ、と三方四方から褒め立てられて良藏額の汗を拭ひ。イヱ如何致しまして左樣お言葉では痛み入ります實は私も人立ゆゑ何の事かとッヒ車を止めて見ましたところ盲目と老人の急病人ア、氣の毒なとは存じましたが別に何の思案もござりませんでござりましたトコロを先に此の二人を勞つて居る車夫の如何にも其の深切が身にこたへまして……我知らず一人は私が乘せませうと口へ出して仕舞てから御主人樣の御車を汚してはと氣が付きましたが此の事を申し上たらお叱りもあるまいとヘヱ其の車夫の跡へ付いて行きました丈で彼の車夫が居りませんければ私は見過して參つたでございませう。ソコだ其所が良藏感心な上に感心なところだ我功に誇らず人の美を掩はぬところ我も嬉しい其の中で番地名前を見きはめて來たところも行屆いて居るお祖母樣お聞下さい母親さんもお聞なさい昨夜歸つて良藏は其の始末と憐れな有樣を話つた丈でありましたが今朝行つて見るとお惠み金まで頂いて有難かつたと禮を云ふので良藏めが慈善の

喰隠しが露顕致しましたアハヽ、是は何ぞ罰を申し付けずばありますまいアハヽ、難波から貰ふた祝儀を幾許だか其の包みのまヽ置いて來ましたのはナント氣に入つたではございませんか、今お話した車夫も二十錢これを聞いて其の晩のうちに其の表の新屋より炭一俵今朝は地主より五十錢を合長家の者が介抱ながら其の金品を書付に致したのを見せました……良藏は初筆で五十錢私は五圓アハヽ、少ないが一度には左樣も入るまい……お前も行くなら何か柔かな滋養物でも持つて行くが能い先づ晝後の事よ偖是は母と妻には、一二度お話申したがまだ娘等には云はぬ良藏も聞いて置いて心あたりが有らば早速知らせて呉れ三十五六年も前御維新の際の事ぢや私は若いに任せて賊情探偵といふ大役を自ら望んで引受けた……賊情探偵と其の頃は申したが官賊ともに今は一體分かつて云ふべき事ではないが其の時は先づ夫よ只では奥羽地方へ踏み込めぬので煤など顔へ塗ッて襤褸衣類に酒薦を纏ひ汚ない手拭を被つて乞喰と見せかけ小山宇都宮と入ッて行くと敵はなか〳〵凄じい形勢ぢや見付けられては身に寸鐵はなし其のまヽ切殺さるヽばかりぢやから百姓町人にも悟られぬやうにドウゾ一錢頂かせてと眞の乞喰を眞似て門々貰ひながらなれば道も捗どらぬ白河の町へ入ッたは日暮方荒物類雑穀など商ふやうな小い店の前へ立ッて例のドウゾ頂かしてと腰を屈め顔をよく認められぬやうにうつむきながら手を出すと廿歳ばかりの女が一人忙しそうに何かして居たがハイ上げますと一錢……今いへば一厘ぢやが小錢を持ッて私の手に渡しそうにしたがピタリ私の手を打ッて此樣な手の乞喰があるものかと罵られた時にはハッとして身の一大事迫れりと驚いたしかも此の

宿には敵勢充滿して居る事ゆゑ是より露顯する事かと思はず手を縮めて身を後へ引いた此の一刹那は今此で斯して話すやうなものではない……左樣すると女は低聲でお前さんは官軍の探偵だネと云はれた此の時は覺悟の我も身が震はれた併し聲を高くせず密かに問ふは或は志ある者か掌を見たばかりで僞乞食と見破るほどの女只者ならじと咄嗟の間に分別を定めいかにも其の通りぢやが皇國の爲ぢや見逃して呉れと打明けると左樣見ました今暮合時で人の氣の付かぬは幸ひ此方へ來てお隱れなさい二三人間者が入り込んだと先刻から大騷ぎゆゑ此の先の見張所へ掛れば迚も逃れられぬ早く家の物置の中に入ッて居て夜になッて見張所を越すかあとへ戻るか爲ろと中々分別のある女で小庭から折曲つて付いて汚ない物置の中へ入れられホット安心すると共にまた斯して置いて其の見張所へ注進に行くのではあるまいかと疑ひもおこり又女の云ふ通り是より先へ進まうか後へ引返さうかとの迷ひも出た其のうち暮果てゝから女が密と來て空腹からうと大きな握飯を二個呉れた此の時始めて心付いたが全たく空腹で堪らんのぢや噫如何なる女菩薩かと今は疑も晴れて有難く其の握飯を頂いた今に能い頃に知らせる此は私の家でないゆゑ家内の人にも知らせられない音をするなと立去つたゆゑ偖は官軍に心を寄する女丈夫かと頼もしく其の知らせを待つうち半丁も先か騷しい物音がした偖は身の上かと耳を欹てゝるうち頓て靜つたればやゝ安心するところへ彼の女菩薩の來て今見張所で大工になつて入り込んだ間者を捕へて大騷ぎであつた此の暇に土地の者の風で此の下駄を履いて何方へでも行けと歯のある下駄まで持つて來て呉れての注意に若しお前は官軍に心を

寄する者かと問ふとイヤ左様な事は女の身で知らぬが昨日も此の前で坊主になつた間者が捕へられた憫れな有様にお前さんも其の慘い目に遭ふかとばかり氣の毒ゆゑ助けて上げるといふのにますます感激して後來志を得たら報いをしたければ名を知らされよ又此の家はお前の何かと聞くと此の家は布施屋と云つて伯母の家で私は吉といふが報いも何も入らぬ只捕へられぬやうにしろ早くといふので禮もそこ〳〵其處を出て敎へられた通り見張所を越し尚奥深く入つて敵情を探り聊か此の身の功を立て其のまゝ奥州路の我軍に合したが事定まつて後も遠方の任につき白河の恩を果さず心にのみ思つて年を送り三年目にすこしく身の暇を得て白河へ赴いたが同所は兵火に市中全燒となり誰が何處へ行きしか跡形もなしといふに便を失ひ其のうち私も西東と飛び廻つていよ〳〵手蔓も絶果

たが布施屋をいふと吉といふ名は忘れず今其の人が無事でおれば六十前後何卒巡り逢ひたいものと思ふところに良藏が助けた一人の名は間邊お吉とあるといふにまた今更に思ひ出して若しやと尋ねて出生地や今まで住んだ所を尋ねて見たのであつたが西と北との全然相違其の人ではないが其の名だけも心やり彼の二人の老後を安く送るやうに致してやりたいものなり、と長物語りに二人の娘は父の昔の危難をおもひ顔を見つめて眼には涙の一杯なり、母も妻も其の時を思ひやり其の人の情を今の如くに喜べば、良藏も感じて俯向きしまゝ一語もなく、主も今昔の感に堪へず撫然として手を叉きしが何思ひけん又打笑みぬ。



天津籠城中の鄭夫人（八）

森林生記

六月廿二日の午後、露國領事館から通知があつた。それは、

約十六哩ばかり、塘沽の方面に於いて、二千乃至三千の軍隊、鐵道線路に沿ふて、進行し來りつゝあり。多分聯合軍ならん。

と云ふ通報であるから、籠城者は、怪しい報告である、多分聯合軍ならんなどゝは不安心ではないか。若し敵であつたなら、愈困る。大方、露國コサック騎兵の偵察であらうが、偵察するなら、モッと能く接近して、確乎見て來さうなものだ。如何も、露兵の行る事は氣に入らぬなどゝ、惡口を云ふ人があるから、濱子夫人は笑ひながら、

「貴君方、爾惡口を仰有つたものでもありません。露國の兵隊さんが澤山居たればこそ、今日まで居留地の安全を、保ち得たではありませんか。然し最う、日本の軍隊も參りませうから、其が若し聯合軍なら、必ず、其の中に日本兵も多く加はつて居りませうと思ひますわ。」

など話して居たが、其の日は來なかつた。翌二十三日の夜、明けて間もなく、ズドン／＼／＼と銃砲の音が、次第／＼に近づいて參りまする。未だ寢て居る人々もあつたが、

「是は、救援軍が近寄ッて來たぞ。有難い。敵を打攘ひつゝ、行進して來るに違ひない。」

「有難い／＼。然も敵も、一生懸命に防いで、入れまいとするだらうから、隨分激戰になるだらう。」

「日本兵も、無論居るだらうが、萬望澤山居て呉れゝば宜いが。」

と各自思ひ〳〵に話して居る中に、濱子夫人は双眼鏡を携つて、雄々しくも、人より先に、玄關の上の高塔へ上つて行くと、玆處には、番兵がチャンと見張ッて居るから、濱子は、

濱子「救援軍が來たやうで厶いますね。」

番兵「ハイ、來た樣で厶います。今、報告しやうと思つて居た所です。ア、ー來ます〳〵、續々と來ます。」

濱子「是は、想ッたより澤山參りました。サア是で、モウ〳〵安心ですよ。」

急ぎ高塔を降ッて、人々に之を告げると、籠城者一同の喜びは、一通りではありません。其の中にも婦人達は、嬉し淚に咽んで居る者もあり、雀躍をして嬉しがるもあり、中には、籠城以來鬱ぎ込んで了つて、一度も笑ひ顔を見せた事のない某婦人の如きすら、嫣然笑ッて、

「皆さん、嬉しう厶います事ねい。モウ御安心あさいましよ。妾しが引受ますすよ。」

濱子「誰でも引受けますよ。オホヽヽ。サア皆さん、水の準備をして下さい。川向ふへ着いたら先、第一番に水を持つて行つて、飲まして上げなくてはありませんよ。」

と濱子夫人は、甲斐々々しくも、襷掛けとあり、自ら先に立ッて、手桶に水を汲み入れ、壯健ある男子と共に、白河の岸に、之を持ち行かんとするから、小栗貞雄君などは、之を見て、

小栗「奥さん、貴女が自身に、其樣な事せずとも、持ッて行く人は、他に幾人もあるではありませんか。」

と止めたら、濱子は、莞爾笑ッて、

濱子「それはありますが、然し、折角此の炎熱中を遥々、妾共を救ひに來て下すッたですから、

假令、一杯の水でも持つて行ッて、其の苦を慰さめるのが、聊か報ゆる志です。」

と云ッたさうですが、傍に居た人は、之を聞いて、皆感動したさうである。濱子夫人が、恁云ふ振舞であるから、之に從ふ婦人們も、自ら鼓舞せられて、毅然奮起し、避難して居る洋妾達まで或は桶、或は、小さき瓶、又は鐵瓶、湯沸瓶など各自思ひ〳〵に水を携へて、川岸へ馳せ行きますと、已に此の時は、聯合兵が、向ふ岸に在る武備學堂の前から、小船に乘つて此方の岸に漕ぎ着けますが、之を迎ふる各國人も、亦迎へらるゝ諸國兵も、皆、滿面に喜悦の色を浮べ、眼中何となく涙を含んで居ない者はない。然し、今着いた聯合軍の多くは、英と露、それから獨と米との兵も、若干加はつて居るが、不思議にも、日本の兵が更に見えない。我が日本人の迎ひに出でたる人々は

殆ど意想外の感に打たれて、皆、愕然として了いました。濱子夫人は、英人の洋妾であつて、英語に巧なる、加納菊江と云ふ婦人に向ひ、

濱子「お前さん、彼の英國の士官に向ッて、日本兵は來ませんかと云ッて、聞いて見て下さい。」

と吩附たので、菊江は「畏りました。」と、今岸へ上つた英國の士官に問ひ尋ねると、彼は先「アッハ、、、、。」と哄笑して「日本兵一人も來ませんと、輕く應へて、行き過ぎて了ッた。之を聞いた日本人は、愈惘れ返ッて、唯、顔と顔と見合すのみであつた。流石の濱子も「マア甚麼したでせうねえ。」と云つた切り、後の語は續かなかつた。

スルト加納菊江女が、

菊江「令閨、呆れて物が云へませんねえ。……今、彼の外國士官の云ふ事を聞いたら、眞個に癪に障りましたよ。日本と云ふ國は、未だ人道など

と云ふ事は知らない國だ。人道を知つてる國なら、此の國へは一番近いのだから、疾くに兵を送らなくてはならないなんッて爾云ッてますよ。口惜いぢァありませんか。けれども、外國人の云ふのも道理ですわ。何爲、速く日本では兵を送らないでせう。」

濱子「それは、何か御都合があつての事でせう。軍隊の事は、素人には分りません。況して、女などには、尙更分りやァーしませんはね。」

菊江「だつて餘りですわ。此の儘見殺しにすれば、妾活き代り死に代つて、日本政府へ執ッ着いてやりますよ。」

叫んだので、一坐忽ち大笑ひとなつて了ッて、持ち來ッた水は、皆、外國兵に與へて、空しく歸ッたが、廿五日になつて、白石大尉が、太沽から、部下の兵五人を連れて來ッたので、始めて、福島少將が、廿三日に、太沽沖へ到着されたと云ふ事が分り、一同、轍鮒の水を得たる心地が致しました。廿九日に、福島司令官が、歩兵第十一聯隊の第二大隊を率ゐて、天津に到着し、それから、晝夜、殆ど絶間なき戰爭で、愈七月十三日が、天津城總攻擊と爲りましたが、此の日濱子夫人は、些し頭痛がするので打臥して居ると、俄に、「火事だ〳〵」と、騷ぎ出した、濱子夫人は、籠城の初めより、良人永昌氏に、「若し、領事館が燒ける樣なことがあつたら、和女は、兩陛下の御眞影と、大事な書類を、第一に持ち出しなさい。それから短刀は、始終肌身放さず、携帶してお在で。」と斯う云はれて居ますので、今火事と聞き、此等の物を二階に取りに行かんとしたるに不思議にも、領事館が、烈しく震動出すほどの響がして、忽ち地も裂ける樣な凄まじい音が、がら〳〵〳〵ッと聞へ

た。其の恐ろしさ激しさに堪へかねて、流石に雄雄しき濱子夫人も、思はず、一度階子段の下へ俯伏たが、此樣なことでは不可と、我と我が心を勵まし、氣を取直して起上り、復た、階子段へ足を掛け樣とする時、後ろから、「奥さん殆平、早く外へお遁なさい。」と留むる者があつたが、其樣なことには一向搆はず、振向きもせずに濱子夫人は二階へ駈登り、先づ兩陛下の御眞影を取外して、それから、其の下の箱に入れある大事な書類、是を手早く取出して懷中なし、御眞影を小脇に抱込み、復び馳せて、階子段の半迄降り來し時、亦もやズドーン、何とも譬へ樣のない音響がして總身震ひ、己に足を踏み逃さんとしたるを、辛くも踏締め踏堪へて、さうして漸やく下へ降りくると、庭の方から、「奥さん、出て御覽なさいまし。早く出で。」と大聲に呼ぶ人があるから、濱子は、御眞影を小脇に抱込んだなり馳出して、「マア、今の音は何でせう。」「彼れを御覽なさいまし、アノ煙りを。」と云はれて其の人の指す方を眺むれば、恐ろしくも、三十丈ばかり煙りが立昇つて居る光景は、宛然黑雲の瀧の、落ち濺ぐかと怪まるゝばかり、四面悉く薄暗くなつてをります。濱子は、始めて安心なし、「アヽ、彼處には火藥庫がありますね、其れが破裂した音でしたね。」と云ふ時、鄉領事も來つて、「爾ぢや、火藥庫破裂ぢや……。ム、お前、御眞影を持出したな。好しそれがお前の第一の功だ……。」

意外に長くなりましたが、濱子夫人の勳功は、之で十分演べ盡してありますから、本回にて、完結として置きます。

野の白百合

清水橘村

詩中の稚子その一

たへにうるはしな、シロアム河の岸邊おほひて、小百合さきにほふ、かよわき足もて平和のみち、歩む稚子のさま、かくやありなむ。

こは、夕暮の靜かなる聖壇のほとりにきゝたる、讃美歌の一ふしなり。

稚子や百合、百合や稚兒。

＊　＊　＊　＊　＊

春の日長閑なるあした、美はしく繁れる樹蔭に行き、多くの小鳥の囀る聲まねする稚兒。稚子はいたく樂しみ、頭を轉じて樹をあがめつ、聲ふるはしては、鳥の鳴く音模するさま、まことに愛すべきかぎりなり。

器械細やかなる樂器も、えならびたゞ人の聲も、この稚子が驚くべき、音調におよぶべしやは。これ、學びの道に云ふ模倣運動なり。

＊　＊　＊　＊

ダーウィン氏、音樂の快感は、美感の初めなりと云へり。母のやさしき子守歌、こは稚子の音樂なり、朝うぶ聲をあげたる稚子の、早くも百五十日を經れば、面白き唱歌の聲、すみ渡る音樂の調べに耳をかたむく。

＊　＊　＊　＊　＊

兒こそ二人が鎹なる、九十九の髪の白雪の、榮えの華冠得させよや。喜びこはる十字架兒なり。
たゞ頼る父、たゞたよる母。

こは、わが詩の一句なり。

げに稚兒は、夫婦のかたき愛のくさり、きるべくも切れじ、また寶二人守るこそ樂しき極みなれ。

た。其の恐ろしさ激しさに堪へかねて、流石に雄雄しき濱子夫人も、思はず、一度階子段の下へ俯伏たが、此様なことでは不可と、我と我が心を勵まし、氣を取直して起上り、復た、階子段へ足を掛け様とする時、後ろから、「奥さん殆乎、早く外へお遁なさい。」と留むる者があつたが、其様なことには一向搆はず、振向きもせずに濱子夫人は二階へ驅登り、先づ兩陛下の御眞影を取外して、それから、其の下の箱に入れゐる大事な書類、是を手早く取出して懐中なし、御眞影を小脇に抱込み、復び馳せて、階子段の半迄降り來し時、亦もやズドーン、何とも譬へ様のない音響がして總身震ひ、已に足を踏み逃さんとしたるを、辛くも踏締め踏堪へて、さうして漸やく下へ降りくると、庭の方から、「奥さん、出て御覽なさいまし。早く出で。」と大聲に呼ぶ人があるから、濱子は、御眞影を小脇に抱込んだなり馳出して、「マア、今の音は何でせう。」「彼れを御覽なさいまし、アノ煙りを。」と云はれて其の人の指す方を眺むれば、恐ろしくも、三十丈ばかり煙りが立昇つて居る光景は、宛然黒雲の瀧の、落ち濺ぐかと怪まるゝばかり、四面悉く薄暗くなつてをります。濱子は、始めて安心なし、「ア、、彼處には火藥庫がありますね、其れが破裂した音でしたね。」と云ふ時、鄭領事も來つて、「爾ぢや、火藥庫破裂ぢや……。ム、お前、御眞影を持出したな。好しそれがお前の第一の功だ……。」

意外に長くなりましたが、濱子夫人の勳功は、之で十分演べ盡してありますから、本回にて、完結として置きます。

野の白百合

清水橘村

詩中の稚子その一

たへにうるはしな、シロアム河の岸邊おほひて、
小百合さきにほふ、かよわき足もて平和のみち、
歩む稚子のさま、かくやありなむ。
こは、夕暮の靜かなる聖壇のほとりにきゝたる、
讃美歌の一ふしなり。
稚子や百合、百合や稚兒。

* * * * * * *

春の日長閑なるあした、美はしく繁れる樹陰に行き、多くの小鳥の囀る聲まねする稚兒。稚子はいたく樂しみ、頭を轉じて樹をあがめつ、聲ふるはしては、鳥の鳴く音模するさま、まことに愛すべきかぎりなり。

器械細やかなる樂器も、えならひたゞ人の聲も、
この稚子が驚くべき、音調におよぶべしやは。
これ、學びの道に云ふ模倣運動なり。

* * * * * *

ダーウィン氏、音樂の快感は、美感の初めなりと云へり。母のやさしき子守歌、こは稚子の音樂なり、朝うぶ聲をあげたる稚子の、早くも百五十日を經れば、面白き唱歌の聲、すみ渡る音樂の調べに耳をかたむく。

* * * * * *

兒こそ二人が鎖なる、九十九の髪の白雪の、榮えの華冠得させよや。喜びこはる十字架兒なり。
たゞ賴る父、たゞたよる母。
こは、わが詩の一句なり。
げに稚兒は、夫婦のかたき愛のくさり、きるべくも切れじ、また寶二人守るこそ樂しき極みなれ。

天津籠城中の鄭夫人（八）

森 林 生 記

六月廿二日の午後「露國領事館から通知があつた。
それは、
約十六哩ばかり、塘沽の方面に於いて、二千乃至三千の軍隊、鐵道線路に沿ふて、進行し來りつゝあり。多分聯合軍あらん。
と恁云ふ通報であるから、籠城者は、怪しい報告である、多分聯合軍あらんなどゝは不安心ではないか。若し敵であつたなら、愈困る。大方、露國コサック騎兵の偵察であらうが、偵察するなら、モッと能く接近して、確乎見て來そうなものだ。如何も、露兵の行る事は氣に入らぬなどゝ、惡口を云ふ人があるから、濱子夫人は笑まひながら、
「貴君方、爾惡口を仰有つたものでもありません。露國の兵隊さんが澤山居たればこそ、今日まで居留地の安全を、保ち得たではありませんか。然し最う、日本の軍隊も參りませうから、其が若し聯合軍あら、必ず、其の中に日本兵も多く加はつて居やせうと思ひますわ。」
などと話して居たが、其の日は來なかつた。翌二十三日の夜、明けて間もなく、ズドン〳〵〳〵と銃砲の音が、次第〳〵に近づいて參りまする。未だ寢て居る人們もあつたが、
「是は、救援軍が近寄ッて來たぞ。有難い。敵を打攘ひつゝ、行進して來るに違ひない。」
「有難い〳〵。然も敵も、一生懸命に防いで、入れまいとするだらうから、隨分激戰になるだらう。」
「日本兵も、無論居るだらうが、萬望澤山居て呉れゝば宜いが。」

と各自思ひ〳〵に話して居る中に、濱子夫人は双眼鏡を携つて、雄々しくも、人より先に、玄關の上の高塔へ上つて行くと、茲處には、番兵がチヤンと見張ッて居るから、濱子は、

濱子「救援軍が來たやうで厶いますね。」

番兵「ハイ、來た樣で厶います。今、報告しやうと思つて居た所です。アヽ來ます〳〵、續々と來ます。」

濱子「是は、想ッたより澤山參りました。サア是で、モウ〳〵安心ですよ。」

急ぎ高塔を降ッて、人々に之を告げると、籠城者一同の喜びは、一通りではありません。其の中にも婦人達は、嬉し涙に咽んで居る者もあり、雀躍をして嬉しがるもあり、中には、籠城以來鬱ぎ込んで了つて、一度も笑ひ顏を見せた事のない某婦人の如きすら、嫣然笑ッて、

「皆さん、嬉しう厶います事ねい。モウ御安心なさいまし。妾しが引受ますよ。」

濱子「誰でも引受けますよ。オホヽヽ。サア皆さん、水の準備をして下さい。川向ふへ着いたら先、第一番に水を持つて行つて、飲まして上げなくてはありませんよ。」

と濱子夫人は、甲斐々々しくも、襷掛けとなり、自ら先に立ッて、手桶に水を汲み入れ、壯健なる男子と共に、白河の岸に、之を持ち行かんとするから、小栗貞雄君などは、之を見て、

小栗「奥さん、貴女が自身に、其樣な事せずとも、持ッて行く人は、他に幾人もあるではありませんか。」

と止めたら、濱子は、莞爾笑ッて、

濱子「それはありますが、然し、折角此の炎熱中を遙々、妾共を救ひに來て下すッたですから、

假令、一杯の水でも持つて行ッて、其の苦を慰さめるのが、聊か報ゆる志です。」

と云ッたさうですが、傍に居た人は、之を聞いて、皆感動したさうである。濱子夫人が、恁云ふ振舞であるから、之に從ふ婦人們も、自ら皷舞せられて、慨然奮起し、避難して居る洋妾達まで或は桶、或は、小さき瓶、又は鐵瓶、湯沸瓶など各自思ひ〳〵に水を携へて、川岸へ馳せ行きますと、已に此の時は、聯合兵が、向ふ岸に在る武備學堂の前から、小船に乘つて此方の岸に漕ぎ着けますが、之を迎ふる各國人も、亦迎へらるゝ諸國兵も、皆、滿面に喜悅の色を浮べ、眼中何となく淚を含んで居らない者はない。然し、今着いた聯合軍の多くは、英と露、それから獨と米との兵も、若干加はつて居るが、不思議にも、日本の兵が更に見えない。我が日本人の迎ひに出でたる人々は殆ど意想外の感に打たれて、皆、愕然として了いました。濱子夫人は、英人の洋妾であつて、英語に巧なる、加納菊江と云ふ婦人に向ひ、

濱子「お前さん、彼の英國の士官に向ッて、日本兵は來ませんかと云ッて、聞いて見て下さい。」

と吩附たので、菊江は、「畏りました。」と、今岸へ上つた英國の士官に問ひ尋ねると、彼は先、「アッハ、、、、。」と哄笑して、「日本兵一人も來ませんと、輕く應へて、行き過ぎて了ッた。之を聞いた日本人は、愈惘れ返ッて、唯、顏と顏と見合すのみであつた。流石の濱子も、「マァ甚麼したでせうねえ。」と云つた切り、後の語は續かなかつた。

スルト加納菊江女が、

菊江「令閨、呆れて物が云へませんねえ。……今、彼の外國士官の云ふ事を聞いたら、眞個に癪に障りましたよ。日本と云ふ國は、未だ人道など

と云ふ事は知らない國だ。人道を知つてる國なら、此の國へは一番近いのだから、疾くに兵を送らなくてはならないなんッて爾云ッてますよ。口惜いぢアありませんか。けれども、外國人の云ふのも道理ですわ。何爲、速く日本では兵を送らないでせう。」

濱子「それは、何か御都合があつての事でせう。軍隊の事は、素人には分りません。況して、女などには、尚更分りやアーしませんはね。」

菊江「だつて餘りですわ。此の儘見殺しにすれば、妾活き代り死に代つて、日本政府へ執ッ着いてやりますよ。」

叫んだので、一坐忽ち大笑ひとなつて了ッて、持ち來ッた水は、皆、外國兵に與へて、空しく歸ッたが、廿五日になつて、白石大尉が、太沽から、部下の兵五人を連れて來ッたので、始めて、福島少將が、廿三日に、太沽沖へ到着されたと云ふ事が分り、一同、轍鮒の水を得たる心地が致しました。廿九日に、福島司令官が、歩兵第十一聯隊の第二大隊を率ゐて、天津に到着し、それから、晝夜、殆ど絶間なき戰爭で、愈 七月十三日が、天津城總攻擊と爲りましたが、此の日濱子夫人は、些し頭痛がするので打臥して居ると、俄に、「火事だ〳〵」と、騒ぎ出した、濱子夫人は、籠城の初めより、良人永昌氏に、「若し、領事館が焼ける樣なことがあつたら、和女は、兩陛下の御眞影と、大事な書類を、第一に持ち出しなさい。それから短刀は、始終肌身放さず、携帯してお在で。」と斯う云はれて居ますので、今火事と聞き、此等の物を二階に取りに行かんとしたるに不思議にも、領事館が、烈しく震動出すほどの響がして、忽ち地も裂ける樣な凄まじい音が、がら〳〵〳〵ッと聞へ

た。其の恐ろしさ激しさに堪へかねて、流石に雄雄しき濱子夫人も、思はず、一度階子段の下へ俯伏たが、此樣なことでは不可と、我と我が心を勵まし、氣を取直して起上り、復た、階子段へ足を掛け樣とする時、後ろから、「奥さん殆乎、早く外へお遁なさい。」と留むる者があつたが、其樣なことには一向搆はず、振向きもせずに濱子夫人は二階へ驅登り、先づ兩陛下の御眞影を取外して、それから、其の下の箱に入れある大事な書類、是を手早く取出して懷中なし、御眞影を小脇に抱込み、復び馳せて、階子段の半迄降り來し時、亦もやズドーン、何とも譬へ樣のない音響がして總身震ひ、已に足を踏み逃さんとしたるを、辛くも踏締め踏堪へて、さうして漸やく下へ降りくると、庭の方から、「奥さん、出て御覽なさいまし。早く出で。」と大聲に呼ぶ人があるから、濱子は、御眞影を小脇に抱込んだなり馳出して、「マア、今の音は何でせう。」「彼れを御覽なさいまし、アノ煙りを。」と云はれて其の人の指す方を眺むれば、恐ろしくも、三十丈ばかり煙りが立昇つて居る光景は、宛然黒雲の瀧の、落ち濺ぐかと怪まるゝばかり、四面悉く薄暗くなつてをります。濱子は、始めて安心なし、「ア、、彼處には火藥庫がありますね、其れが破裂した音でしたね。」と云ふ時、鄭領事も來つて、「爾ぢや、火藥庫破裂ぢや……。ム、お前、御眞影を持出したな。好しそれがお前の第一の功だ……。」

意外に長くなりましたが、濱子夫人の勳功は、之で十分演べ盡してありますから、本回にて、完結として置きます。

野の白百合

清水橘村

詩中の稚子その一

たへにうるはしき、シロアム河の岸邊おほひて、
小百合さきにほふ、かよわき足もて平和のみち、
歩む稚子のさま、かくやわりなむ。

これは、夕暮の靜かなる聖壇のほとりにきゝたる、讃美歌の一ふしあり。

稚子や百合、百合や稚兒。

* * * * * *

春の日長閑なるあした、美はしく繁れる樹蔭に行き、多くの小鳥の囀る聲まねする稚兒。稚子はいたく樂しみ、頭を轉じて樹をながめつ、聲ふるはしては、鳥の鳴く音模するさま、まことに愛すべきかぎりなり。

器械細やかなる樂器も、えならびたゞ人の聲も、
この稚子が驚くべき、音調におよぶべしやは。

これ、學びの道に云ふ模倣運動なり。

* * * * *

ダーウィン氏、音樂の快感は、美感の初めなりと云へり。母のやさしき子守歌、こは稚子の音樂なり、朝うぶ聲をあげたる稚子の、早くも百五十日を經れば、面白き唱歌の聲、すみ渡る音樂の調べに耳をかたむく。

* * * * *

兒こそ二人が鎖なる、九十九の髪の白雪の、榮えの華冠得させよや。喜びこはる十字架兒なり。
たゞ賴る父、たゞたよる母。

こは、わが詩の一句なり。

げに稚兒は、夫婦のかたき愛のくさり、きるべくも切れじ、また寶二人守るこそ樂しき極みなれ。

* * * * *

小さき雛人形並べつ、しきりに呼びて物語る稚兒、
人形を抱きてねむる稚兒。
稚子一とせと半にあれば、親しき父母より。生命
なき物に至るまで、深き愛情の露をそゝぐ。され
ど、その愛そたゞ一時なる。

* * * * *

雞は寢覺のとやに、しのゝめを呼ぶ曉、蓮の蕾
のやるゝ初聲をあげし稚兒。
この初聲を聞ける詩人は、かく言へり。
こは、永久の生命の凱歌なり、天樂なりとせしゼ
ムミヒ氏、いなこは、忿怒の聲ありと言ひしカン
ト氏、または、この罪多き世に、生れこし歎きな
りとせし人、あるは、人の苦痛のしらせありと云
へりし人。
これを、學びの道に於いて云ひぬれば、たゞ稚子
の、初めて、呼吸する苦痛を現すものありと。

* * * * *

稚子のまへに並びたる玩具の、いかばかり活き動
くかを見たまへ。
小さき一つの玩具、時には實際の兵卒となりて
まことの戰ひをなし侍らずや。
強き機關車は、長蛇のおもき荷物をひきて奔り、
大なる滊船、軍艦は、深き青海原の浪をけりて、
航行しはべらずや。
無生物も、一たび稚子の手にわたれば、たちまち
精神盛んなるものとなりて、活き動く。
これ、學びの道の、構成的想像と云ふ。

* * * * *

かゝれば、草の虫すらも、足のほとりになきめぐ
り、茂れる森の巣をいでゝ、雛の山鳩空に飛ぶ。
樹立ぬ原に住むと云ふ、獅子もなれくる人の子の、

淸き野らたの聲をきゝ、鷲かけり去る雲の前。これも、わが詩の「野べの兒」と云へるうちの一ふしなり。

＊　＊　＊　＊　＊

わかき父母よ、稚子おほくもちたまへ、稚子は愛の鎖、家の寶、また國の寶なり。

兄弟よ、稚子をいつくしめ、稚子は神なり、佛なり。

苦をわするゝもの稚子にしかず、望みを與ふるもの稚子にしかず、慰めをうるもの稚子にしかず。

人生に、最も多く苦を與ふるものは稚子なり。望みを失ふもまた稚子なり。

あゝ稚子をいつくしめよ。



文林

新年梅　東久世通禧

あら玉のとしたまとして持たせこし
鉢木のうめのはなさきにけり

月前雪　竹屋光昭

明渡るいろかとみれはそれならて
つもりし雪にさゆるつきかけ

行路寒月　長岡護美

さえ渡る月のひかりもおもしろし
千鳥なく夜の川そひのみち

田氷　長谷信成

くちのこるかゝしの笠に霜みえて
田つらさむけに氷るけさかな

太安麻呂　宮地巖夫

そのかみに君なかりせはふる事の
傳へもたえてのこらさりけむ

竹雪有聲　北郷久政

むらたけの末葉の風やさそふらむ
落くるゆきのおとのさやけさ

淵水鳥　植松有經

川なみのさわかぬ淵にところ得て
うらやすけにも浮ふをしかな

月前千鳥　千葉胤明

久かたの天城のやまに月ふけて
ちとり鳴なりこゆるきのいそ

冬川　遠山英一

きしにたつ葦のかれ葉に霜さえて
瀬音身にしむわさはらけかな

鴻　加藤義明

玉もかる小舟になれてたから田の
ちよたのほりに浮ふ鳰とり

新年梅　井上頼文

梅か枝の蕾は去年のまゝなから
ほゝゑほまれても向はるゝ哉

月夜に琴をきゝて　本居直臣

つま音も月にいよいよすみわたる
琴や雲井のしらへあるらむ

冬野　鍋島榮子

狐なくなすのゝはらはふゆかれて
ゆくひとかけも絶しころかな

冬鳥　前田朗子

たわむまて降つもりたる呉たけの
雪をちらしてとふすゝめかな

水雷艇　柳原愛子

仇波もくたけやすらむわたつみの

そこよりひゝくいかつちの音

頼山陽　小池道子

空をみしをさなこゝろに萠しけむ
あまつ日嗣をあふくこゝろは

白馬節會　大谷章子

大前のはるのひかりにあたるらむ
うまをうらやむ人もこそあれ

谷春氷　大谷籌子

春さむみ又みなかみやこほるらむ
たにのなかれぞ音たえにける

漁夫　岩崎寧子

いさりせし魚はみやこに送りつゝ
わかめかりはむ蜑かあはれさ

加茂眞淵　小川直子

しこ草のしけりて絶しゝきしまの
道のふるみちきみそわけゝる

自轉車　服部磯子

大路ゆくひとりくるまは水とりの
あしにひまなくみえわたるかな

女學校　河村重子

茂りゆくまなひの園のひめ小まつ
かねてぞ見ゆる千代のみさをも

雪遊びといふ題をえてよめる歌ひとつ

下田春興

ゆたかなる年のしるしと　天つちの神のめくます
しらゆきに雪あそひすと　うなゐ子のいむれ集て
にしひかしみ方をわかち　敵み方入りみたれつゝ
其の雪なとりてはなけ　その雪をなけてはとり
ゆら〳〵にゆらける聲は　久かたの天にとよもひ
あら金のくぬちをゆする　をさまれる御代の惠と
しかすかにしらえぬるかも

おと女らも庭にをり立ち
この雪に雪あそひすと
かにかくにまろはす雪に
いつしかも小山となれり
其の山をあてゝはさすり
其の山をさすりてはなて
やさしけく目はなをつけ
たるまちふ物を造りて
打きはひいそはひをるよ
長閑なる御代のめくみと
しかすかに知らえぬるかも
こゝもへは國そめてあき
そへもへは御代そめぬしき
たきゝこる賤のうなゐも
みるめかるあまの少女も
治まれる御代をうれしみ
のとかなる御代を樂み
しかてのこはるもしらに
しか足の凍るもしらに
ゆたかある年のしるしと
天地のかみのめくます
しら雪にゆきあそひすも
こゝろたらひに

冬の夜明しがたしといふことを
よめる歌

渡邊龍子

たまさゝの小笹さやきて
あられふる冬の夜ころは
あつふすまいとり重ねて
しき妙のまくらまけとも
いを安くねられむものか
いねかてに我をるときに
やゝ〱にふけてし行けは
小川のなみの音もせす
かけひの水の音もせす
そこ思へはふけらしも
こゝ思へはまして寒しも
ぬは玉の夢もむすはす
またゝきて暁まてと
雞もなかぬか



二月五日兼題

山霞

天

日向國宮崎町小々森三百十番地イ號　林くに子

はなとりのいろねをこめて春やまは
かすみのとはりかけわたしけり

評、調うるはしく、趣向もたくみによみつらねられたり。

地

大隅國肝屬郡鹿屋村中名　山田よね子

薄くこくかすみかゝりてさやかなる
かゝみのやまもあのみなりけり

評、趣向おもしろし。

人

松山市西堀端町八番地　上原のぶ子

つくはやまめをとならへるふた峯を
ひとつにこめてたつかすみかあ

評、句每に力あり。

甲之部

東京　牛山素子

海士がたくゆふけのけふり立そひて
いそやまもとにかすみたあひく

三河　三宅中枝子

引さえのきしのあしかひもえいてゝ
やまはみとりにかすみわたれり

三河　永井さい子

眞柴たくけふりやそはるかまとやま
かすみのいろのふかくみゆるは

乙之部

名木山勝子

あつさゆみ春さりくれはほのくと
いるさのやまにかすみたなひく

松澤まつ子

あさま山たてるけふりも見ゐぬまて
いとものとかにかすみこめたり

光野たに子

霞はれてそらものとかになつくはの
は山しげ山かすみたなひく

うら〳〵とかすみにけりなさし昇る
あさひもにほふたかまとのやま　後藤のふ子

あらし山あらしのかせはおとたね
かすむやはるのはなのしたそめ　服部萬子

立つゝくみれもふもともさほひめの
おほふかすみのそてのまひろさ　河合ぬひ子

なみたてるをのへの松もわかぬまて
やまゝたやまにかすみたなひく　泥堂菊代子

淺みとりかすみのころもたちこめて
みねすなりゆくみれのまつはら　椎野秀子

かゝみ山くもりなからものとけきは
はるのかすみのたつ日なりけり　泉いし子

さほひめのかすみのころも重ねきて
みとりいろそふはるのとほやま　鏡山増代子

よしの山たかねをこめてのとかにも
たちわたりぬるあさかすみかな　武田龜子

よしの山はなにさきたつこのころの
はるのにほひはかすみなりけり　衣笠澄子

雪はなほふゆのまゝなるやまのはに
たなひきわたるうすかすみかな　三輪はる子

けさ見れはかすみかゝれりつくは山
みれよりはるはたちにけらしも　大木光子

きたやまにたてるかすみのきぬ笠は
はるのきせたるなにこそありけれ　村井澄江子

きねのころたかれのみ雪それながら
かすむやはるのしるしなるらむ　阪本榮子

きのふまてあらはに見ねしかゝみ山　田代綾子

うれひ山みゝなしやまのあらそひも
けさはかすみにかけくもりつゝ　北島功子

のとけさに山のしたみちとひくれは
とけてのとかにたつかすみかな　伊勢村花子

そまひとのおのゝ音さへのとかなり
かすみのおくにうくひすのなく　岡田美登子

雪のころまつとかすみのいろとりに
かすみこめたるはるのやまさと　槇田音羽子

ゆきのころちゝふ甲斐かれあさま山
にしきおり出すしつはたのやま　槇田秋子

立なひく今朝のかすみははやまつみ
はるはひとつにたつかすみかな　吉弘新子

おくやまつみのみけしなるらん

丙之部

むらさきの雲のかゝれるこゝちして
むら〳〵かすむみれのまつはら　瀨木せき子

若菜つむとき來にけりとうすかすみ
たちこそわたれちゝふかひかれ　田村米子

ちゝふ山かすみわたりてむさしのゝ
はてなき御代もはるめきにけり　田村道子

そま人のゆきゝのかけも見ねぬまて
今朝はかすみぬみわたしのやま　高石登代子

ひさ方のそらにもはるのいろ見ねて
富士のたかれにかすみたなひく　内田さた子

ゆかしさに山またやまとめくりきて
かすみのおくにうめかゝそする　横山芳子

さわらひはいまかもゆらむ山みれは　服部正子

あさなく〱見なれし山もわかぬまで
かすみのころもた〻ぬ日もなし　竹尾みね子

花にほふときは來にけりのどかにも
けさはかすみそたちわたりぬる　早川たれ子

あつさ弓はるのしるしとたなびくは
かすむみやこのにしひがしやま　東澤とし子

佐保ひめの花のかされのひとへとや
とほやまのはのかすみなりけり　日高かす子

いつの間に春は來にけんあさつく日
よしの〻やまにかすみたつらん　仁保しま子

峯もなもみとりふかめてたちこむる
むかひのやまにかすみたなびく　椎野ぬき子

たつねいろ山もかすみていにしへの
かすみそはるのころもなりける　珖井巽久子

春かすみたなびくみれのあなたより
よし野のみや〻いつこなるらん　珖井千代子

やま〱に春はかすみのたちそひて
さくらのはなそちりか〻りける　珖井滿武子

ひんがしの山のみれ〱たなびける
木々のこすゑもいろふかく見ゆ　坪内りき子

たちこむるかすみの奥となりにけり
かすみそはるのしるしなりける　泉久貝子

うちむかふ遠のやまの端のどかにも
ゆきになかめしをちこちのやま　網原雪子

いつしかと花まつみれにはるかすみ
かすみたなびくしの〻めのそら　瀬戸ゑい子
のどかにたてりふしの〻やま

遠やまのありやなしやもわかぬまで
かすみのどかにたなひきにけり　田島正子

あつさゆみ春のかすみやたちぬらむ
とほやま〻ゆのあさみとりなる　山本梓子

ふ〻とには菜の花つ〻くはた見ねて
やまのあなたにかすみたなびく　若原ふぢ子

いささらはうつしても見むか〻み山
かすみそめにしはるのおもかげ　山田嬌英子

けさみれはかすみにけりな比叡の山
みれのしらゆきなほきぬすして　林[illegible]子

さほ姫のかすみのそてにつ〻めとも
はなの香もる〻はるのやまかせ　佐藤房子

佐保姫のはなのうはきかみよしの〻
やまもかすみのころもかへして　青木たま子

打わたすやま邊のかすみたちこめて
いつれを富士のたかれとは見ん　長尾小ゑい子

ぬの引のかなたにみねしまやのやま
けさはかすみてわかすなりけり　高森かじ子

のどかにも見ねわたるかな春かすみ
たなひくやまのはなのひとむら　丸谷いょ子

春かすみたてるやまへはとほけれど
ふきくるかぜにはなの香そする　和歌きみ子

よしの山ひとむらかすむはなの枝に
こゑおもしろくうくひすのなく　春野しば子

ふくかせはまた寒けれとはるなれや
ほの〱かすむをちのやまのは　松村あさ子

とほ山にたなひきわたるあさかすみ　新このこ子

ひとむらにほふはるのゝとけさ

比ゐの山みねにのこれるゆきのみは
ほのかにみゐてかすむはるかな
稲恒政子

高さこのたかねのゆきはきゐなくに
かすむやはるのしるしなるらん
山田いれ子

ひとむらの雲そいろめくはるかすみ
たなひくやまのはなやさくらん
池田松枝子

あさゆふに目なれしやまも春されは
かすみてとほく見ゐわたるかな
岡田春子

ゆきはまたふゆのまゝなるとほ山も
かすみたなひきはるめきにけり
近澤和子

小簾あけて雲になかめしやまの端も
今日はかすみのおくになりぬる
河原芳子

のとかなる春のひかりにゝほふなり
めなれしやまもかすみそめつゝ
福原菫子

ふしのねの雲は見ゐ乍らしかすかに
ふもとのやまはかすみこめたる
河田いし子

かゝみ山けさはくもりてゆく人の
かけさへ見ゐぬはるかすみかな
竹村竹里子

田子の浦ゆうちいてみれは富士の山
かすみのころもひきかされたり
佐々有隣子

山ひめか織るしつはたのしろたへに
みゆるやたてるかすみなるらん
佐々小夢子

みなれつる山もかすみのたちこめて
尾さへみねさへわかすなりけり
徳永廣子

きのふまて雲のすかたのやまのはも
かすみのころもひとへきにけり
徳永萬壽子

見わたせは四方の山へもかすみたち
のとけきはるのいろそゆかしき
徳永純子

見渡せはなひきそめたりはるかすみ
八重のやま路をひと重にはして
田代艶子

うすきぬを四方の山へにひきはへて
はるはかすみのころもきにけり
田代喜和子

よろつ代もうこかぬ富士の高ねたに
かすむあしたはとほさかりゆく
北島操子

みねもをもかすみわたりて山はみな
はるのすかたとなりにけるかな
田村多豆子

みねもをも見ゐわかぬまて山をみな
わかものにして立つかすみかな
村上操子

五百重山いつのまにかはゆきゝゐて
はるのすかたのかすみたなひく
服部倫子

谷かけはまたらにゆきの見ゐなから
みねはけさよりかすみたなひく
佐藤そう子

つくはねの雲もいつしかきゐはてゝ
けさはかすみとたちかはりけり
阿部業留子

はるかすみたなひきそめてつま松の
みとりもふかくなりまさりけり
三好雪子

さほ姫のかすみのころも春をうすみ
はなのかもるゝみよしのゝやま
桝田金子

みはたせは初瀬のやまのまつか枝も
かすみこめたるあさほらけかな
大阪谷信子

きのふまて雲にうもれしみわやまも
けさはかすみのころもまとへり
伊野村春子

朝日かけのとかにうつるかゝみやま
野口静子

かすみそはるのみゐるめなりける
かすみかゝらぬやまのはもなし　坂本豊子
きのふまでゆきも見ねしな春たては

二月五日兼題

紅梅を乞ふ文

天　伊豫松山市一番町　宇高松子

久しく御めもじもたまはらぬに、はしたなくおどろかしまつる罪のふかさよ。さても、先つ年、御わたりそゝろあるきのをり、なつかしき香に誘はれて、御垣の内の梅のゑまひをかひまみそめてより、えならぬ色香忘れかたう、春毎にとひなれ侍りしが、今年も、いかで鶯より先きにと樂しみ待ち渡りけるに、先つ頃より、母なる人の病の床に打臥し侍りければ、そもはたさでなむ。さるを、昨日今日、遠近の花の便りを聞くにつけ、病人の殊にゆかしがりて、夫のみ申しつゝけ侍るをあはれと思召給ひて、一枝をゆるしたまはらば、母のよろこびはいかばかりかと、鶯の恨も打忘れて、かくはねぎまつるにあむ。あおかしこ。

評、趣向おもしろく、うるはしうかゝれたり。その孝心なるには、友の君とて、いかでいなみまつらむ。

地　東京本郷區弓町二ノ七古山方　堀内ふさ子

花とめでにし白雪の、たえて音づれぬに、ふきくる風も、いつしか梅が香を送り、冬の名殘の山邊のみ雪も、鶯の聲々にとけゆく此の頃、御やかたの御園生は、さだめしうるはしうをはすらむ。いとゞ廣らかにて、名ある所々の梅をうつさせ給ひ、いづこをよしとわかち兼ぬれど、まして一きはうるはしきは、御池の邊の八重一重、紅白のうすこく取りまぜ給ひし梅花の風情と存せられ候。其の許樣には、さぞや源平の昔を忍ばせ給ひ、朝は花と心の美を競ひつゝ、香を吹く春風に送らせ、夕はかすめる月を賞して、思をのべさせ給ひ、花におとらず、榮えゆかせらるゝ御事、實によろこばしく、はた、うらやましうなむ。聞えあぐるまでもあきいぶせやは、一きは、こぞに變り淋しう存せられ候。姉の去年の秋、桐の一葉と散り行きしかば、せめては、その好みし梅花をかたみと思ひ侍りしに、今春は白のみ笑みて、紅はいまだ色づきもせず、いと口惜しうこそ。ことに明日は、姉の命日に相當いたし候へば、せめては靈前に一枝な

りともたむけばやと存じ、かなたこなたを尋ね候へ共、類すくなき花にしあれば、これぞと思ふものなく、おぼつかなく存じ侍りしに、はからずも、御やかたを、思ひおこし、御伺ひの上御願致さむと存じ候へ共、心地すぐれねば、いとなめげながら、文もて御願いたし候へば何卒、紅梅一枝御めぐみたまはりたく、なほ〳〵、日頃御たしなみの御歌そへさせ給はゞ、おのがうれしさのみならず、なき姉の悦びも一しほならんかと存ぜられ候。まづは、右御願まであら〳〵。かしこ。

評、筆つきやゝおくれたれど、眞率のあと見えて、まづは、書簡文の要を得たりといふべし。

人

東京四谷大番町八十三番地　山本梓子

香やはかくるゝといへりけむ、げにこのごろしるきかせのたよりに、うけたまはりわたるを。あすは、いさゝかのあるじまうけに、花がめの枝の、しらしらとしらげたるのみ、いとさう〴〵しきに、いかではへあるいろのうちそひたらむには、いとをかしからましと思ひけるまゝ、ふかき色香をしる人の數ならで、こひたてまつらむは、なめげなるに、宿はとゝはむ鶯の音も、はた、心ぐるしきかぎりにて侍れど、御やかたの傍なる紅梅、朝夕の御ながめにさはらざらん片枝、この女のわらはにつかはしたまひてむや。あなかしこ。

評、首尾よくとゝのひて、すこしのゆるみなし。

（以下原稿到着順）

野村幽子

拙き走りがきもかしこけれど、一言聞えあげ侍り。さいつ頃、君許まうで侍りしほど、いづくよりともなき薫りに、はし近う出て見れば、こは御祖母様の、まだふり分け髪におはせし頃、御手づから植ゑられ給ひしとかやかねて承りつる紅梅にてなん。其のゆかしさ、夕月夜の光りながらいみじう思ひそみ侍りて、宅に歸りしより、朝な夕な、わがなき母上の御靈に花供ふる程は、かばかりのもの手向けばやと思ひ出でられぬ。往にし昔のひじりたちは、めぐみを草木にも及ぼされしとか聞きつれば、あまたゝび忍び侍り。且は、君の一花を散らすさへ、いとほいなくおぼしめされむものをと、おしはかられつゝ、かれこれ思ひ亂れ候へども、切なる心の得たへず、さては、かくものして乞ひ奉るになん。なめげの罪さりどころなきを、ひろき御心に容れさせ給ひて、一枝御ゆるし賜はりなば、こよなう嬉しき極みにこそ。あなかしこ。

河原芳子

春立つといへど、冴え返る空の寒けさ、垣根の畔にはまだ雪さへ殘りて、鶯の音ものどかにはきこえず。氣も沈り行くらん程に、いとわびしう引こもりゐ侍るになむ。さて、かねての御心もこもりたらんかと思はるゝ前栽の白椿、人待ち顔に匂ひ初めはべるも、さしたる色香ならぬを、知る人ならねばとて、おくり參らすにつけても、み庭の紅梅のきわよく咲き盛れるがなつかしうて、うきふし見えぬ竹の編戸を、おどろかしまつらんの思ひ設けも、例の

たづさはりにまゝならぬ口惜しさ。せめて、其の一枝を花瓶にして、深く薫りを袖にしたらんには、いかばかりのほいともなりなんやとて、無ならぬ身の、かごとがましうもきこえ上ぐるにこそ。
あなかしこや。

河野眞子

春たちぬれど、空のけしきは、また冬にかへりたるにや。雪げの風の身にしみわたりて、寒さほと〳〵、堪へがたくはべれば、なほ冬ごもりして、ひれもす火桶にのみむつびをり侍りしに、先程次の許より、小包一個おくりこし候まゝ、何ならんとあわたゞしう開きつるに、浦島が子の筥に似たる口惜しさのはべる中にも、この短冊はしも、かねて知らせ給ふごとく、君子様の御老母様の、八十の御齢ないよ〳〵明日うたげ遊ばさるよし、いさゝか其の賀にものしたくての事、妾も、何かよき思ひつきもがなとぞんじはべりしに、折りも折とて、ほころびかけたる御庭の紅梅、君がやさしきおすさびにそへて、一本御恵みたまはりたく候。殊に御老母様には、なべての花の中にも、わきて梅の花をのみこのませ給へば、うぐひすの初音にもまさりて、いかに〳〵よろこばせ給ふらんと、斯く申す妾までも、ともに〳〵、うれしうこそ思ひ侍れ。あはれ妾が心もくみとり給ひて、よき音づれたまはりたく、ねぎまつるになむ。かしこ。

鈴木はる子

昨日は、ゆくりなくも紅梅の御催しにとて、御招きにまかせ、拙なき身をもかへりみず、貴ときあたりをけがしつる事の、今更ながらいとはづかしうてなん。扨、御庭前の紅梅、ことにうるはしく、べにならばと詠じ給ひけん古事の思ひ出だされ、名にしおふ大森杉田も。かく香りゆかしきものかはと、日頃よりの御たしなみも、亦一入めでたく、今も打つどひての御うはさに侍る。其の折もれ給ひたる友垣の、是非に見参らせ度、一枝御めぐませ給ひなば、文机の師となして学び度とこはれ、御秘蔵の品、あまりなこざましきわざにはべれ共、あつき心のもだしがたなく、乞ひまつるさいはひに、御ゆるし給はりなば、わらはまで、こよなうよろこばしきかぎりにこそ。あなかしこ。

林田登子

はなやかなりしひと日の御宴げの、いみじうめでたさに、あかね匂ひの猶薫り侍りて、ひとりねもたゞならずおもほえてなむ。さるは、某の卿の古人をや偲び給ふらむ。たれの君のふるごとをやめで給ふにやと、いとゆかしう覚え給へられぬ。いづこより御根こじ給ひけむ。色に香に世にすぐれたるは、まして雪とぞ見捷さるゝ中にしも、くれなゐ深きこぞめの御匂ひは、ひときは、目さむるばかり、あはれふかくも見給へ侍りしかば、中々になつかしき璧も、はねあるまじう、八重咲く花のあかき色香に心ふかくも染めしより、戀しさの形見とこそなり侍りにけれ。青蓮のしら梅とは願ひ侍られど、こは、唯木づたひて、涙の色と散らしゝる枝にてもねさせ給はましかば、ほうらいの山の、まがゞやくこがねの花にもいやまさりて、いと〳〵もて興じ侍らまし。なめしの罪はゆるさせ給ふとも、進服のせきはゆるさせ給ふまじうは思ひ給ふれど、日ごろうらなき御むつびにさしゆるされて、かく、乞ひきこえ侍りぬ。いなみ給ふとも嵐ふかば、匆卒の闇は、うしろめたうや侍らまし　あなかしこ。

秋山郁子

先つ日はかるたのまど居にとて、ねむごろなる御招きにあづかり、いと〳〵嬉しうなむ。ゆくての道も、いそ〳〵に参り侍り。或は小倉によれんなく、或は、月の総に敷島の道をたどるなど、いとゞおかしうて、小夜更くるをも打忘れ。遊び興じ、今更に御

詫の言の葉も侍らずかし。親しきまゝと御免し給ひてよ。さては朝は、何かいけ初めなと思ふ折しも、ふと窓吹き入る風の、なんとなく香しきからに、あなうれしやとはし近う打出で見れば、賤が園生の白梅ほころびたるになん。これにて思ひ出で侍りしは、御館の紅梅に侍り。先つ日見うけまつりしに、ほゝゑめる紅のわすれがたうて、今日の活け初めに、せめては、源平とりまじへばやとの念止みがたきまゝ、いと〳〵なめけなる業なれど、一枝御めぐみ給はりたく、願上まつるになむ。うけがひ給はらば、こよなき姿が榮譽にこそ。へだてなきまゝ、一片の走りがき、一重に御ゆるし下され度候。あなかしこ。

櫻山芳子

遠山の峯に殘れる雪は、また年越の曉の眺めのまゝの姿にて、兎角、火桶の傍のはなれ難き、冬籠り勝ちに候を、御とり〴〵樣にこ、如何御暮し給ふにや。其後は、絕ねて御不沙汰いたし、御なつかしさのあまりに侍り候。就いては、明日の休日を幸ひ、同窓の親しき方々三人四人、久し振りに詠歌の筵を、催し、度候へば、貴孃樣にも、萬障御繰合せ、是非御來駕を賜はり度御案内申上候。されば、例にまかせ、不遠慮なる御願ながら、年毎御めづらしき、御庭園のくれなゐの梅、今年もはや、雪を冐して薰りそめ候由承り、御床しさのあまり、あすの設けの床飾りに、苦しみ居候折柄一枝丈け御割愛賜ばらば、いかに興深く、特には、本年の御題にもちなみ、眺めながら一首づゝ御所望致度と、樂しみ侍り居候次第、まこと、御父君の御寵木、甚申上兼候へ共、よしなに御取計の上、此の願叶はせ賜はらば、こよなううれしく存候。先は御案内旁々御願までかしこ。

名木山勝子

谷の戸出づる鶯も、君がみそのゝに遊ぶらむと、羨しく候。祖父事は、兼てより梅をめで侍りしも、心に適ひしものたねてなく、いつも〳〵、ましば垣根には、水仙をにほはせ申し候。よべの物語りにも、梅の事のみにて、あすは花子(先方の名)の君が紅梅を一枝賜ひて、床にいけよなど申されて候。されば、誠に〳〵申上げかね候へども、偏に、此のよしきこしめされん事を願ひ上げまつり候。げに梅といへば、こぞも、けふ此の頃の事にや侍りけん、某地に梅見を君と物せしは。かの折、君がいとゞわが袂をひかせ給ひしかの家よ。おうなが靜けく機織り候ひし賤が軒の、梅も半綻び侍りたるが、破れし垣根の間より見ね候て、柴折戸などいたうかたぶきたるも、なかしう見ね候ひしこと、今にも忘れかね申候、足元もゆら〳〵しげに歩むうなゐ子にまねびて、ほろ〳〵打こぼれ居り侍りし椿の花拾ひて、文のしほりなどに致し候事も御座候ひき。君には、いかにせさせ給ひけむ。私は、今迄も楷のあはひに入れおきあり候。また、其うち御ひまも御座候はゞ、梅見の御供致し度、思召いかゞにおはしまし候か。先は、右御願ひまで、日頃の御心やすさにまかせて、かくなん。勝手がましうは候へども。あなかしこ。

森田松子

年はあらたまり候へども、いまだ冬の時候なるにや。日にそへ、寒さいと堪へがたくおぼね候なりから、御もと樣には、御庭さきの紅梅、いとうるはしくさき出で候よし、はばかりながら、一枝たまはり度、御願申上候。かしこ。

福原菫子

きのふ、御妹君にうけたまはり侍れば、御前栽の紅梅、今年は早やくより咲ねならぬ匂ひ御みち渡りたまふよし。おのが母は、かねてゆるしの花をめで侍るからに、いと懸望しきりにて、やむびやうも侍らざれば、あつかましきいたりながら、御一枝たまはり

たく、なめげなるをも顧みず、使者もてまゐらするになむ。でしこ。

林くに子

昨日は、珍らしう風もなく、いとうらゝかなる日和なれば、内にのみ、引籠り、あだに過さんも口惜しう、幸なき母の命日なれば、某の寺へ行き、回向なりともなし置はゞやと。老人事、子供引連れ出かけ申候。其の歸り路たちより候へば、御庭なる早咲の紅梅、いとよきほどに綻びそめ居候とか。まして、お類ゝ稀なる紅の御梅、文机近うさしおかば、如何に珍らしきながめならむ。梢高くは見ね候はねど。ゆかしきかをりきゝつけて、友の尋ねこんもはかられずなど、しきりに申出で候まゝ、かれて、御愛樹とうけたまはり、甚恐入りたる御願ひには候へども、一枝御惠み給はらば、こよなうかたじけなく、老人のよろこびも如何ならんと、思ひやられ申候。先は御願まで。かしこ。

三好珍子

先つ日、かるた會にとてまかりこし候折は、何かと御手厚き御とりなしに預りっ、いとも嬉しく御禮申上げ候。其の夜は、ふし戸に入り候ても、ねる心ちはせず、夢とのみみゆるも、獨おかしく存じ居候。かれて、御庭の日あたりよき方の紅梅の、一つ二つ開きそめて、春まちどほ顔に匂ふさまの、ねならぬに心ひかれ、一枝給らまほしと覺ぬ侍りしかど、やがて願ひまつらんもなめげなるわざと、心をのこしつゝ、わかれまつりしが。今日しも、弟の友よりめぐまれしとて、少さき枝をもち來り、そをみるにつけ、いとゞゆかしさやるせなく、いかにもして一枝給はり、窓の友ともなしたらんには、いさゝか身のいさめともなり、はた、かの赤き心ともあやかりつらんを、いかで、我心の程もくませ給ひてよ。もし御きゝすみもあらば、此の使の者に下し給り度、願ひ

上げまつるになん。別包、珍らしきものには侍られど、只今、國元より送りこし候まゝ、すこしばかり御目にかけ候。かしこ。

松澤まつ子

今日は、妾が裁縫の師の君を御招き申上げんと、心も嬉しく、朝まだきよりそこらあたり清めなど致し候まゝに、如何にせん、春に後れし宿の悲しさに、香なくとも、又無き花とたのみ居候ひし、庭の木毎にかゝる白雪は、きら〳〵、とさす朝日に、おそくもとけかゝり、眞ひる頃ともならんには、全く、あとも無くならんばかりの氣合なるに、此の上は、など教師の君をなぐさめ申さんと。母も妾も心も心ならず、庭の方のみながめやられ申候。斯る折柄は、誰が心もさありなんや、やがてにほひ出でなばなど、のへし御言葉を、いつしかと待ちわたり候ひしに、いよいよ、今日明日ともなりぬれば、此の期はすさず、日にもさぶらひて、拜し申さばやと、斯くてある間もなつかしくおぼゆる御園の、紅梅をあたら惜しくも、『一枝手折りて御惠み頂かまほしう、去年の春拜見せし、彼の紅なる唇に笑をふくみ、清きかほりをはなちし様のしのばれて、今は中々に思ひ留られず、あつかましくも、文もて御ねがひ申上げ候。あはれ、御聞き届け下され、此の幼き弟に給はらば春に後れし宿も、にはかに春めき色も香をも知り給ふ師の君はいかばかりか喜びかつは、高き操をほめたゝへ給ふならんと、そゞろ嬉しく、ひたすら香を伴ふて歸る弟の、足音のみ待ちこがれ居り申候。次に此の若菜は、師の君をもてなす料にとて、今朝弟共が近きわたりの小川の氷のひまより、もえ出でたるを摘みため、籠にみちたるを、いさゝか分ち奉り候。かしこ。

星野とき子

門松にさす朝日のひかり、風にひらめく國旗のさま、はた、鶯うたはごの音など、見るもの聞くものにつけ、さながら春のこゝち

して、百千鳥とびたつばかり心うかるゝ折柄、はや〳〵との御年始文、うぐひすの初音まちゐしこゝちして、とる手おそしと拜見仕候。げにのどかなることしの初め、常だにも、賑々しくゆたかなる御住居の有樣なるを、いかにたのしう、御年を重ねさせたまひけんと、めでたく祝ひ上げ候。扨て明日は、父の同役の方々の宴會催さるゝことに候を、新年の事なれば、賤がふせ家も、いささか飾り候はゞやと存じ、生そめをかれて、竹を求め候へども、枝ぶり何となういとさびしく、客間の床にもすゑ兼ね、口惜しく存じ居り候折柄、ふと思ひうかひたるは、去年の一月、御宅にて、御催し遊ばされし觀梅の御招にあづかり侍りし時、御庭の紅梅の木の下にて、和歌よみかはせしたのしさ、明日の飾りには、紅梅もがなと存じ候へども、日頃御愛翫遊ばさるゝ梅故、しばしためらひ候へとも、猶やみがたく、なめげに候へとも、まげて一枝分けさやられ候事、御許し下され候はゞこよなき譽に存じ上まいらせ候。かしこ。

宇高のぶ子

花のあした、月の夕べなど、たのしう。詠め居るすら、久しうおとづれざりし、人のもとより、文おこせられたるは、いと、うれしきを、まして此の頃は、何となうたれこめて、亡き友の事ども思ひいでられ、此の世のはかなさをかこてる折柄、思ひがけぬ御玉章給はり、心も空に拜し候へば、ふり分け髮の昔しより、共に愛でゝし御園の紅梅の、今は紅き蕾のほころびて、春まちがほに咲き初めしとて、ひまあらばとまねかせ給ひし、あがき御まごゝろの程に、花の色もおしはかられて、うれしうこそ。明日のやすみを幸にと、君のまねかせ給ひし御言の葉に、さればとて、かの君、妾等三人づれだちて、御園に參り、其の上、くさくさの御もてなしに、歸らん程も打わすれ、たそがれに、漸く家に歸り侍りぬ。そがたのしさ、はた、何にかはたとへ侍らむ。ひたすら、君がふかき御心のほどを謝しまつるになん。其につけても、思ひ出されしは、君も知り給へる秋子の君よ。今は上野の片ほとり、根岸の里にやすくねむり給ひて、亡き人の數に入りしが、こぞの春御園の紅梅を、一しほゆかしがり侍りしに、其の後、永きいたづきに渡らせ給へるころ、君がゝの梅贈られしを、其のうれしさ忘れも侍らず。と語られしは、なほ、耳にある心地せられ侍りぬ。今はおのれのみ觀梅の榮を得侍りしも、何となう心おちゐず。今日は、かの君の御墓に詣で、せめて一枝なりとも手向けばやと思ひ立ち侍れば、何卒思ゆるし給はりて、此の者に御遣し下され度、さ候へば、亡き友も、君がなさけのあつきに、地下にて喜びたまうらん。と存じ侍り、君にも、共にまうでんと、御進め致し度は山々なれど、此の程中より、御いそがしくて、御外出の事は御心にまかせられぬよし。承り侍れば、わざと御進めも申上げず候。まづは、梅かほる御文机の下に、かくはねがひまつるにこそ。

北島功子

なつかしのみふでのにほひ、いとも嬉しう拜しまつりぬ。實にや、昨日けふの雪の空、君にもいとゞわびさせ給ふよし。さこそと推しばかりまつるになむ。さても、うらゝかなるひと日なりけり。ほのかなる風のかをりの心地よく何處、誰が家の軒端よりぞと、そゞろゆかしう覺ははべりしに、けふしもうけたまはりはべりて、さては、御園よりぞとうなづかれつ。彼の御垣のもとの紅梅のいく本、去年よりあけくれ、厚き御丹精の甲斐空しからで、降り積る此の白雪にも、つゆたゆます、今を盛に咲きみちぬるとよ、いかばかり、色香も殊に愛で眺めさせ給ふらむ。さらでも、日ごろ富ませたまひし御詩囊の、まして御詠歌もさはなるべくと、御

羨しう存じ候。けふといへば、ちまたやちまた雪に埋れて、花賣ろ翁も跡を絶ち、そゞろに寂しうも覺ゆる折から、さらばよ厚き御言葉に甘へ、たゞ一枝をと乞ひまゐらするをいかにうべなひたまわらんには、いともうれしきことになむ。あなかしこ。

たゞひとりめてんは袖に餘るへし
一枝はゆるせ紅梅の花

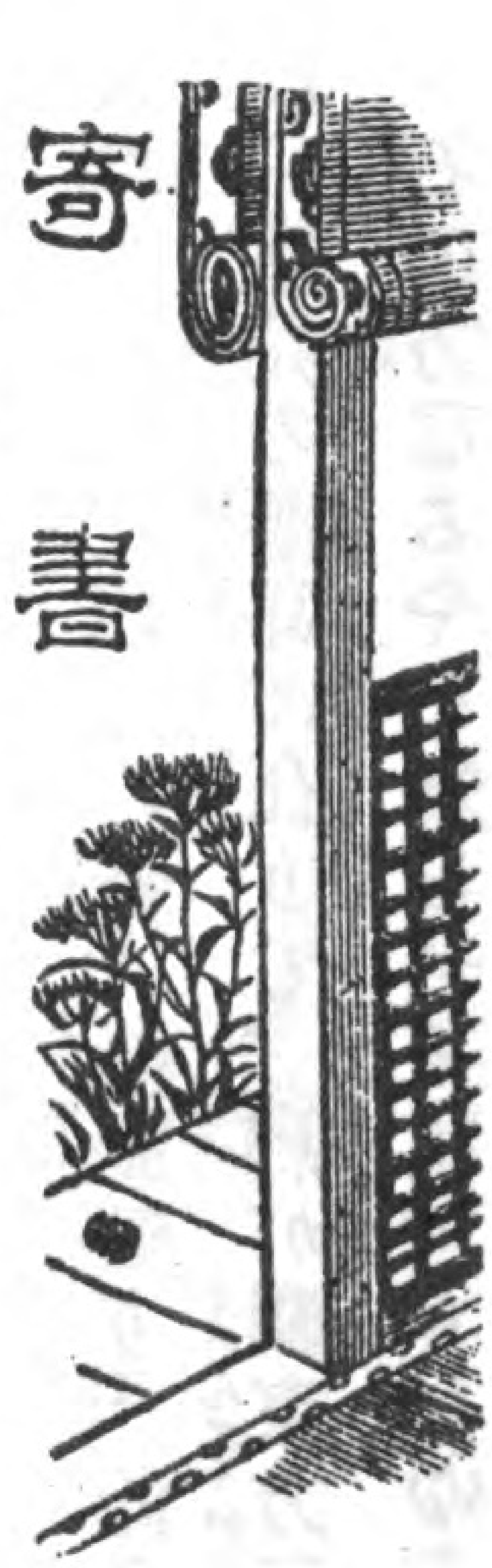
佐々有鄰子

春も今日は立かへりぬれば、御庭の紅梅の旭にゝほへるいろ、いとうるはしく見られ侍らむ。本年は、菅原大神の一千年の大祭も、此の二月よりとか承り候へば、師の君様にも、かれて御信仰あそばされ候御事なれば、梅花を御神前に御供へあそばしつらむ。願かれ候へど、妾にも、御殘枝の紅梅を賜はらば、父が拜みまつろ、菅原神社に奉りて、文學の道の幸を乞祈まつらまほしくなむ侍ろ。あなかしこ。

金光鶴兄子

春とはいへど名のみにて、寒さはいとゞ堪がたく候。承り候へば、御隱居様の御心をつくして、そだてあそばせし御庭の紅梅の、霜雪をしのぎ、見ごとに咲そめ候よし。妾事、生花にいたしたく御座候へば、恐れなから、二枝ばかり御惠與願上げ候、貴孃様よりよろしく御とりはかり賴みまゐらせ候。かしこ。





大槻博士に質す

無腸窟主人

女鑑第貳百四十五號に掲載されたる大槻博士の、伊達政宗卿の夫人、田村氏の話と題せし一篇を讀みて、例ながら、博士が闡幽顯微の事に熱心なると、其の文章ゝ平易にして、而も力量ある、能く白石先生の神髓を得て、別に、一機軸を出せるに敬服せり。但し、田村氏が政宗卿に彼の決死の御文を進ぜられし年代に就いては、少しく不審に思ふ節あれば、博士に質して、疑團を解かんとはするなり。

懷劍一口身を離さゞれば、暴亂に遇ふことあるも、

羞辱を他人の手に受くるには至るまじ、との御文を、政宗卿の御元へ寄せられしを、天正十八年の事とせられたるは、治家記錄、藩祖實錄等に據られたるものあるべし。然るに十八年は、小田原にて、政宗卿始めて、豐太閤に面謁し玉へる年にして、此の冬、葛西、大崎に一揆の亂あり。政宗卿は、秀吉の目代蒲生氏郷と共に之を鎭定し、上洛されしは、翌十九年の春の事なり。されば、其の以前に、夫人を山城伏見の屋形に送られしと云ふ事、如何あるべき乎。是一つ。次に、其の文意を見るに、方今天下分崩已に大變に及ぶとあり。天正十八年には、天下の大勢、全く豐臣氏に歸嚮し、海道第一の弓取と謂はれし德川公だにも、太閤の馬前に跪きて、唯、其の意に悖らん事を恐るるの有樣なれば、天下分崩已に大變に及ぶ抔と、云ふべき理由なし。且つ、小田原會見後、夫人を人質として伏見に置きたるあらば、「未だ公の去就如何を聞かずと云ひ、宜しく公義に循ふべし」抔と云はるゝも、謂れなきことに似たり。是れ二つ。此の二つの疑團は、前後の文意を照合するに至つて、益々氷釋し難きを覺ゆるなり。

然らば、此の御文は、何時卿に寄せられしものかと謂ふに、是は、慶長五年關ヶ原合戰の前に、京都より、密に贈らせ給へるものと見るを穩當とすべきなり。德川公、上杉景勝を征伐せんとて、大軍を率ゐて東に下るに先ち、卿は公に請ふて、早く奥州に下向あり。然るに德川公、東征の留守中、石田三成西國の諸侯と牒し合せて兵を擧げ、二條城の留守鳥居元忠等を攻殺し、諸侯の人質を大坂城に取入れんとて、以ての外に騷動せり。此の時田村氏は、伏見の藩邸に在りて、卿が關東方なるや、將、石田方なるやを知らせ玉はざりしゆゑ、

急に密使を奥州に下して、自身の覺悟を卿に告げ、此の際、正々堂々公義に從ひて、去就を決し玉ふべき旨を勸め給へるものあらん歟。之を天正十八年の御文とすれば、文意の解し難けれど、之を慶長五年の御文とすれば、前後の事情誠に明白にして、一點の疑ふべきものなきを覺ゆ。史眼炬の如しとの評ある齋藤竹堂先生が、是を天正十八年の事とせられたる、何か別に見る所ありしにやいぶかし。猶博士の垂敎を請ふ。



雜報

雲のうへ

●御歌會始　本年の歌御會始は、去月十八日をもて、宮中にて行はせたまひぬ。午前十時三十分、兩陛下、鳳凰の間に出御あらせられ、御式の次第恒の如くにして、德川慶喜公の讀師をつかふまつりたる、例にましてめでたかりしとぞ。拜觀を許されたるは十二名なり。是れも常より多し。さて御製御歌を始めたてまつり、詠進撰歌、左の如し。

『新年梅』

御製

たちかへる年の朝日に梅のはな
かをりそめたり雪間なからに

皇后宮御歌

大君の千代田の宮の梅のはな
ゑみほころひぬ年のはしめに

東宮御歌

あらたまの年の始の梅のはな
見るわれさへにはゝゑまれつゝ

東宮妃御歌

あたらしき年のほきことといひかはす
袖にもかをる梅のはつ花

元帥陸軍大將大勳位功二級彰仁親王

さかえゆく御代のしるしか新たまの
年立つ庭に梅の花さく

海軍中將大勳位功四級威仁親王

あらたまの年立つやかてさく梅に
いよ〱にほふ君か御代哉

侍從長從一位勳一等侯爵臣藤原朝臣實則上　德大寺

霜ふかき軒端の梅もあらたまの
としの初日ににほひそめつゝ

宮内大臣議定官陸軍少將從二位勳一等子爵臣藤原朝臣光顯上　田中

大君の千代をふゝめる梅の花
さくべくなりぬ年のはしめに

御歌所長樞密顧問官兼選者點者正三位勳一等男爵臣藤原朝臣正風上　高崎

さきいてしのきはの梅よかきそめの
我か言の葉に匂かさあむ

讀師　從一位臣源朝臣慶喜上　德川

年の立つあしたうれしと窓のとを
あくれは匂ふのきの梅か香

講頌　正三位伯爵臣源朝臣重朝上　大原

あらたまの年の立枝の梅のはな

君にさゝげよ千代のかをりを

發聲　御歌所參候雅樂部長正三位勳五等子爵臣源朝臣有良上　綾小路

のどかなる春をむかへし心地して
年の立枝のうめかをるなり

講師　御歌所參候正三位子爵臣菅原利堅上　前田

年あけてむかふまなびの窓のとに
まつひもときぬ梅のはつ花

講頌　正四位子爵臣藤原朝臣以季上　大宮

あらたまの年を迎へてうれしけに
老木の梅もさきそめにけり

講頌　御歌所參候正四位子爵臣源朝臣忠敬上　水野

あふきみの雲居の庭にかをるあり
年の立枝のうめのはつはな

奉行　御歌所參候從三位臣平朝臣信成上　長谷

春またてのどかなる世はあらたまの
年の始にうめもさきけり

講頌　正五位男爵臣源朝臣親雄上　本堂

あらたまの年の始におくれしと
おいたる梅もはなさきにけり

奉行　御歌所參候正八位勳八等臣源朝臣有經上　植松

萬代とはやすつゝみの聲きゝて
垣根の梅もほゝゑみぬらん

撰歌　權掌侍正六位藤原道子上　小池

梅の花ほゝゑむみれは草も木も
うれしき年のはしめなるらむ

同　宮內屬臣中臣鹿島連胤德上　東

さきいてし軒端の梅をまつほめて
年のほきことといひおくれ髭

同　皇后宮職雇穗積小舟上　鈴木

大君のみうたはしめにうたはれて
梅もうれしき年やしるらむ

同　東京府平民水野鎮三母重子上

御製

たちかへる年の朝日に梅のはな
　かをりそめたり雪間なからに

皇后宮御歌

大君の千代田の宮の梅のはな
　ゑみほころひぬ年のはしめに

東宮御歌

あらたまの年の始の梅のはな
　見るわれさへにほゝゑまれつゝ

東宮妃御歌

あたらしき年のほぎことといひかはす
　袖にもかをる梅のはつ花

元帥陸軍大將大勳位功二級彰仁親王

さかえゆく御代のしるしか新たまの
　年立つ庭に梅の花さく

海軍中將大勳位功四級威仁親王

あらたまの年立つやかてさく梅に
　いよ〳〵にほふ君か御代哉

侍從長從一位勳一等侯爵臣藤原朝臣實則上　德大寺

霜ふかき軒端の梅もあらたまの
　としの初日ににほひそめつゝ

宮内大臣議定官陸軍少將從二位勳一等子爵臣藤原朝臣光顯上　田中

大君の千代をふゝめる梅の花
　さくべくなりぬ年のはしめに

樞密顧問官兼御歌所長正三位勳一等男爵臣藤原朝臣正風上　高崎

さきいてしのきはの梅よかきそめの
　我か言の葉に匂かさなむ

讀師　從一位臣源朝臣慶喜上　德川

年の立つあしたうれしと窓のとを
　あくれは匂ふのきの梅か香

講頌　正三位伯爵臣源朝臣重朝上　大原

あらたまの年の立枝の梅のはな

君にさゝけよ千代のかをりを

發聲　御歌所參候雅樂部長正三位勳五等子爵臣源朝臣有良上　綾小路

のとかある春をむかへし心地して
年の立枝のうめかをるなり

講師　御歌所參候正三位子爵臣菅原利鬯上　前田

年あけてむかふまなひの窓のとに
まつひもときぬ梅のはつ花

講頌　正四位子爵臣藤原朝臣以季上　大宮

あらたまの年を迎へてうれしけに
老木の梅もさきそめにけり

講頌　御歌所參候正四位子爵臣源朝臣忠敬上　水野

あふきみの雲居の庭にかをるあり
年の立枝のうめのはつはな

奉行　御歌所參候從三位臣平朝臣信成上　長谷

春またてのとかなる世はあらたまの
年の始にうめもさきけり

雜報

あらたまの年の始におくれしと
おいたる梅もはなさきにけり

講頌　正五位男爵臣源朝臣親雄上　本堂

萬代とはやすつゝみの聲きゝて
垣根の梅もほゝゑみぬらん

奉行　御歌所參候正八位勳八等臣源朝臣有經上　植松

撰歌

權掌侍正六位藤原道子上　小池

梅の花ほゝゑむみれは草も木も
うれしき年のはしめなるらむ

同

宮內屬臣中臣鹿島連胤德上　東

さきいてし軒端の梅をまつほめて
年のほきことといひおくれ冕

同

皇后宮職雇穗積小舟上　鈴木

大君のみうたはしめにうたはれて
梅もうれしき年やしるらむ

同

東京府平民水野鎮三母重子上

海原の浪もしつかに年たちて
　はるめくいそにうめかをるなり
　　愛知縣平民貝谷鉦一郎上

同
あらたまのとし立つ庭にさく梅は
　たゝ一花もうれしかりけり
　　秋田縣平民石川老之助上

同
うれしくも年の始に梅さきぬ
　かめにやさゝむかさしにやせむ

●●●●●●●**廸宮殿下御近狀**　大磯なる鍋島侯爵別邸にわらせらるゝ、皇孫殿下には、御寒さの御障りもあらせられず。頗る御健勝に渡らせられ、毎月曜日には御體量を量り參らする例なるが、本月初回、即ち六日には、一貫九百七十目、次回十三日には、二貫目、第三回には、二貫五十五匁、第四回二十七日には、三貫七十匁なりしと。かく、益、御生長あそばされ、日ごとに御智慧のまさるに從ひ、高尙なる御玩具をも好ませらるゝやに承りぬ。又殿下には、上部御齦にも、御生齒の兆あれば、本月中旬には、いよ〳〵御齒を拜するを得るならむといふ。目下、御乳人の奉侍するは、朝夕乳二回のみにて、去る二十日頃より、一日三四回鳥肉のソップを召させられ、外に、牛乳を用ゐらるゝことは舊のごとく、尙他の御食物を望ませらるゝ御模樣あれば、この中旬過ぎには、少量づゝの御粥を參らせ、漸次、御乳人を廢する事となりぬべし。また此の頃は、御抱き申上ぐるものゝ膝をのり出でさせられ、少しづゝ御這ひ遊ばさるゝやに承はりぬ。尙、沼津なる川村伯邸に御移轉のはずなりしが、同地に、痲疹流行すとて、一時御見合せとなり、本月中には、何れにか、御治定あらせらるゝといふ。

●●●●●●●**常宮周宮兩殿下**　相州小田原御用邸御避寒

の、常宮周宮兩內親王殿下には、嚴しき昨今の御寒さの御障りもなく、いと御すこやかにわたらせられ、毎朝午前七時頃、御起床あらせられ、御朝餐を濟せられし上、八時半より九時までの間に、御學問に就かせらる。麗かなる御日よりには、御邸內及び、海岸等を御運動せさせたまひ、御機嫌麗しき由にて、夜は九時半頃、御就眠あそばさるゝやに承りぬ。

●小松宮御渡英●●●●● 來む六月、御擧行の英皇戴冠式には、各國より、夫々御名代若くは代理をつかはせらるゝ由なるが、我が皇室よりは、御名代として、小松元帥宮殿下に御內命をおほせつけられたりと洩れ承りぬ。さるは、殿下は、二回までも歐行あそばされ、わけて、英國皇室とは、御親密に渡らせらるゝ故なりと。かくて、來む四月中旬御出發の御都合と相成るべく、花房別當、丹羽家令の內御隨行、其の他五十君御附武官、黑澤副官も隨員たるべしと聞きぬ。

●御安產御祈念●●●● 東宮妃殿下御姙娠に付き、九條公爵家より、京都洛西梅宮神社へ、御安產祈念の願ありしが、去廿一日は滿願なれば、公爵代理家扶朝常順氏同神社に參向し、神殿下の發砂阿乎比江の二品を受け、午後八時七分發列車にて、歸京せりとぞ。今其の御由來を聞くに、嵯峨天皇皇后、有智子御方入內の後、御子ましまさゞるを歎かせられ、同神社に御祈願あらせられしに、月を經ずして御懷姙あらせられしかば、御安產の御祈願ありて、神殿下の眞砂を御產家に布き玉ひしに、少しの御惱みもなく、御安產あらせられたり。即ち、仁明天皇に渡らせ玉ひしが、爾來皇室の御安產御祈願あるはさらなり、九條家に於いては、代代祈願を欠く事なく、昨年皇孫御懷姙に際しても、

同様御祈念ありき。右二品の中、阿平比江と稱するは、八寸と七寸五分との一對を靑竹箆にして、二品共、公爵より、東宮御所御內儀へ、內々奉られたりと。

●故範子殿下の遺髮塔　來む十七日は、山階宮晃親王の四年祭にあたらるゝにつき、同宮家にては、その日、おごそかなる御祭事を擧げさせられこれとゝもに、菊麿王妃、故範子殿下の御遺旨により、御父君に御由緒ある、山城國勸修寺へ、御遺髮をかくしまつらるゝとぞ。

●女官の陞任　去月二十三日、左の通り御沙汰ありたりといふ。

任典侍　權典侍正四位　柳原愛子
任權典侍　掌侍從五位　姉小路良子
任權掌侍　掌侍正六位　小池道子
依願免本官　掌侍　樹下範子
掌侍に準じ取扱候事　正五位　樹下範子

●歌道の光榮　本年の御歌會始めの撰歌と爲り、御前披講の光榮を得たるは、次の六氏ありと云ふ。

東京府麴町區宮城內　茨城縣士族　小池道子
東京市牛込區市ヶ本村町十七番地　茨城縣士族　東胤德
東京市麴町區上二番町十六番地　三重縣平民　鈴木小舟
東京市小石川區茗荷谷町八十九番地　東京府平民　水野重子
愛知縣熱田町　平民　貝谷鉦二郎
秋田縣南秋田郡豐川村　平民　石川老之助

小池道子刀自は、永く宮廷につかうまつりて、斯道に志あつく、世の聞えも高き人なり。東胤德氏は、宮內省內事課につとめられ、其の家、世々國文篤學の譽れある人なるが、ことに水野重子刀自は、故水野遵氏の未亡人にして、ことし四十五歲なり。貞淑の性にして、姑に事へて、男鎭三氏、（法科大學生二十六歲）の成業をたのしみ居れりといへり。また遵氏と均しく、名古屋の生れにて、兄を金森龍といひ、先代より漢籍詩文の家にて、氏も、現に漢學の敎師なりといふ。重子が歌道に心掛けたるは、僅かに四年前なるに、早くも預撰

の榮を得たるは、稀ある譽といひつべし。そが師の君は、御歌所の植松氏ありといへり。

●詠進歌數　歌御會始めの詠進總數は、一萬四千十八枚にして、昨年の詠進總數一萬二千三百五十七枚に比すれば、多き事一千六百六十一枚にして、之れを別てば左の如くなりとぞ。

△皇族御詠進

懐紙	一〇
計	一〇

△臣民詠進懐紙

御前披講	一八	神官職員	一九
高等官	一一	華族女學校職員生徒	一四
華族	四〇	京都向陽會々員	二七
女官	一五	跡見女學校生徒	四七
御歌所	一三	計	二〇四

△臣民詠進竪詠草

高等官	一八八	女子高等師範學校生徒	七四		
華族	三八	大日本女學會々員	二三三		
華族女學校生徒	七九	跡見女學校生徒	八四		
東京府	七〇五	京都府	六六三	大阪府	四四七
神奈川縣	一四〇	兵庫縣	二七五	長崎縣	二一八
新潟縣	三三九	埼玉縣	一七四	群馬縣	一六九
千葉縣	二八二	茨城縣	二四三	栃木縣	一七四
奈良縣	一〇五	三重縣	四〇六	愛知縣	一一六七
靜岡縣	二九〇	山梨縣	二二五	滋賀縣	二三七
岐阜縣	三〇四	長野縣	六三〇	宮城縣	二七五
福島縣	二六四	岩手縣	一三九	青森縣	一八九
山形縣	三八三	秋田縣	三二一	福井縣	九九
石川縣	一一二	富山縣	一二四	鳥取縣	五四
島根縣	二七〇	岡山縣	二三六	廣島縣	二七〇
山口縣	三四八	和歌山縣	六五	德島縣	一三二
香川縣	九七	愛媛縣	一五二	高知縣	七三
福岡縣	二二二	大分縣	一三六	佐賀縣	一一七
熊本縣	四五四	宮崎縣	八〇	鹿兒島縣	二五七
沖繩縣	三八	北海道	一五九	臺灣	三五
海外	一三	計			一二九、九三
外に進式	四一八	期日後到着三九三			
總計					一四、〇一八

●名古屋と歌　年々、詠進歌數の最も多きは愛知縣にて、預撰の榮を得るもの亦多し。本年も、千百六十七首の最大多數にて、其の一人は預撰とありたるのみか、他の一人水野重子も、今は東京府に籍あれども、等しく名古屋人なりとぞ。名古屋の斯道に篤きこと、獨り、御歌所にその地の人の多きのみならじ。

●室町典侍の薨去　紅梅典侍室町淸子の方には、客臘以來、病褥に臥せられ、その後、經過宜しからず、去月初に至りて、頗る危篤に瀕し、特旨を以つて、正三位に叙し、勳一等寶冠章を授けられぬ。かくて、岡侍醫局長以下、各侍醫には、百方力を盡されたるも、終にその甲斐なく、去月十日午前八時、遂に薨去せられたり。尙は遺骸は、同日平河町の自邸に引取り、葬儀は、同じ十四日をもて營まれ、靑山共同墓地に葬られしが、享年六十三なりといふ。

梅のかをり

●貞婦の鑑　たとへ修身科をゝさめたりとて、たゞに知るのみにて之を行はずんば、決していふにたらず。目に一丁字なくとも、美しき心に基きたるよきふるまひは、いともたふとく、かつは人々の賞讃するところなり。東京府北豐島郡尾久村大字山谷、農齋藤紋十郎妻イノ(三十八年)は、良人との間に、長男淸次郎(十六年)二男金五郎(四年)長女タケ(十四年)二女トメ(十二年)三女チヨ(八年)の五人の子ありけるに、十年ばかり前なりけん。夫紋十郎は、不圖僂痲窒斯に罹り、農業にいそしむこともかなはざれば、イノは一人にて、五人の子を相手に業を勵み、看病もをさ／＼怠りなく、あるかなきかに生活したりしも、昨年十一月中、紋十郎は、遂にかへらぬ旅におもむきぬ。さはれ、葬式をいとなむべき便もなかりしかば、長男の淸次郎を他家の手傳にやり、金五圓をかりて、やうやうに之を濟せたりき。これらの貞實なること、あたりの人々の噂となり、やがて千住署の知る所となり、其の筋へ、ちかぢか上申の上、何分の沙汰あるべしといふ。

●奇特なる工女　王子東京製絨會社の工女に、菅沼いち(茨城縣久慈郡湊町)、小林せい(新潟縣北魚沼郡)、高野みつ(富山市)といへるものあり。

去る廿八年より、募集に應じて職工となりたるものあるが、其の後歳年勤勉一日の如く、日々の賃錢を一錢たりとも徒費せず、貯蓄したる金高、昨年の末に至り、三百九十圓となりし故、故郷にて、親達が買入したる田地受戻したしとて、送金の手續を會社へ依頼しければ、同社の重役等もほと〳〵感心し、他の職工の模範ともなるべきものなりとて、現給三ヶ月分の賞與金を與へて、その貯金に加へ送金したりといふ。

●節婦忠婢旌表　左の兩人は、今度、吉原岡山縣知事より、旌表を受けたりといふ。明けき大御代、賞して善をすゝめたまふとはいへ、かゝる人の數々多くなりゆくこそねがはしけれ。

岡山縣赤磐郡笹岡村松田長三郎妻

常　盤

資性温良、孝貞の志厚く、曾て松田家に嫁するや、舅桂太郎財産を浪費し、大に家政を紊り、經濟頗る窮困を來たし、剩へ、明治二十八年三月以後、舅姑倶に病患に罹りたるを以つて、日夜病褥に侍し、専ら孝養看護を竭したるも終に死亡し、家政益々困迫せり。夫長三郎は、常に他に在り。家務を整理する能はざるも、常盤は、克く其の艱難に堪へ、堅く節倹を守り、自己の衣食を節して、祖父母嗜好の衣食を供給し、奉養扶掖至らざるなく、且つ三兒を扶育し、夫をして、毫も内顧の憂なからしむる等、其志操を變せざる多年一日の如し。洵に奇特とす。因て、其爲賞盃一個下賜候事。

岡山縣都窪郡妹尾町

多　田　政

資性柔順、家素と貧、明治十六年八月片山家に保姆となり、至誠忠實、夙夜赤心兒女の保育に從事し、傍ら農事厨房の業を掌り、終に家務の一部を委託さるゝに至り、益々勤む。曾て當時

の戸主精吾奢侈に耽り、家運の衰頽に沈まんとするや、專念主家の保持に恭謹し、自ら節倹を守り、引いて、家風をして誘掖感化せしめ、家政を挽回するに至る。且、自己の給金は、重に實母の孝養、妹が養育の資に充つる等、忠實孝道を勵むこと十有八年一日の如く、其の素行洵に奇特とす。因て、其爲賞金參圓五拾錢下賜。

●帝國教育會女子講習會　帝國教育會にては、中等教育に從事せんとする女子、及び小學校女教員にして、更に其の學力を高めんとする者、並びに一般女子にして、其の智識を博めんとする者の爲めに、女子講習會を開設するの計畫ありしが、愈々二月二日(日曜日)午前九時より、毎日曜日同時刻、同會講堂に於いて開會し、女子教育社會の、中樞たるべき優良なる女子を教育せんことを期すと。入會料五十錢、講習料毎月六十錢なるよし。

●本年の美術展覽會　美術協會にて、本年開設の美術展覽會は、觀古美術會開設以來、第三十二回に相當するを以つて、來五月赤十字社創立廿五年の紀念會を開くを機として、特に該展覽會の盛大を期せんとて、一般の美術家及び美術工藝家に向つて、傑作の出陳を促し、規則を設けて之を發表せりとぞ。會期は、四月一日より五月廿日迄にして、出品種類は左の如し。

繪畫　彫刻　塑型　鎚金　建築　室內裝飾品
圖冶　陶磁　七寶　漆器　蒔繪　刺繍織物圖按

●姫塚池の碑　姫塚池とは、下谷西町あたりの字にて、往古は、大きなる池なりしが、備前新太郎少將、東叡山北部の土を取りて、之を埋めしに、やがて不忍辨天の中島も出できにけり。されど、其の沿岸はあまり知るものなく、幕臣栗原某、僅にそが地圖を藏せしと聞きしに、近頃西町舊佐竹邸七軒町寄の所に、姫塚池の碑と云ふものありし

よし傳へらるれば、世の地理歴史家は、いまにその捜索につとめつゝありと。

●醫科大學の姙娠無料往診　東京帝國大學醫科附屬醫院にては、今回、市内居住の姙婦にして、生産時來診を受け難きものには、通報次第、産科專門の醫員を派出し、診療せしめ、診察料及び費用は、別に要せざる由。また、九ヶ月以上の姙婦にして、入院を乞ふものは、診察の上、官費入院を許すと云ふ。

●日比谷公園の花木　日比谷公園造營工事は、着々進捗しつゝあり。來る三月迄には、大體の區劃も定まり、花木等の植込をも爲す豫定にて、新宿植物御苑及び、農科大學、小石川植物園等に在る内外の樹木、花卉類の下渡方を、目下出願中なりとぞ。

●懸賞普公唱歌　帝國教育會の募集したる懸賞普公唱歌は、審査の結果、田中壽治といふものの作を當選と決したりと。因に記す。東京教育會が、大和田建樹に作歌せしめたる、府民公德唱歌も、さきの委員會に於いて、同じく審査決定せりといへり。

●時計　女持の時計は、西瑞製十四金無双中硝子、廿五圓より三十五圓、十八金は、三十圓より八十五圓迄、又米國製は十八圓、無双側中蓋中附無地、又は斜子にて、六十圓乃至七十圓、無地側ダイヤモンド入、八十五圓より百圓位なり。銀側にては、瑞西製無双側シリンドル、八圓五十錢より十三圓の品流行す。米國製アンクル、十六圓五十錢より十九圓位のもの、又人氣あり。此の外、金着側も相應に行はれ、米國製十九、二十形無双斜子側器械は、流金切落しアンクル、男持ちは、二十圓以上三十五圓、女持は、十八圓より三十圓

位の相場なり。附屬品中重なるものは、矢張り金鎖にて、別段流行と云ふほどの事はなけれど、十八金七八匁より十三匁位の白金交、五十圓より八十五圓位、並鎖にては、銀製三圓前後、赤銅四五圓のもの相變らずポツ〳〵賣行くのみにて、金着の四五圓臺の品、一時大に當世紳士の人氣に叶ひしも、近頃は衰へたり。婦人持ちにては、十八金一本物、十五圓より二十二三圓、同白金交十七圓より二十五圓、十八金二本立緒締附、二十五圓より三十五圓、並物は、流行大概男持と同じ。夫より提物は、十八金にて、七八圓の磁針が普通なれど、上流にては、彫刻付無双寫眞入、同印材等流行の傾きあり。形は各自の嗜好によれど、先ゴルート形、古鏡形、及び自形等にて、價格は十圓より二十五圓、金製鉛筆、四圓五十錢より十五圓等賣行多し。女持ち金製の房は、六圓より十二圓位なりと。此の他、新意匠の品もあれど、一々記さんは管々しければ省きぬ。

八しまのほか

●●●●●眞の活人形　米國ボストンのボストツク遊苑にて、此の程、見世物に供せられたる、チクウィタと稱する玖馬産の一西班牙婦人は、齡三十歳なれども、身長は二十六吋に過ぎず、體量僅に二十封(二貫四百目)なり。此の種の矮人は、普通に容貌醜く、性質不活潑なるものなれども、此の女は、頗る美人にして、態度極めて活潑なるのみならず、聰明なる性質を有し、教育あり、西班牙語は勿論、英佛獨伊の語に通じ、音樂、唱歌、舞踏等貴婦人としての資格は、何一つ具はらざる所なしと。

●●●●●●●婦人慈善家の逝去　英國監獄組織改良に關し

て、有名なるエリサベス、ハンビユリー夫人は、昨年末、サレー州のリッチモンドに於いて、百九歳の齡を以つて逝去したる由なり。夫人は、ジヨン、サンダーソンの末子にして、千七百九十三年倫敦のカッスル街に生る。千八百年、夫人の父はユーアフィールッ附近に居を移したるが、後倫敦に歸り、フライ夫人と共に、監獄組織の改良に盡力したり。當時、囚徒の取扱方は、不規律極まるものにして、虐遇至らざるなく、殊に女囚徒の取扱方は亂暴なりしが、夫人の力に依りて、大に改善せられたりとなん。夫人の長子は本年八十歳なるが、尚鑁鑠として、有名なるハンビユリー藥種店の業を營み居れり。夫人は、百歳の時まで毫も視力衰へず、百七歳の中頃まで起居自在なりき。夫人の孫、及び、曾孫は數多く、親屬中には、外務次官サー、サンダーソンを始めとし、知名の人多しとぞ。

▲**婦人用殺人器**　歐洲にて、無政府黨の婦人、及び、其の他の毒婦等が使用する殺人器には、種種工夫を凝らしたるものあるが中に、最も斬新なるは、杖の中にダイナマイトを仕込みたるものにて、杖の内部を空筒にし、之に、激烈なる爆裂藥を塡充し、其の上に硝酸、又は硫酸などを貯へたる小瓶を置き、杖を打振る時は、瓶中の藥液、忽ち流出して、爆裂藥中に滴下し、轟然破裂する恐るべき仕掛のものなり。之れに次ぐは、封蠟中に爆裂藥を仕込み、之を火に翳して、破裂せしむる工夫のものなり。其の次は、笄（ヘイア、ピン）の形に造り、玉類を鏤めたる小さき毒藥の劍にして、之を髮に挿す笄と見せかけ、之にて人を突く時は、毒分全身に廻はり、苦悶して死するものなり。又鋼鐵の指環の上に、鋭利なる小さき突起物あり。

其の內に、毒物を含み、之を以つて人を刺す方法もありと云ふ。

▲女優の驕奢　有名なる佛國の女優サラーベルナールが、此の程、巴里の劇場に於いて、テオドラの劇を演じたる時の服裝は、巨多の寶石を以つて飾られたる、頗る、華美なるものありしが、其の服の價は、二百萬圓ある由なり。又、同女優の平素着用する服は、其の價四萬圓なりと。

●小兒の食慾と其の好物　英國の一小學校教師は、兒童の食量に就きて、熱心に研究したる結果、兒童の食量は、殆ど際限なく、大人に優るも、劣る所なきことを確めたる由。又、兒童の最も好める食物は勿論菓子、及び果實なれども、之に次ぐは、コンデンスミルク、及びチヨコレートありといへり。

●來るべき硝子の時代　佛國の科學者アンリーヴネーは、近來硝子の用途著しく增加し、尙、益す增加せんとする傾向あるより、遠からずして、吾人は、硝子の家に住む時あるべしと云ひ、近時の發明に係る硝子を說明し、將來の時代を想像して曰く、此の程發明せられたる硝子と稱するものは、石の代りに、家屋の基礎に用ゐられ、又、家屋の壁を築くに用ゐらるゝものにして、屢ば、實驗せられたる結果、石よりも良好なる成績を得たり。壁に用ゐらるゝ石硝子は、中に穴を有し、其の穴にパイプを通じて、冷水、湯、瓦斯、電氣等を送り得るものにして、此の硝子にて造りたる家に住するものは、健康と安樂とを兼ね得べし。今後、階段、欄干、火爐等を造るに足るべき、硝子の發明せらるゝは必然にして、椅子もテーブルも、皿も茶碗も、硝子にて造らるゝ事となるべし。又食刀、及び肉叉の刄が、硝子にて造られざるまで

も、其の柄は、硝子にて造らるゝ事となるべし。硝子にて造りたる家は、絶えず、孰れの部分も奇麗に掃除することを得。且つ、其の面の滑かなるため、塵の積る事なく、蜘蛛の巣を造ることなく、實に衛生上の利益は莫大なりとす。巴里にては、近來鋪石の代りに、硝子を用ゐ居れるが、堅牢にして、人畜の歩行、諸車の運轉に適す。其の唯一の缺點は、音の激しきことなり。こは、追々に改良せらるべし。兎に角、硝子の用途は次第に擴張せられ、吾人が硝子の家に住するは、遠きに非ざるべきか。但し、器具も家屋も、悉く硝子にて造ることゝならば、極めて單調となり、殺風景を免れざるべし。如何にしても、此の單調を避け得べきは疑問ありとす。云々。といはれしよし。

落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る、但し漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ゐるべからず。

二、文体は投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、五行内外の事。但し可成は、フリガナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は差閊なけれど、便宜の所へ、必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は隨觀隨目何にてもよけれど、有益にして興味あるものを望む。

五、〆切期限は、目次並題の歌文と同日の事。用紙は半紙、又はハガキにてもよし。

▲栗岡秋子さんの御問ひの、お妹子をおとなしく成さるの方法は、成丈け、一ッ二ッ年長のおとなしいお友達を、御宅へ御招きになつて、人形の着物を縫ふされや、爲になる繪本などを御借しなさつて、お遊ばせ成され、又は、お妹様が、歌の會や、琴のおさらひにお出での時は、必ずお伴な

されば よいかと思ひます。(信濃、松野みさを子投)

▲皆様如何で御座います。郵便配達は、誠になつかしいではございませんか。ことに待ちに待ちたる我愛讀の女鑑など、早う持つて來てくれました時は。(信濃、まつ子投)

▲小兒之行爲を面白く記述したならば、小兒教育の一はしともならうかと思ひますから、本誌に御掲げ下さい。(信濃、まつ子投)

▲まことに御言葉のとほりでござります。本誌も、ます／＼盛んになつてきましたから、新趣向を立てゝ、諸媛を滿足せしむることを期して居ります。(記者)

▲過る年、久しく茶禮初學をいださせ給ひし、闕不羨先生の御住所を、くわしく御教へ下さいまし。(東京、しづ子投)

▲御とひの闕先生は、芝公園地第廿五號七に、いらつしやいます。(記者)

▲東京ちどり子孃に御尋ねまをします。私も、米澤の花子さんと同樣に、自分で資金を拵へて、學問したいと思ひます。最も其の目的は、將來、圓滿なる家庭の主婦として必要なる、心と身を修めたいのであります。若しよい手段がありますならば、是非、お敎へをお願ひ申します。(岡山、ことし子投)

▲東京ちどり子さんに御答へ申します。靴と下駄の優劣は、一般の女學校の御方を標準としたのでありますが、それとも、何歳には下駄、何歳には靴といふ樣に、別に善き御考へでも、御座いますか。(東京、とし子投)

▲今度東京府教育會にて、理科と家事の女子講習會を開けるよし承はり候。もし貴社にてお分かりならば、その會場と、會費と、期限とを御教示被下度候。(浦和、須磨子投)

▲會場は神田區東京府第一高等女學校内ですから同校へ御問合せになれば、極く明瞭にわかります。(記者)

▲わたしの國は、毎年雪の多いところで、此の頃あぞは、積雪數尺に及び、往來もたえんばかりでわります。わたしあぞは、つれ〴〵なるまゝ、讀書で日を暮らすやうなものですが、近頃は、どうも、郵便物がおそく屆くので、一層困まりますよ。(越後、愛讀女史投)

▲通俗法律案内といふものを、貴社女鑑へ掲げて下さいませんか。折〻伺ひたい事ができて困まります。(長崎市困却女投)

▲私は御茶の水の、高等女學校に參つて居るものです。一昨日、學校の歸り道にお友達の〇〇〇子さんが、ッヒ二十間ばかり先で、銅貨だか銀貨だか一つ拾つたやうでしたが、そのまゝ、交番所の前を通り拔けて、それをお屆けなさらなかつた。誠に淺ましい心懸ではありませんか。(本郷、たけ子投)

▲かねて我が國に來游中ある、英國の女子敎育家ヒユース孃は、先頃奈良の方に居られると承はりましたが、只今はどちらに居られますか。何卒その宿所を落葉籠までも(横濱、磯部かよ子投)

▲ヒユース孃の宿所は、麴町區下二番町二十六番地でわります。(記者)

●新刊批評

●改良服圖說　醫學士山根正次氏著

警察醫長山根醫學士、久しく衣服改良に就きて研究を遂げられ、頃者、其の所見を平易に敍述して新に一書を成す。本書即ち是れなり。卷首に、氏の考案に係れる改良服の圖二十餘種を掲げて、本文と相對照するを得せしむ。和洋相酌み古今相較し、現今着用しつゝある男女衣服の弊害より。改

良服の製法、利益等にまで、層々説き及ばし頗る其の要を得たり。心を此の問題に傾くる士女の好資料たるのみならず、何人も一讀すべきもの。而して吾人は、殊に朝野敎育家の此の書を一閲せんことを望む。何となれば衣服改良は、刻下最も急功を感ずる一問題にて、之が實行は、男女學生より始むるを利とするが故なり。(東京市京橋區鎗屋町庚寅新誌社發賣)

●婦人之生活　醫學士山根正次氏著

本書は、先づ項を緒言、女兒の保育、處女の發育及月經、處女の攝生、妊娠、妊婦の攝生、妊娠の病苦及其の處置法、分娩、產蓐の攝生、產婦の障害及其の處置法、月經閉止の年齡、月經閉止に於ける障害、及び其の處置法の十二に分ちて、須要なる婦人の衛生法を懇ろに訓戒指示し、力めて繁を避け要を撮む、女子座右の寶典たるを失はず、苟も愛を自己の強弱、子孫の強弱及び國家の強弱に抱くものは、幸に本書を一讀すべきなり。(東京市京橋區鎗屋町庚寅新誌社發賣)

口繪の說明

●柳澤明子刀自の肖像並に遺墨　舊郡山藩主柳澤保恵伯母堂明子刀自、(皇后陛下の御姉君)昨年來、病に罹られ、去月七日、遂にみまかれたることとは、已に、本誌前號に記したるが、卷首に掲げたるは、乃ち其の眞影並に遺墨なり。刀自、由來淑德の聞え高き人なりしが、平素ことに、和歌、謠曲、茶の湯等を嗜まれたるよしにて、優逸の調甚だ少なからずといふ。

●山根醫長並に其の子女改良服着裝の圖　圖の中央に立てるは、山根醫長、その前に列せるは令息及び令嬢にして、いづれも、山根式の改良服を

着装し居る所あり。氏の主張する改良服は、雅にして華ならず。實用を旨とし、高價に失せず。専ら、衛生と經濟の二者を標準として、立案したるものなりといふ。尚、この圖は、本誌論説欄に掲げたる同氏の論文と、相參照して見るべし。

●御茶の水橋より女子高等師範學校を望む圖
此の圖は、特に説明を附するにも及ばざるべし。境靜に、樹茂り、遙かに、校舍の梢端より現はるゝ處、えも言はれぬ幽邃閑雅の趣あり。

●函館五稜郭にて氷を切取る圖　炎天燬くが如き八九月の候、諸子が、各所の氷店に入りて、アアもう一杯と咽喉を鳴らしつゝ呼ぶ、所謂函館氷は實に圖の如くにして得られ、軈がて、船積として、之を各地に配送せしものなり。

社告

懸賞和文募集

題　友の海外にゆくを送る文

二月二十日〆切

投稿は、必ず別項の投稿書式によるべし。

賞品

天　紅塵庵俗禪譯　獄の花　全一冊

地　標註雅文消息集　全一冊

人　三輪田眞佐子著　女子處世論　全一冊

女鑑歌文月次兼題

二月廿日
歌　朝鶯
文　餘寒見舞の文
二月九日〆切

三月五日
歌　故郷柳
文　希望
二月廿日〆切

三月廿日
歌　夜春雨
文　學校の樣子を問ひ合されしに答ふる文
三月九日〆切

四月三日
歌　行旅蕨
文　花見日記
三月廿四日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名
…………………………
…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名
……、……、……。……、……、……。……、……、……。……

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。
○天地人を取りし人には賞品を呈す。

大林弘一郎先生著

中等國文學史

全一冊
洋装美本
定價金六拾錢
郵税金八錢

從來國文學史の敎科書として出版せらるゝものを見るに多くは評論の高尙に過ぎて授業者には其の要を知るに難からしむるものあり又或は引例の歌文も奇古にして解し難きものあり或は其の材料の非常に煩多にして文部省規定の時間内に敎授し了ること能はざるものあり此等の事項は敎科書としては其の敎授上に少からざる不便と函難とを感ずる所にして實際之が任に當る各學校敎員諸氏の均しく遺憾とせらるゝ所なり本書は著者が多年の研究より得たる考案を本とし之を實地の敎授に徵し時間の配當材料の難易多少等には充分の調査を加へ且記述の體裁に至りては最簡明を主とし議論の高尙に失せざらんことを務め語調の流暢にして誦讀に便ならんことを謀り大に注意を加へたるものなれば中等諸學校に於ての敎科書として適當なるは固より言を待たず。

『本書の特色』殊に附錄として一の年表を附し之れによりて時代文學の發達沿革其の他を一目の下に見ることを得しめ又國文學に關係最深き漢文學の變遷を知らしめん爲特に歷代の漢詩文を蒐集して附錄の第二としたるは本書の特色とする所なり國語敎育の任に當らるゝ諸彥幸に一覽を辱うし本書の其眞價を認められば乞ふ敎科書として採定の榮を賜らんことを

發賣所
東京築地貳丁目
株式會社國光社出版部

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全壹冊
和裝美本
定價金卅錢
郵稅金四錢

本書は上長德の頃より下明治の初年に至るを九百年間に發出せし名媛紫式部、淸少納言、相模、阿佛尼、鵜殿よし子、弓屋しづ子、三島そや子、荷田蒼生子、西三條條實公後室、栢原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内荻子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち毎葉に其の作法を詳解し尚難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる終身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必らず無比の好伴侶たらん

發賣所　東京築地貳丁目　株式會社 國光社出版部

近日刊行

東京感化院長高瀬眞卿君著
高等教育會議議員湯本武比古君序
文學博士西村茂樹君題辭

教育 修身一夕話 家庭

學校教育の眞理を解說し家庭薫陶の要領を談論し和漢洋三千年間の英雄豪傑碩儒偉人の事蹟を引證したるものにして後進教育の任に當れる諸學校の教師職員諸氏は云ふに及ばず苟も子女を教育して國家將來の良臣民を造成せんとする家庭には必ず一本を備へざるべからざるの珍書なり紙數凡四百五十頁製本美麗にして趣味饒多なる挿畫あり而も定價は僅に金六拾錢郵便稅金八錢なり

發行兼發賣所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社出版部
（電話新橋二六九三）

女鑑

明治三十五年二月五日發行
每月二回五日廿日發行
第貳百四拾六號
明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

東京[illegible]丁目株式會社國光社印刷部印刷